



報 特 攻
 平成19年8月

第72号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 飯田正能
 発行人 栗原宏

靖國神社みたま祭

平成19年7月13日宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内各所や参道一面を明るく照らし出して「みたま祭」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかな雰囲気醸し出し、大勢の参詣者で賑う靖國神社「みたま祭」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13日～16日に、神社の正式行事として斎行されてから今年で満60年、61回目の節目の年を迎えた。

折柄、遊藝館入口奥の展示室には昭和22年「28年の「みたま祭」に奉納された画家・書家・作家・俳優・スポーツ選手・歌手など各界名士揮毫の懸け雪洞80点余が展示されているが、榎本健一・大河内傳次郎・高峰秀子・古川緑波・花菱アチャコ・伴淳三郎・尾上松緑・松本幸四郎・田河水泡・長谷川町子・横山小倉遊亀・川合玉堂・古今亭志ん生・徳川夢声・羽黒山等々懐かしい名士の墨痕名筆がずらりと掲げられ、御霊に捧げられた慰霊・鎮魂の誠の程が偲ばれる。

この「みたま祭」の由来や意味合いについては、東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』(平成10年8月・PHP P 新書)や、靖國神社社報「やすくに」第624号(平成19年7月1日)掲載の京都産業大学・所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、戦後間もなく靖國神社を所管する陸軍省では、軍の解散前に支那事変・大東亜戦争のために死没した軍人・軍属等213万余柱の英霊の大合祀祭の実施を申請したところ、当時の占領軍には、靖國神社焼亡という無謀な計画を推進しようとする空気が強く、駐日ローマ教皇庁代表・イエズス会ブルーノ・ピッター神父の尽力によりその暴挙は防がれ、昭和20年11月20日、昭和天皇の行幸・御親拝を仰いで臨時大招魂祭が斎行されたものの、その後間もない12月15日に、占領軍総司令部は「國家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保

目次

靖國神社みたま祭	1
「あゝ特攻」勇士之像第1号	1
福井県護国神社へ奉納	3
特攻勇士之像除幕式	3
(鹿児島県護国神社)	4
碑は語る特攻隊②	5
硫黄島にある陸海軍航空の碑	5
第二艦隊追悼式報告	9
フリーデンの十月二十五日	10
陸軍大尉若杉是俊(続)	16
平成19年度豫科練雄飛会慰霊祭	10
万世特攻慰霊碑慰霊祭	29
平成19年度旧鹿屋航空基地	29
特攻隊戦没者追悼式に参列して	30
知覧を訪れて	30
陸軍挺進部隊英霊の慰霊祭	31
義烈空挺隊慰霊祭に参加して	32
殉國沖繩學徒顯彰六拾二年祭	33
沖繩慰霊の日の現地新聞は語る	35
日本と中国の古代兵士の歌	36
泰山北斗の名将山下奉文大将	37
私の接した将軍達②	38
小畑英良中將の思い出	39
「陸軍挺進部隊外史」の	39
自衛隊空挺隊員の読後感②	43
報告事項・事務局より	63

全、監督並ニ弘布ノ廢止ニ関スル件」といふ、いわゆる「神道指令」を傳達し、政教分離の名の下に、特に靖國神社を攻撃目標として、精神面からこれをなきものにした。しかし、国民の間には、祖国のために命を捧げた戦没者の慰霊・鎮魂のことがまず第一に心にかかり、昭和21年7月、長野県遣族会の有志が自発的に上京し、靖國神社境内で盆踊りを繰り広げ、民謡を歌唱して戦没の御霊を慰霊するという義挙が行われた。これに啓示されて、翌22年7月からは、神社の正式行事として斎行されるようになった。靖國神社はやはり国民と共に在り、日本人の心の中に生き続けるのである。(飯田正能記)



特攻隊員一遺句
散るときは浮かぶときなり連の花
遺句
回天制空隊山本三男三郎少尉
第二十七振武隊 原田 葉少尉
野畔の草召出されて桜哉
献納者 会員 山崎重武



義烈空挺隊 関 三郎軍曹
遺詠
よしや身は
千々に散るとも
来る春に
また咲き出でん
靖國の宮
献納者 会員 山中浩太郎



義烈空挺隊 渡辺裕輔少尉
遺詠
恋闕至情是赤心
尊皇大義是臣道
磅礴天地宇内間
唯有神州不滅氣
献納者 会員 小林雅男



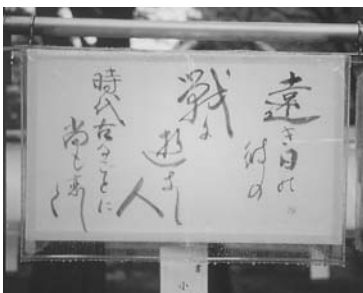
昭和天皇御製
国のため命ささげし人びとの
ことを思へばむねせまりくる
献納者 会員 桑原美智子



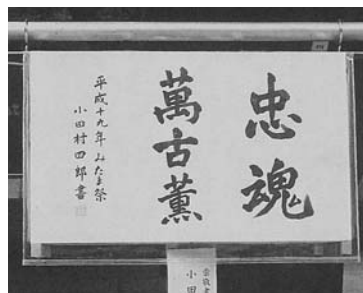
第百十一振武隊長鈴木泰治少尉
遺詠
若桜かくあれかすと己まが
愛機をかりて悠久の義
献納者 会員 金 文男



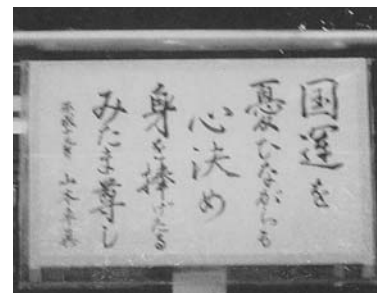
第六十七振武隊長長沢徳治少尉
遺詠
来る年もさきて匂へよ桜花
来る年もさきて匂へよ桜花
われなきあとも大和島根に
献納者 会員 柳澤喜三郎



遠き日の
彼の戦に
逝きし人
時代古るごとに
尚も恋しく
献納者
会員 小栗楓子



忠魂
萬古薫
献納者
会員 小田村四郎



献納者
会長 山本卓真

「あゝ特攻」勇士之像第1号 福井県護国神社へ奉納

理事 藤田 幸生

会報70号でお知らせした件について、最初の「あゝ特攻」勇士之像が、4月13日、福井県護国神社に無事、奉納された。

当日は、強風が吹き、雨が心配される天候であったが、時あたかも桜花爛漫、境内には花吹雪が舞う中、護国神社の春季例大祭の後、関係者約100名の参加の下、本殿における除幕式神事と

碑前での除幕式、奉納式が執り行われた。福井県出身の特攻隊員は、マダガスカル島攻撃隊員を含む62柱。多くの御遺族が参列された。本殿においては、昭和17年マダガスカル島に出撃前、高田高三海軍少尉によって御両親宛に書かれた遺書が、額縁入りでご遺族から直々に紹介された。除幕式は、英霊のお陰で雨も降らず、海自舞鶴音楽隊員

によるファンファーレを合図に、御遺族総員と関係者多数の手で紐が引かれ、童顔で凛々しい特攻隊員の像が、参会者の目前に現れた。「千の風になって」現れた英霊によって満開の桜が宙に舞う様子は正に感動的で、初々しいお姿の碑の前で、協会代表として次の式辞を申し上げた。

「本日、ここに、福井県護国神社におきまして、かくも盛大に「あゝ特攻」勇士之像、除幕式が執り行われますことは、私どもの最も喜びとするところであります。心からお祝い申し上げます。ご尽力いただきました、護国神社宮川宮司殿、偕行会・浅野会長殿、海友会・松井会長殿、特に島崎宗勝様、佐々木嵩様には、感慨深いものがあるうかと拝察申し上げます。

当協会では、一昨年から、大阪芸術大学の職員学生等よりなる「日本人の心を伝える会」(世話人代表・富田和夫)と協力して、CD「あゝ特攻」の製作頒布と、その利潤で全国52箇所の護国神社に、特攻勇士之像を順次奉納していくという事業を推進してきております。本日のこの行事は、その第1号除幕式で、誠に記念すべきものであり、協会にとりましても、極めて意義深く喜ばしいところであります。

福井県の皆様は、この遠大な事業の、言わば魁として、力を合わせて、場所、佇まい、台座の形の決定等、資金作り、維持管理の態勢確立などに至るまで、様々な新しい事柄に挑戦され、ご苦労の後に立派なお手本を作ってくださいました。今後の大きな推進力になりましょう。そのことに関しまして、敬意を表しますと共に心から感謝申し上げます。

「同期の桜」トランペット独奏があった。風が吹き、桜が舞う中、朗々と流れる音色は、参会者総員に深い感動を与えた。

台座に安置されました像は、特攻隊戦没者の象徴としてのお姿であります。デザインされた塚本 哲氏は、陸軍も海軍も、また、航空も水中も水上も空挺もあらゆる写真や記録を研究してそれぞれの要素を少しずつ取り入れてくれました。その結果、このような力強い決意を込めたお姿になったのであります。私達に何かを語り掛けてくれるような気がします。どうぞ、ご覧下さい。

協会では、CDの頒布や、今後、この像のミニチュア像の頒布事業などを通じて、広く皆様にご理解とご支援を仰ぎつつ、この像の奉納事業を続けてまいる所存であります。あと、何十年の歳月がかかるかわかりませんが、特攻隊のことを国民の皆さんに訴え続けることそのものが、慰霊顕彰はもとより、日本を再生していく力になってくれるものと信じております。この場にご参会の皆様と共に、努力してまいりたいと考える次第であります。どうか今後とも、ご支援、ご協力の程、よろしく御願ひ申し上げます。

最後にもう一度、ご尽力いただきました皆様に感謝申し上げますとともに、福井県特攻隊顕彰会の今後のご発展をお祈り申し上げます。ご挨拶いたします。」

引き続き、海自舞鶴音楽隊員による「同期の桜」トランペット独奏があった。風が吹き、桜が舞う中、朗々と流れる音色は、参会者総員に深い感動を与えた。



福井県特攻隊顕彰像建立記念 平成19年4月13日

特攻勇士之像除幕式

(鹿児島県護国神社)

理事長 菅原 道熙

今年の2月に入って、靖国神社から鹿児島県護国神社も像の受入れに大変関心を抱いておられる、とお話を伺い、野村浩平宮司に電話を入れたところ、速戦即決、「当社も春の例祭(4月13日)までに碑を建立させたい」ということになり、以外に早く第2号の「特攻勇士之像」の奉納入先が決定した。

その後神社から、例祭日には千名に近い参列者があり、落ち着いた雰囲気ではないので、前日に除幕式を挙げる旨の連絡があり、第2号の像が第1号より1日早く日の目を見ることになった。

4月12日正午から村松秀直筆頭弥直が斎主になって、先ず修祓、野村宮司、田中責任役員と小職の3人で除幕、大蔭・切蔭、清酒で清め祓いて除幕式は終了した。

「特攻勇士之像」は、既存の母子像の向かって左側、本殿に向かって参道の右側20米位入った所にその姿を現した。台座には岡山県産の「桜御影」が使われ、その名の如く基盤に淡い桜色が混じっていて、「あゝ特攻」の銘板

と見事に調和している。

一同は直ちに本殿に移り、建立奉告祭に移る。開式を告げる太鼓、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠と続き、撤饌、閉式の大鼓が高らかに鳴り響いて報告祭は終わった。殆んど人影を見ない静寂な境内の雰囲気にもまれて、厳肅かつ荘厳に、修祓、除幕、奉告の神事は滞りなく終了した。

この日、宮司は神事に携わることなく我々(責任役員4名、石材業者、造園業者各1名、小職)と終始行動を共にされた。

特攻の史実と日本人の心を伝える具象物として、「あゝ特攻」勇士之像は参拝者に無言で語り続けて下さるであろう。翌13日の例大祭では、宮司挨拶の中で、野村宮司は、勇士之像設置に至る経過について詳しい説明を加えて下さった。

鹿児島県護国神社には、自衛隊、警察、消防の殉職者も合祀されていて、例大祭が盛大であることでは、護国神社の中では屈指なのではないかと思われた。

勇士之像の右には参道に面して母子像が建っているが、その奥は慰霊碑地区となっている。しかしながら、その立地条件上、それらの慰霊碑は参道からは目視し難い。

これから特攻勇士之像は、母子像と共に否応なく参拝者の目に留まることになって、日本人の心を永久に伝えて下さることであろう。

なお、例祭では大勢の参列者を前にして二人の巫女が、琴の奏楽に合わせて明治天皇御製の「玉垣の舞」を演じて、厳肅な中に優雅な彩りを添えた。

玉垣の舞

わが國のためにつくせる
ひとびとの
名も武蔵野に
とむる玉垣



除幕：向こう側 野村宮司、手前 左田中責任役員 右小職



「あゝ特攻」勇士之像除幕式 平成19年4月12日 鹿児島県護国神社

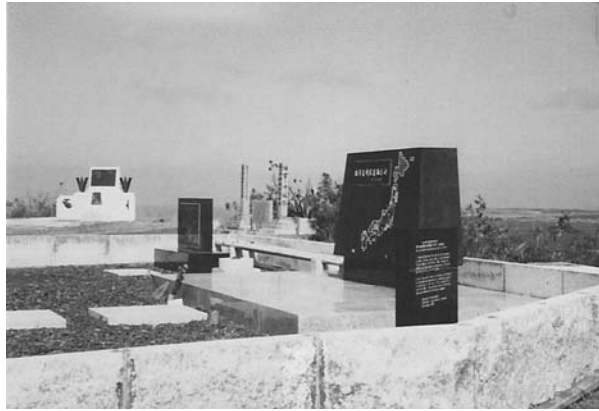


鹿児島県護国神社「特攻勇士之像」と母子像
(母子像の左後方は甲飛戦没者慰霊碑)

碑は語る特攻隊② 硫黄島にある陸海軍航空の碑

田中 賢一

硫黄島には関係ある陸海軍航空部隊名を刻んだ碑が二体建っている。それらの部隊については、既にこの会報で述べておいたので、その掲載号を紹介するが、二つの部隊については追加書き足すこととする。



遠方の碑は米軍の記念碑 手前のは地上兵団の慰霊碑 中間の二体が航空碑



碑文

昭和十九年六月米軍はサイパン島占領後十月には同島にB 29を展開して、日本本土の爆撃を企画した。

これに対し我軍は十一月初より年末近く迄陸海軍の大型機が本島より発進して、十回に亘り延べ七十三機が夜間爆撃を繰返したが、米軍側の対応措置強化に伴い我が方の損害急増し遂に三十四機が未帰還となり、これに伴う搭乗員の損耗も甚大となった。

唯この間十一月二十七日朝本島を発進して彩雲二機に誘導された零戦十二機がサイパン飛行場のB 29に対し白昼銃撃を敢行し米軍の心胆を寒からしめたが、これ即ち第一御楯特別攻撃隊である。

斯る戦勢に鑑み米軍は速やかに硫黄島を奪取する必要に迫られ、昭和二十年二月大挙攻略軍を編成して侵攻し来ったのであるこれに対し我が方は第二御楯特別攻撃隊が大戦果を挙げる一方、島上に於ては月余に亘り約七万の彼我攻防軍が苛酷な戦闘を続けたが、当時大本営宛報告電の一節に「本戦闘の特色は、敵は地上に在りて、友軍は地下に在り」と、誠に戦闘の様相を表している。

今この山頂に立ち四個の碑石を眺め更に俯瞰して道標を辿り当時の戦闘を偲ぶ時、その由来を判然と識ると共に、雲湧千里海陽沈む情景に思いを馳せ滂沱合掌する次第である

第一御楯特別攻撃隊

第29号及び30号に掲載しビデオも作成したので、それらを参照されたい。

海軍中攻隊

昭和十九年十一月二日、海軍T攻撃部隊攻七〇三の一式陸攻(中攻)一〇機は夕刻硫黄島に進出、二〇五〇ごろ同島を発進してマリアナ攻撃の途に就いたが、うち八機が夜戦多数の邀撃にあいながら各基地の襲撃に成功している。この攻撃中に陸攻一機が撃墜され、他に二機が帰投中に失われた。

聯合艦隊は十一月四日、T攻撃部隊(指揮官・七六二空司令・久野修三大佐)に対し、マリアナ方面に増強されつつあったB-29の偵察、攻撃に関し次のとおり下令した。

聯合艦隊電令作第三九八号(四日一〇三四)

一 T攻撃部隊指揮官ハ当分ノ間陸上攻撃機八機を木更津基地ニ派遣第七基地航空部隊指揮官ノ指揮ヲ受ケシムベシ

二 第七基地航空部隊指揮官ハ麾下兵力並ニ右増援兵力ヲ以テ機宜「マリアナ」方面ヲ偵察攻撃シ主トシテB-29ノ撃滅ニ任ズベシ

十一月六日早朝局地偵察のため硫黄島を発進した偵察機のうち、グアムに

向かった一三二空偵一二の彩雲は天候不良のため途中から引き返したが、陸軍教導航空軍の百式司偵が一二〇六帰着してサイパン、テニアン^①の状況を次のとおり報告した。

一 目標附近雲量 五〇六

二 「アスリート」大型機約四〇(掩体中)

四〇 「オレアイ」小型及び中型機三〇

「チャチャ」小型機数十機

三 「テニアン」小型多数 其ノ他雲ノ為偵察不能

「サイパン」港内巡洋艦十数隻 港外大型艦三、小型数艦

一六二〇ころ攻七〇三の一式陸攻七機、陸軍教導航空軍の重爆五機、百式司偵六機が硫黄島に到着、攻撃準備のうえ二〇一〇から翌七日〇三〇の間に発進して、マリアナ攻撃に向かった。この日少なくとも陸攻五機がテニアン及びサイパンの米基地を攻撃しているが、夜戦多数の邀撃にあつて戦果を確認していない。攻撃から帰還した各機は同日一式陸攻は木更津へ、重爆、百式司偵はそれぞれ浜松と八街(千葉県)に帰着した。

このような状況のもとにB-29の撃滅を命ぜられていた三航艦では、これまでの陸攻による攻撃にあきたらず、

戦闘機隊の銃撃による強襲を十一月十六日ころから計画し、館山基地においてこの攻撃に参加する戦闘機隊(第一御盾特別攻撃隊)の挺身攻撃訓練を実施していた。

第二御盾特別攻撃隊

第32号「硫黄島作戦における第二御盾隊」

第65号「第六〇一海軍航空隊第一飛行隊戦記抄」の中に記述されている。

右のほかR・F・ニューカム著 田中至訳の「硫黄島」という本に次の通り出ている。

明け方、日本軍は空からの最後の反撃を試みた。第二御盾特別攻撃隊のおよそ五〇機は、千葉県羽取(香取、翻訳の誤)飛行場を出発、途中小笠原諸島の八丈島に着陸して燃料を補給した。航空母艦サラトガは硫黄島の北西方三五マイルの地点で、一〇〇マイル彼方に日本軍の編隊を発見したが、初め友軍機と報告した。それでも六機の戦闘機が母艦を発進し、確認に向かった。午後五時サラトガ電信室に「艦爆二機撃墜」という報告が入った。ところが、それからの二分と経たない間に、六機の日本機が雲の割れ目から姿を現わした。直ちに対空砲火が火をはいた。火だるまになった二機の日本機はサラ

トガ右舷側吃水線付近に命中し、その爆弾がその艦内で爆発した。サラトガは僅か四分間で四ないし五発の直撃を受けたが、機関部は無事だったので、速力を二五ノットに上げ、艦内の火災の消火に務めた。六時三〇分になってようやく火災はおさまった。それから三分、ひと息入れるまでもなく、別の日本特攻機五機が近づいてきた。四機まで打ち落とされた。五機目は飛行甲板に突入し舷側で爆発し、飛行甲板に大きな穴をあけた。八時一五分、サラトガは艦上機を着艦させることになった。

「やれやれ、サラトガじゃなくて有難かったよ。あの艦はひどい目にあつていたぜ」といった。航空母艦ビスマルク・シーはサラトガほど好運ではなかった。硫黄島の東方二〇マイルで六隻の護衛空母に守られていたビスマルク・シーは、間違つて航空母艦サラトガ、ウェーキ、アイランド、ナトマバーなどの飛行機を収容した。そこで甲板は飛行機で一杯になり、燃料タンクのガソリンを抜かなければならぬ。格納庫に下ろさなければならなかった。六時四五分、一機の飛行機が水面すれすれに飛んできた。駆逐艦はそれを見つけたが、サラトガの艦上機だと思つて対空砲火を射たなかった。

が、実は、神風で、ビスマルク・シーの真横に命中、航空魚雷四発を誘爆させて、飛行機を運ぶエレベーターのワイヤーロープを断ち切った。エレベーターは甲板から艦底まで、落ちて火をふいた。ガソリンをつめたままになっている飛行機にたちまち火がつき、射ち残しの弾薬が飛び散った。副長はこれを一目見るなり「総員退艦」を連言し、プラット大佐はこれに同意した。その時、二二ノットの強風が吹いており、艦内の火災はますます激しくなつた。

午後七時、「総員退艦せよ」が命令され、八〇〇人の乗員は舷側を飛び越えて、雨とみぞれの降りしきる荒海に飛び込んだ。二、三分すると、航空母艦の艦尾が大爆発を起こし、静かに赤い腹をみせながら沈んでいった。

護衛駆逐艦が近づいたが、日本の飛行機が水面を銃撃した。ビスマルク・シーの従軍牧師ユージン・ジャンソン大尉は駆逐艦に助けあげられた。しかし、負傷のため死んだ。艦内の拡声器を通じて臨終の床から伝達された彼の最後の祈りは「全能なる神よ、戦いへの招きを聞き分ける耳を与え、どこに敵がいようと、これを識別する目と艦を守る技術、我々自身を悪魔の手から守る力を与えたまえ。勝利を与えられる

全能なる神に栄光あらんことを。主イエス・キリストの御名により、アーメン」

ビスマルク・シーの乗員のうち、二一八人が寒い海上で行方不明になった。

三隻の別の艦も攻撃を受けた。航空母艦ルンガ・ポイントだけは幸運で、損害を受けることなく、艦上攻撃機四機を撃墜した。硫黄島南東五〇マイルの海上ではLST船団と防潜網敷設艦が攻撃された。かつて鉄道連絡船だった防潜網敷設艦ケーカックは、特攻機に命中され火災を起こした。LST四七七号は第三師団の大砲を積んだまま「神風」に命中された。ケーカックはかろうじて火を消しとめたものの、一七人の乗員が戦死、四四人が負傷した。サトガでは、一三三人が戦死、一九二人が負傷。四ヶ月間戦線を去らねばならなかった。しかし、「神風」は一機も日本に戻らなかった。

陸軍爆撃隊

参加したのは第二、三、四の独立飛行隊、飛行第一百十戦隊、飛行第七戦隊であり、第27号、28号に詳述してあるので重ねて述べないが、二独飛隊長の新海少佐は異色の人物であり私としても知己の人なので、ここに書き残して

おきたい。

新海希典の人物像

初対面

この人と初めて接したのは、昭和十七年四月初め頃だった。パレンバン空挺作戦が終わわり、我々はビルマに移りラングーンで次の作戦を準備していた。パレンバン作戦当時は挺進飛行戦隊は三個中隊だったが、内地でもう一個中隊編成し到着するというので、挺進団司令部の部員だった私は、高級部員の命を受けミンガロン飛行場に出迎えと命令伝達に向いた。ミンガロンはトングーの郊外にある。

待つほどにMC一二機が飛来し次々と着陸した。勿論先頭は中隊長新海大尉である。降りて来て腕組みして後続機の着陸振りを見ている。一一機のうち二機がオーバーランして滑走路から外れて停まった。しかしそこは草地だが平坦なので大事にはならなかった。この飛行場は赤土で滑走路は転圧してあるだけで舗装されていない。要するに接地地点を誤っているのだった。

新海中隊長は全員を集め、技倆の未熟を激しく罵倒した。これが新海さんに初めて接した時の思い出である。なお新海さんは50期、私の2期先輩にな

る。その時私とどんな話をしたか憶えていないが、この人の服装は異様だった。新田原はまだ寒いので全員冬の飛行服を着ていたが、ビルマに来て暑かったのか、上衣の裾についているバンドは締めてなく、ズボンはたれさがあって臍が見える。陸軍大尉の威容など全くない。この服装はその時だけではなく、内地に戻ってからも度々見かけた。

その時、挺進飛行戦隊の第一中隊長は筒井四郎中尉（51期、それから一ヶ月後ブノンペン飛行場離陸後機関故障で墜落殉職）、第二中隊長は板野芳雄大尉（少候17期）、第三中隊長飯淵駒雄中尉（51期、後飛行第一百十戦隊に転じサイパン爆撃で戦死、従ってこの碑に祀られている）、第四中隊長が新海大尉で、どの中隊長も新海さんより威容があった。

せっかく新鋭の新海中隊を加えたのに、ビルマにおけるラシオ空挺作戦は天候不良のため目標手前で引き返し不成功に終わり、全般の進攻作戦も一段落したので、挺進団は十七年六月から七月にかけて内地に帰還し、飛行戦隊は新田原に戻った。

新田原における訓練振り

内地に帰ると所帯持ちは家を借り、独身者は下宿するが、新海さんは中隊長室に寝台を持ち込み居住した。下着

はそのまま寝るので替えることがない。当番兵が「中隊長殿洗濯しましょう」と無理遣りに脱がせ持って行こうとすると、そんな汚いものは捨ててしまえと、塵箱に捨ててしまおう。私共はよく新海さんの傍らで、臭い臭いとからかったが、にやにや笑っているだけだった。その頃になると航空戦力が彼我伯仲となり、やがて逆転する兆候が見えてきた。そこで飛行戦隊では夜間訓練を盛んに行った。新海さんのやり方は徹底していて、昼夜全く逆転した訓練だった。新田原だけでは空域がかち合うので、西筑波も使った。ある晩飛行場の傍らにある大きな杉の木に翼端をぶつけた飛行機があった。操縦者が降りて点検すると、翼端は完全にちぎれて無かった。中隊長は居眠り操縦だったかと言言っただけだった。中隊の整備

班長の武田国夫中尉は53期、騎兵から航空に転科した人で私より一期下だが、士官学校当時は同じ騎兵科で旧知の間柄、整備は昼間やらねばならぬし、夜間寝てもおれぬし、とても体が続かぬとこぼしていた。

私は挺進団司令部が復員した後、挺進練習部の本部で勤務していた。練習部と飛行戦隊は新田原飛行場に同居していたので、私は週番勤務に就いたときに新海中隊の訓練ぶりを、よく見聞

している。

十八年五月第一挺進団に再度動員が下ったが、私は千葉の戦車学校に入校中で残された。ニューギニアのペナペナハーゲンに使われるということで、先遣隊がニューギニアのウエワクに派遣された。その時飛行場が大空襲を受け皆防空壕に退避したが、新海さんだけは自分の輸送機の傍らに胡坐をかき、ことこまかに敵機の攻撃振りを観察していたという。

結局、空挺作戦は行われることなく、翌十九年の中頃部隊は内地に引き揚げたのだが、それより先、新海さんは浜松飛行学校の教官に転出した。

第二独立飛行隊長時代

新海少佐率いる二独飛のサイパン爆撃のことは、会報27号に詳しく書いたので重ねて述べないが、二独飛が大戦果を上げ感状を受与され、拜謁を賜ったことは、挺進飛行戦隊時代に見せたあの徹底した訓練を、二独飛にいつてからもやった結果にはかならない。

飛行第六十二戦隊長

単独拜謁を賜った翌日の二月二十四日に、新海少佐は飛行第六十二戦隊長に補職された。この日戦隊は第三十戦闘飛行集団に編入された。機種は四式重で、その時は西筑波にいた。

西筑波で数日訓練した後、戦隊は大

分に移動した。大分では別府湾上にある練習空母鳳翔を目標に跳飛弾攻撃の訓練をした。その訓練たるや猛烈を極め、同地にある海軍航空も驚嘆したという。そのうち一機が海面に接触し、水しぶきを上げ数分後に沈んだ。松野少尉即死、長中尉と松浦曹長重傷。新海戦隊長は死傷者の収容等に奔走したが訓練は続行した。

三月十八日大分飛行場はグラマンの空襲を受けた。以前ニューギニアで空襲を受けた時と同様、新海少佐は退避することなくジッと敵の行動を見つめていた。グラマンが現われたということは、敵機動部隊が近海に来ていることを示している。しばらくして、第三十戦闘飛行集団司令部から電話があり、戦隊長の出頭を求めてきた。

新海戦隊長は部隊に明日未明に出発して西筑波へ帰還を命じ、自らは本部で持っている双発高練に乗り、東京へ向かった。新海少佐は高練を代々木に着陸させそこで降りて、三宅坂にある集団司令部に出頭した。

青木集団長は戦隊に特攻機三機の差出し準備を命じた。三月十四日、敵の第五十八機動部隊(空母十、軽空母五、戦艦十八、その他)はウルシーを出発し、十八日九州各飛行場を攻撃して、更に東北方に移動しつつあった。

重爆戦隊特攻使用に新海少佐は反対し、跳飛弾攻撃を主張したが集団長は聞き入れない。体当たり攻撃を行うにしても、もう少し練度を上げてからと懇願したが、それもはねつけられたので、しからば戦隊長先頭で行いますといったところ、それは相成らぬと言われた。

その晩は桜上水の密蔵院に泊り翌二十日九時過ぎに西筑波に着いた。大分から戻った戦隊はその前に着いていたが、第三中隊長米田大尉機は大分離陸直後九重山に衝突し、搭乗者全員が殉職した。第一中隊長岩本大尉は負傷入院中で、残るは第二中隊長伊藤大尉だけである。戦隊長は伊藤大尉に集団司令部におけることを話し特攻機三機と戦果確認機一機の出動準備を命じた。

戦隊長は特攻隊長を三浦忠雄中尉と決心し、同中尉を呼んで命令し、人選を任せた。三浦中尉は少候二十二期、練達の操縦者で戦隊内の四式重の未習教育の教官をしていた。戦隊全般の技倆向上に情熱を傾けていたやさき、特攻には理解し難かったが、全員が早晩来るべき運命と心得、お受けします、と答えた。戦隊長は戦果確認に俺も同行すると言った。

新海戦隊長の最後

0735我が偵察機は浜松の南方百

五十軒及び二百度の方向百八十軒に、敵機動部隊を発見した。しかしその後出た偵察機は敵を発見していない。しかし計画通り爆装の準備整い、1540三浦機続いて渡部真少尉機、崎下彰少尉機と特攻の三機が離陸し、新海機がこれに続いた。

あと15分で初め敵機動部隊がいたという海上に到着するという頃、敵艦載機ウォートシコルスキー三機が現われた。この辺に機動部隊がいることは確かである。しかしこのままでは喰われてしまうと思った三浦隊長は、全速力で彼方の雲の空域に逃げ込んだ、右側の渡部機はついてきたが、左の崎下機は黒煙を吹きながら編隊を離脱していった。戦隊長機は白い煙を引きながら水平飛行を続けているのを、三浦中尉は一瞬目撃した。出撃前新海戦隊長は、今日はどこまでも突っ込むよと、言ったのが脳裏に浮かんだ。

三浦中尉は雲下に出て敵機動部隊を探したが、やがて陽はすっかり暮れ、陸地を求めて北上し辛うじて浜松に着陸した。渡部機は各務原に夜間着陸していることが翌日わかった。

新海機は戻らなかつた。

第二艦隊追悼式報告

理事長 菅原 道照

平和祈念展望台奉賛会（会長 島野宏之氏）が主催する平成19年度海上特攻第二艦隊戦没者追悼式は、4月7日14時、打上げ花火を合図に枕崎市火之神公園の平和祈念展望台で開催された。

平成3年10月に枕崎商工会議所は、終戦50周年記念事業として戦艦大和以下6隻が沈む海域を望む火之神公園の突端に、平和祈念展望台を設置するこ



遙かに戦艦大和沈没地点を望む枕崎市平和祈念展望台



独唱を捧げる巻木春男氏

とを議決して平成7年4月7日に完成、奉賛会を起ち上げて以来、毎年追悼式を催行するようになっていた。

展望台に至る坂道の両側には、遺族や戦友会・戦友個人等から献納された灯籠が並んでいるが、今年も駆逐艦朝霜関係の遺族・鈴木新子様から納められた一基の除幕が、開式第一番の行事として行われた。

陸上自衛隊国分駐屯地ラッパ隊の吹奏に合せて、2名の駆逐艦磯風生存者が国旗を掲揚、全員が黙祷した。

昨年は4月5日に計画された洋上慰

霊祭が、悪天候のため徳之島に上陸出来ず、期せずして7日に枕崎で両者の第二艦隊合同慰霊祭が行われた。その席上協会代表で参列した藤田理事は、協会発行の『特別攻撃隊』には、従来第二艦隊沖縄出撃作戦について全く取り上げていなかったが、それは当時海軍当局が、特攻戦死（二階級特進）と認定しなかったことに拠ったものである。一方世間的には早くから「大和特攻」として喧伝されているので、この状態で資料として後世に伝すことは好ましくないと判断した。

ただし、特攻戦死者と認定されなかった第二艦隊沖縄作戦出撃時の戦死者の史実は確実に後世に伝えられなければならないので、「准特攻戦死者」と明確に区別して改訂五版に収録することになった旨、御霊らに御報告申し上げた。

今年是小職から、「特別攻撃隊（五訂版）」は「特別攻撃隊全史」として、来年中に刊行される見込みがあったことを、追悼の言葉の中で申し述べた。

鹿児島地方協力本部長佐藤俊也一等海佐の献辞に続いて、3人の遺族代表の挨拶の中で、中川春香様は、祖父の弟が大和で戦死（当時26歳）したことを学生時代に親から聞かされて、その時は特別な感懐を抱くことは無かった

のが。30歳を過ぎてから大祖父のことをもっと知りたくなって、先ず大和ミュージアムを訪ね、銘板に刻まれた大祖父の名前に手を触れて、全身に震えが走って止まらなかったという。

親近感が更に募って昨年の洋上慰霊祭に参加、色々な資料を調べ、映像も見て、やっと一段落したと思ったその夜に、夢の中に大祖父が現れた。そこは海の中で、思わず会いたかったと訴えると、大祖父は一方の手を頭に、他方を背中に廻して、春香さんを優しく引き寄せてくれた。

何れ母となった時には、子供にこの事を伝えて行きたい、と切々として心情を吐露されて、聴く者の胸を打った。最後に實吉国盛氏のトランペットによる「海ゆかば」吹奏、続いて鹿児島オペラ協会員巻木春男氏が、蜷川明子氏のエレクトーン伴奏で、「千の風になつて」「椰子の実」「北帰行」の3曲を独唱した。音吐朗々として歌声は、東支那海へ響き渡っていった。

閉式宣言と共に火花が上がりに、参列者全員が献花しつつ流れ解散した。微風、好天に恵まれ、遙か水平線の彼方に水漬く屍として鎮まります御霊らが、如何に在すかを偲びつつ展望台を後にした。

フィリピンの十月二十五日

参与 石井 千春

1

リリーヒルの観音菩薩像は、おだやかな朝日のさす緑の木立に映え、白く美しい立ち姿で微笑んでいた。鳥のさえずりが聞こえ、平和公園にはすがすがしい朝の気が漂う。

フィリピンと日本の国歌が流れ、式典は始まった。この日、十月二十五日は、日本人の私にとっては、神風特別攻撃隊が初戦果を挙げた記念すべき日であり、全ての特攻隊員を慰霊する大切な日にはかならない。だが、フィリピンの人々にとっては、この日は何よりも、配布されたパンフレットに記載されたとおり、「世界平和への祈りの祭典」の日なのである。鮮やかな南国の花輪が観音菩薩像に捧げられたあと、マイクの前に立ったマバラカト町長は、戦争の悲惨と平和の尊さを語り、「戦いではなく友情を、支配ではなく共に生きる道と訴えた。

フィリピン空軍の軍楽隊が「海ゆかば」の演奏を始め、私たちは黙祷した。七時二十五分、神風特攻隊敷島隊がマバラカト基地を飛び立った時刻である。

敷島隊の指揮官だった関行男大尉は、

伊予西条に生まれ育った。彼は史上初の特攻隊の指揮官として、その困難な任務を見事に果たした。国家に一命を捧げて戦った軍人の強さと気高さには深い畏敬の念を抱いた。だが、彼のあまり幸福とは言えない生い立ちや多感な青春時代について知るようになる、偉大な軍人としての姿とは裏腹な、繊細で孤独な青年像が浮かび上がった。

大正十年生まれの行男は、九つになるまで母と二人暮らしだった。骨董商だった父は、行男親子と一緒に暮らすようになって数年後に前妻と離婚する。気の激しい厳しい人で、行男はこの父にずっと他人行儀だったという。

その分、母には強い愛情を持っていた。兵学校に入学して初めて夏休みに帰宅したとき、高峰三枝子主演の母子物『故郷の廃家』を見て、映画館で人目も憚らずに号泣した逸話が残っている。帰りの夜道で友達に「自分は戦争に出て、いつ死ぬか分からない。お袋のことは頼む」と言っていて、また声をあげて泣いた。いつも級長を務め、負けない気で大人びた行男が、こんなに激しい感情を見せたことに、友達は驚いたという。

父は行男を師範学校に入れて、教師にしたかった。しかし、プライドの高い行男は、当時の最難関校の一つ海軍

兵学校を受験し、合格した。兵学校進学は、家庭の経済的な理由が大きかった。行男は、兵学校のスマートな短剣姿ではなく、弊衣破帽の旧制高校の自由主義に憧れていたという。

昭和十六年初春、行男が最上級生の一号生徒になる直前に父は病死する。行男は、背が高く体格もよく、四号に果断に鉄拳制裁を加える猛烈な一号だった。恨みを買うこともあったらしい。後に霞ヶ浦航空隊で教官となったときも、徹底した鬼教官だった。

だが、親しい同期生には人懐っこく、母親への深い情愛は変わらなかった。母サカエは、貧しい農家に生まれ、幼いときに父を亡くして母とも別れ、子守りや奉公で苦勞を重ねた人だった。行男が戦死すると天涯孤独の身となった。行男には新婚四月の妻がいたが、子どもは無かった。敗戦後、サカエは知り合いの物置を借りて住み、草餅を作って高い歩いたり、土産物にする木の根の束を作る日稼ぎで日々を凌いだ。それでも晩年はささやかな幸福が訪れた。山の学校で住み込みの小使さんになり、子どもたちに慕われた。「毎日が楽しい」と親しかった女性に語った。この女性はサカエを回想し、質素にして端正、弓のように凜としたなかにも心あたたかく懐かしい人だったと

記している。

西条市大町の榎本神社境内には、伊予の青石に「関行男慰霊の碑」と刻まれた立派な碑が建っている。小さな民家の神風特攻記念館が境内の奥にあり、敷島隊の他の四人の隊員、中野磐雄一飛曹、谷暢夫一飛曹、永峯肇飛長、大黒繁男上飛の遺影や遺品がともに陳列されている。

壁一面のガラスケースの中央には、四人の額縁入りの遺影に囲まれて、ひととき大きなパネル写真の関大尉の遺影がある。出撃直前に撮った写真で、両手を腰に添え、鋭く前方を見据えている。頬はこけ、眼窩は落ち窪み、瞳だけが強い光を放っている。特攻隊の指揮官に指名されたのが十月十九日の深夜であり、二十一日、二十三日、二十四日と、三度も出撃し、会敵せずに戻っている。前々から熱帯性のひどい下痢に悩んでもいた。

「これは鬼の顔だ。鬼神の顔だ。四年前、私が西条を訪れたとき案内してくださった幼馴染の宮崎嘉夫氏が、この遺影を示しながら言った言葉が忘れられない。

「海ゆかば」の余韻のなか、私たちは黙祷を終えた。池口恵観師の読経が始まり、私たちは焼香し、祈った。恵

観師は鹿兒島市、最福寺の住職で、浄財を集めて観音菩薩像を寄進した。

式典が終了し、バスに乗ろうとする私たちを、子どもたちが見送ってくれた。近くの小学校の児童たちで、日系企業からの文房具品等の援助に対するお礼として参列しているという。痩せた褐色の手に、フィリピンと日本の国旗を持ち、はにかんだ笑顔でこちらを見ていた。

バスに乗り込んで席についた私に、前の席に座った大日向邦治氏が振り返って言った。

「あなたに、ぜひ、話しておきたいことがある。特攻隊員は、なぜ黙って出て行ったと思いますか」

私は大日向氏の気迫に吞まれ、言葉に詰まった。自分には答える資格がない。頭に浮かんだのは、回天特攻隊員だった河崎春美氏の言葉だった。河崎氏には、私が教えている明治大学の特攻のゼミでここ三年、講演をお願いしている。

「大切な家族や、郷土を守るために、特攻隊員は出て行ったのではないでしようか」

私は緊張した。河崎氏が語れば、この言葉は真実だ。しかし、私が言えば、ただの知識になってしまう。

大日向氏は言った。

「それが命令だったから、行ったのです。一度命が下れば、黙って出てゆく。我々軍人は、そのように教育されていた。搭乗配置につくと、私もね、いつ死んでもいいように、きれいな禪にはきかえて備えていました」

大日向氏は片手が御不自由だった。どんな御苦労があったのだろうか。水上機の離水事故のお話を、私は後に氏から伺うが、それは別稿で記したい。

2

バスはマバラカット西飛行場へ向かって走り出した。私は大日向氏の言葉を反芻しながら、窓の外に目をやっていた。氏の言葉を聞いたとき、私は改めて当時の軍人の立派さと厳しさに心を打たれた。それは戦後世代が失った大きな美德の一つだ。だが、今では多くの日本人が、このような美德をかつて日本人が持っていたことを知らないし、また知ろうともしない。反戦という美名の下に、マスコミでは旧軍に対する曲解と非難が繰り返される。それは愚かしく、悲しいことだ。

けれどもこのとき、私は日本にいたときとは違った感慨を持ったのも確かだった。あのリリーヒルは建武集団が最後に立てこもった地帯だった。六十

数年前、日本軍とアメリカ軍の激戦地だったこの土地で、多くの無辜のフィリピン人も死んだのだ。二つの強国の闘争に巻き込まれて。もちろん当時の複雑な歴史をふり返れば、フィリピンが戦場になったのは必然だったと言えるだろう。それでもやはり、あのおだやかな朝の平和公園の景色、両国の旗を振ってくれたフィリピンの子供たちを思い出すと、私の胸は塞いだ。戦争の理不尽さ、悲惨さを、私は強く感じた。

しかしまた、生まれて初めて見るフィリピンの田園風景が、行く先々で懐かしく感じられてならなかった。生えていた雑草はほとんど日本のものと同じだったし、畑や山並みの風景はとも日本に似ていた。それが意外だったし、とても胸が痛んだ。この地で倒れた日本の兵士たちは、こんな日本を思い出させる風景を見て、どんなに日本を懐かしく、恋しく思ったことだろうか。

バスの窓から遠くの山並みを見やると、ゆるやかな稜線が雲間にかすんでいる。高雄山、愛宕山、丸山、富士奥山・・・日本軍が付けた山々の名前だという。

バスは走り続けた。草原ばかり続く景色の途中、掩体壕が幾つも建つ枯野があった。台形の上部はすっかり草で

覆われ、出入り口のある正面だけが灰色のコンクリートの壁を見せていた。

旧日本軍が建てた掩体壕だろうか。そうだとしたらすごいと思った。こんなにたくさんさんの掩体壕が並んでいるなんて、日本では考えられない。けれど、日本に帰ってから調べてみると、どうも旧日本軍のものではないようだった。日本各地の戦跡を撮影した写真集『日本戦跡』に載っている旧日本軍の掩体壕と比べると、上部の曲線や出入り口の形などが異なっていた。アメリカ軍が建てた掩体壕かもしれないけれど、それもよく分からない。

バスが走っていたクラークフィールドーは、一九九一年までアメリカの空軍基地として使われていた。この年の五月、ピナツポ火山が大噴火し、それをきっかけに米軍は撤退した。その後、クラーク特別経済区として再開発が進んでいる。私たち一行が前の晩泊まったホテルの周りには、広いゴルフ場があり、リゾート地になっていた。

背中にびっしり草を生やした掩体壕の群れには、不思議なのん気さど哀しさがあった。これら時の遺物もいずれ壊され、風景は一変するのだろうか。そして、昔の景色を知っていた人々もこの世からいなくなる。しかし、過去は忘れさられることはないだろう。過去

の出来事は語り継がれ、物語となって残るのだ。

そんなことを思っているうちに、バスは西飛行場跡地に着いた。ススキ原に囲まれた広場の奥に、真っ白な神風特攻の慰霊碑が建っている。縦三メートル、横八メートルはあるコンクリートのその碑には、旭日旗とフィリピン

国旗が描かれ、中央に「第二次世界大戦において日本神風特別攻撃隊が最初に飛び立った飛行場」と日本語で記されている。慰霊碑の前で私たちは焼香し、手を合わせた。空を見上げると、雲の切れ間に、青く美しい天が見えた。

この飛行場の北には、当時、小高い丘があり、二〇一空の指揮所になっていた。バンバン川のほとりである。ススキの白い穂波がゆれるなか、一本の吹流しが立ち、破れかかった古天幕が張られていた。特攻隊員の待機所もここにあった。

大西瀧治郎中将が特攻隊員たちと水盃を交わす有名なニュース映像はここで撮られた。関大尉を左端に、一列に並んだ隊員たちの背後には、背丈ほどもあるススキが生え、バンバン川の水面が見える。

指揮官に指名された翌日、関大尉が小野田政報道班員に心境を語ったのも、この川のほとりである。

「ぼくは天皇陛下のためとか、日本帝国のためとかで行くんじゃない。最愛のケーエー(家内)のために行くんだ。命令とあらば止むをえない。ぼくは彼女を守るために死ぬんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだすばらしいだろう!」

関大尉は半ば冗談のように言った。報道班員、日本もおしまいだよ。ぼくのような優秀なパイロットを殺すなんて。ぼくなら体当たりせずとも、敵空母の飛行甲板に、50番を命中させる自信がある。」

軍人同士では言えない、ひとりの人間としての悩みを、民間人の自分に訴えたかったのだろう、と小野田は回想している。懐中に秘めた新妻の写真を取り出して、キスしてみせる無邪気さもあった。

「ぼくは二十五年の短い生涯だったが、とにかく幸福だった。しかし、列機の若い搭乗員たちは、エスプレイ(芸者遊び)もしなければ、女も知らないで死んでゆく。インチ(恋人)もいるだろうに・・・」

甲飛十期の中野磐雄一飛曹と、丙飛十五期の永峰肇飛長は大正十四年生まれで、まだ十九歳だった。

私は、この関大尉のエピソードに青年らしいやさしさ、やわらかな心を感じ、胸を打たれる。この青年は「今回

帝国勝敗の岐路に立ち、身を以って君恩に報ずる覚悟です。武人の本懐これにすぐることはありません。」と遺書に認めた。軍人としての真情であろう。だからこそ、右のエピソードは一層哀切である。

マバラカットの町を抜けて、次にバスが向かったのは、マバラカット東飛行場跡地だった。敷島隊が最後の出撃の日、十月二十五日に飛び立った飛行場である。

バスが止まったのは、突き当たりは建設工事現場の、土埃のたつ路上だった。路の右手に、角を赤いペンキで縁取りしたコンクリート製の横長の鳥居が見える。マバラカット観光局と日本側関係者の協力で造られた神風平和祈念公園である。

鳥居の前に、近所の幼い子どもたちが大勢集まり、物珍しそうにこちらを見ています。

鳥居をくぐると、敷石の両側は芝生で、花壇もある。これから始まる慰霊祭のために、テントが張ってある。正面には、雲のたなびく空を背に特攻隊員のブロンズ像が建っていた。正午の日差しが眩しかった。私たちは般若心経を唱え始めた。

敷島隊が初めて飛び立った十月二十一日は、雲はあったがよく晴れた日だった。

エンジンの爆音が草原に轟く。出撃の時がきた。

「副長、お世話になりました」

関大尉は玉井副長に挙手の礼をした。ポケットから紙包みを出す。

「これをお願いします」

遺髪であった。

しかし、この日、敷島隊は敵を発見できず、帰還する。翌々日、その次の日も戻っている。断腸の思いだったに違いない。二十五日、最後の出撃の日まで、関大尉はほとんど一睡もしていなかったらしい。

般若心経を唱え終わると、私たちは特攻平和観音経を誦経した。「これは、鬼神の顔だ」と宮崎氏が言った関大尉の遺影の面差しが思い出された。

最期に出撃した二十五日、敷島隊は大戦果を挙げる。その前日、第二航空艦隊が一八八機の大兵力を投入して、大編隊による総攻撃をかけたにもかかわらず、戦果がなかったことを考える。驚くべき結果だった。敷島隊は、たった五機で、護衛空母一隻を撃沈、三隻を中小破したのである。

五機全機が突入に成功した。一機はセント・ローの飛行甲板に突入。同艦

を沈めた。一機はホワイト・プレインズの左舷艦尾に迫り、海に突っ込む寸前に爆弾を大爆発させた。一機はキット・ベイの左舷外側通路に衝突し、大爆発した。二機はカリニン・ベイに向かい、一機が飛行甲板左舷側に命中。もう一機は左舷中央部に突入した。セント・ローを沈めた一機は、最初、ホワイト・プレインズに向かったが、被弾し、煙を噴きながら方向を変え、セント・ローに突っ込んだ。他の四機も激しい対空砲火を浴びながら急降下、突入した。

眼下に広がる比島沖の海は、紺碧に輝いていた。私は、前日ジャンボ機の窓から見た下界の海の色を思い出していた。

ジャンボ機は、朝の九時過ぎに成田を発つてから、すでに四時間近く飛びつづけた。白い雲の切れ間から、はるかな海が青く光って見えた。そのまま吸い込まれてしまいそうな怪しい輝きだった。

十月二十五日七時二十五分、敷島隊はマバラカット東飛行場を発進。レイテ島へ向かって南下を続ける。一〇時一〇分、海上に日本艦隊を発見した。サマール島沖に、戦艦四隻、巡洋艦、駆逐艦十一隻、栗田艦隊だった。

栗田艦隊は、二時間にわたる米空母

部隊との戦闘を終え、各艦がばらばらになっていた。負傷艦から流れ出た重油が、海上に黒い影を滲ませている。米艦隊は煙幕を張り、スコールに逃げ、艦載機を飛ばして反撃した。重巡・熊野が魚雷を受けて艦首を切断、筑摩は艦尾を大破。重巡羽黒と島海は被弾。栗田中将が各艦の集合を命じた時、艦隊は、熊野、筑摩、島海の重巡三隻をはじめ八隻の艦を失っていた。

今、傷ついた艦隊は、輪形陣を整えるべく、北上していたのだった。敷島隊の五人は、その姿を見たのである。

敷島隊がなぜ大戦果を挙げたのか。同じ日、比島からは七隊の特攻隊が出撃しているが、彼らの戦果は抜きん出ている。戦場ではあらゆる偶然や運不運が大きく作用すると言ふ。それでも、彼らの成功には大きな必然があったのだ。

栗田艦隊のレイテ湾突入を成功させる。それが彼ら特攻隊員の使命だった。敵の空母を飛び立つ艦載機から艦隊を守るために、飛行甲板に穴を空け、一時使用不可能にする。その目的のために彼らは体当たりして任務を果たすのだ。

敷島隊の五人は、すでに三度も出撃し空しく基地に引き返していた。しかし今、彼らは見た。眼下の海に、傷つ

いた栗田艦隊の姿を。己の使命の重さを、彼らは瞬時に悟った。帝国の勝敗は己の双肩にかかっている。「今回帝国勝敗の岐路に立ち、身を以て君恩に報ずる覚悟です。武人の本懐これにすぎることはありません。」その時が来たのだ。

3

バンバン川を渡ったバスは、二〇一空本部として使われていたマバラカットの町の屋敷へ向かっていた。昭和十九年十月十九日の夕方、マニラの司令部からやって来た大西長官が、特攻作戦の決行を告げたのはこの本部だった。

深夜にはここで特攻隊員の編成が行われ、指揮官に関大尉が指名される。マッカーサーハイウェイと呼ばれる国道沿いに、その洋館があった。赤煉瓦の壁、白いスレート屋根の瀟洒な造りで、想像していたよりもずっとこじんまりしていたのが意外だった。

中島正、猪口力平著『神風特別攻撃隊の記録』によると、この屋敷には、部屋が階上階下合わせて七つもあり、石の低い垣をめぐらして、外から見れば壁は卵色、窓枠は緑で、二階建てのきれいな住宅であったという。二階にはベランダもあり、そこで大西長官は、玉井副長や猪口参謀に特攻作戦実施を

告げたのだ。

現在の建物は、正面から見る限り、ベランダはなく、屋根裏部屋の小さな窓があるばかり。壁も煉瓦造りで当時とは違うようだ。

それでも二〇一空本部だった家がこうして残っていることに私は昂奮した。バスから降りると、柵にへばりつくようにして家を見て、写真を撮った。すると、中から人が出てきて、この屋の主人に取り次いでくれた。

黄色いティーンシャツを着た明朗な初老の男性が出てきて、中に招き入れてくれた。

この家の主人、フェルディナンド・サントス氏は、家が日本軍に徴用されていた当時のことは幼かったので覚えていない、と言った。外装は変わっているが、内部は殆ど変わっていないということがあった。

正面玄関を入るとすぐ、寄せ木張りの床が滑らかに光り、品のいい肘掛椅子と長椅子、テーブルのセットが二組置かれている広間があった。ここは当時、二〇一空の士官室兼食堂になっていた部屋だ。長机が並ぶこの部屋で、関大尉は特攻隊の指揮官に指名された。

「副長がお呼びです」

従兵の声に、二階の個室で眠ってい

た関大尉は起こされる。着替えもそこに、階下のこの部屋に降りてくる。部屋には、玉井副長、猪口参謀、指宿横山両大尉がいた。

玉井副長が、関大尉に椅子をすすめる。夜気の静けさが漂う。玉井副長は、関大尉の肩を抱くようにして二、三度軽く叩き、特攻実施のため大西長官が来訪したこと、その指揮官に、関大尉に白羽の矢が立ったことを伝える。

関大尉は唇を結んで、返事をしない。両肘を机の上につき、オールバックにした長髪の頭を両腕で支えて、目を瞑った。深い考えに沈んでいるようだった。だが、数秒後に静かに頭を持ち上げると、少しのよどもない明瞭な口調で言う「ぜひ、私にやらせてください。『神風特別攻撃隊の記録』に記された有名な場面である。しかし、森史郎著『敷島隊の五人・海軍大尉関行男の生涯』によると、関大尉の最初の返答は「一晩、考えさせてください」であつたという。

翌日、マバラカット飛行場で出撃待機していたとき、関大尉は小野田政報道班員に、「まさか自分が指名されるとは思っていません」と漏らしている。関大尉が二〇一空に配属になったのは約一カ月前だったが、飛行機乗りになって初めての第一線勤務だった。

艦爆出身で、零戦による戦闘経験のない彼には、出撃の機会はなかった。九月中旬の台湾沖航空戦のさなかも、熱帯性の下痢にかかっていたため、寝たきり起きたりの状態だった。

戦場に来てから一度も戦闘に飛び立っていない。健康状態も優れない。この夜、特攻隊指揮官に指名され、彼は「なぜこんな自分に」と戸惑ったに違いない。それだけではない。故郷には、一人息子の無事を祈る母と、新婚間もない妻がいる。自分が死んだら二人はどうなるのか。しかし、自分は軍人だ。命令は絶対なのだ。

「一晩考えさせてください」。この答えには関大尉の葛藤と苦しみ凝縮しているように思えてならない。

「ぜひ、私にやらせてください」と、その場で決然と答えるのは軍人としてより見事に違いないだろう。事実そうだったのかもしれない。しかし、私には彼が「一晩考えさせてください」と答えたと思えてならない。そして、翌朝には少しの陰りもなく「ぜひ、私にやらせてください」と玉井副長に告げたいに違いないと思うのだ。

ところで、当時二〇一空には、指揮官にふさわしい分隊長格の大尉は三人しかいなかったという。その一人、菅野直は熱血漢で腕のいい生粋の戦闘機

乗りだったが、内地に飛行機を取りに行っていて留守だった。もう一人は、エンジン不調やその他の理由で引き返して来る事が多く、消極的な性格と見なされていた。指揮官になるにふさわしい人物は、関大尉しかいなかったのである。

関大尉の返答に対して、玉井中佐は、明日にも出撃しなくてはならない、時間の猶予はない、と迫った。この約一時間前、玉井中佐は甲飛十期生を集めて特攻志願を募っている。そのことも話した。

「どうだろう、君が征ってくれるか」玉井副長の顔を見つめ、関大尉は無造作に言った。

「承知しました」その瞬間、座の重苦しい緊張がとけて、関大尉は遺書を書き始める。

薄暗いカンテラの下で、皆に背を向けて、関大尉は遺書を書き始める。

正面玄関の突き当たりは階段だ。その夜、関大尉が降りてきた階段である。サントス氏の許可を得て、その階段を上がってみた。当時、二階は司令と士官の個室になっており、キャンバス製の軽便寝台が詰めに並べられ、飛行服や手ぬぐい、日用品が所狭しと置かれていたという。

二階が上がってみると、当時あったというホールはなく、部屋の扉が並んでいる。そのうちの一つがわずかに開き、隙間から十代の女の子の顔が覗いた。知らない日本人が我が家を物色している。迷惑なことだろう。

サントス氏の住居を辞して、私たちはバスに乗った。来た道を引き返して、バスは次の目的地へ向かった。

バンバン川を再び渡る。川原にはスキと雑草が生い茂っている。川はゆるやかに蛇行し、はるか遠くには低い山並みが雲の影絵のようにぼうつと見えた。

4

私たち一行が、この日最後に訪れたのは、アンヘレスのダニエル・ディゾン氏宅だった。ディゾン氏は自宅に神風特攻隊員の祭壇を祭り、飛行服や鉢巻などの資料を展示しているフィリピン人で、私は数年前、特攻を取り上げたテレビ番組を見て氏のことを知った。フィリピン人なのに、日本人のように特攻隊員を深く尊敬し、追悼してくれる人がいるとは。私は驚き、この人はどんな人なのだろう、と思った。バスがアンヘレスの町に入ると、マバラカットやマニラで目にした町並みと同じように、軒上に英文字の看板を

つけたマッチ箱のようにこまごました店々が道沿いに並び、子どもたちがたくさん遊んでいた。

そんな雑多な町並みを抜けてバスが着いたのは、アメリカ風の住宅が整然と建ち並ぶ高級住宅地だった。家の正面にシェードが下りた白い鉄筋の家がディゾン氏の住まいだった。

青々とした観葉植物が置かれた玄関ホールに入ると、軍艦マーチが勇ましく流れてきた。大きなクリスマスツリーが飾られた応接間に、白シャツに白ズボンの白髪の男性が、まるで海軍士官のように直立不動の姿勢で出迎えた。ディゾン氏だった。

応接間の壁に、ディゾン一族と思われる軍人のデッサン画が飾ってあるのが目を引いた。後で知ったが、これは大学で美術を専攻したディゾン氏が描いたものだった。同じように額に入ったハイスクールの卒業写真や若夫婦の写真はディゾン氏の子供たちだろう。幸福そうに微笑んでいる品のよい若夫婦の写真をみると、父親であるディゾン氏の家族思いの温かい人柄が偲ばれた。クリスマスツリーの脇に扇風機があるのはいかにもフィリピン風だったが、ガイドの鈴木氏の話によると、クリスマスはフィリピンでは一大行事であり、人々は何カ月も前からツリーを

飾って心待ちにするそうだ。

菅原団長の挨拶のあと、私たちは応接間の隣の、「神風博物館」を見せてもらった。入ると正面は庭に面したガラス戸になっている、明るい長細いその部屋には、遺品や遺影がさまざまに陳列してあった。白い布を敷いた台の上には、飛行帽や飛行眼鏡、飯盒、水筒、靴、ガスマスクなどが並んでいる。壁には、特攻隊員の遺影、バンバン川のほとりで大西長官が水盃を交わしている写真、敷島隊の五人のデッサン画、日本兵のカライイラスト（ディゾン氏筆）などが掛っている。部屋の奥には、小さな神棚が祭ってあった。その脇に、神風の鉢巻をして軍刀を差した特攻隊員のマネキンが立っている。唇が真赤で、女のマネキンのようだった。私はディゾン氏に、なぜ特攻に共感し、慰霊顕彰活動をしているのか、と尋ねた。氏は応えて、こんな話をしてくれた。

私が幼いころ、アンヘレスの町には、日本軍が駐屯していた。日本の兵士たちは特別な人たちだったから、近寄ることはできず、自分も遠くから見ていただけだった。

ある日、ハチマキをした兵士が歩いて来るのを、私は見た。彼が通ると、

他の兵士たちは皆、うやうやしく頭を下げた。私は幼かったが、それを見て、何かただならぬ気配を感じた。

ハチマキをした兵士は、弁当の包みを持っていた。痩せてひもじそうなフィリピン人の少年がいた。彼は、その少年に近づくと、持っていた弁当の包みを与えた。それはお握りだった。私は、それを見て、深く心を打たれた。戦争が終わり、十数年が過ぎた。あるとき、私は本を読んだ。それはカミカゼについて書かれた本だった。その本を読んで、私は幼いころ見た兵士のことを思い出した。

あのハチマキをした兵士は、特攻隊員だったのだ・・・。
私は強く心を動かされた。以来、カミカゼのことを研究し、このような活動をして、カミカゼの兵士たちを追悼している。

そうか、そうだったのか、と私は思った。ディゾン少年は、ハチマキをした兵士に、崇高な特攻隊員の心を見たのだ。それは一身を捧げつくした者だけに宿る、戦争の暗黒を照らしてくれる清らかな光だ。私はフィリピンに来てよかったと、この日初めて心から思った。

ディゾン氏、白田智子さんと三人で私は記念写真を撮った。白田さんの父

上は、昭和二十年四月一日、第二十三振武隊長長として沖縄海域の敵艦船に突入した。当時、白田さんは一歳半、姉はもうすぐ四つ、弟は乳飲み子だった。母は、ラジオの戦況ニュースで夫の戦死の報を聞き、乳が止まってしまった。終戦の少し前に、弟は亡くなった。特攻隊員として出撃した父のこと、残された母の悲しみと苦労を綴った『特攻隊長伍井芳夫』を白田さんはディゾン氏に贈呈した。

ディゾン氏宅を辞した私たちは帰路につく。晩はマニラ泊。バスは走り出した。旅は始まったばかりだった。

参考文献

- 『神風特別攻撃隊の記録』（猪口力平・中島正著 昭和五十九年 雪華社）
- 『敷島隊の五人』（森史郎著 昭和六十一年 光人社）
- 『神風特攻隊出撃の日』（小野田政著 昭和四十六年 今日の話題社）
- 「軍神関行男海軍中佐を偲びて」（愛媛県西条市常心榎本社社務所内 関中佐慰霊奉賛会 昭和五十三年）
- 『日本戦跡・安島太佳由写真集』（安島太佳由著 二〇〇二年 窓社）

陸軍大尉若杉是俊(続)

陸士57期 深川 巖

本続編では、第一章を特攻に対する我々世代の考え方を、第二章には「若杉・日野あれこれ」として語りたい。

第一章 特攻考

特攻については、拝命者にしても、それぞれの立場、状況、時期、場所によって意見の相違があるが、特攻についての一つの考え方として、当時どう思ったのか、今どう思うのか、このことについて、海兵72期、陸士57期元隊長の記を掲載する。共に大東亜戦争最後の実戦体験期である(当時21歳)。

☆ ☆ ☆

『特攻の心』

第一次世界大戦のさなか、フランスの首都パリをドイツの新兵器、大型の硬式飛行船「ツェッペリン」が空襲した。迎撃に飛び立ったのは仏空軍の新锐戦闘機「モラーヌ・ソルウェニエ単葉」1機。飛行船を狙って、携行した2発の小型爆弾を次々と投下したが外れた。飛行船は悠々とパリ上空に差し掛かり、市街目掛けて爆撃を始めた。

文明を誇る自国の首都の、自分の住

む町の破壊が目の前で始まった。武器を使い果たした戦闘機の操縦士は、たまり兼ねてか、急降下してこの飛行船目掛けて突入。水素ガスを満たした飛行船は大爆発を起こし、火達磨となつて墜落していった。

第二次世界大戦中、昭和19年10月に比島レイテ湾に侵攻して来た米軍は、周辺確保の後、ミンドロ島サンホセ市に大部隊を上陸させた。重巡洋艦「足柄」は、軽巡洋艦「大淀」、第二水雷戦隊の駆逐艦6隻と艦隊を組んで、月の12月26日夕刻、上陸地点を急襲させた。米軍は数十隻の在泊艦船を退避せよとした。米側の記録によれば、B二五爆撃機のほかP三八、P四七など各種戦闘機合わせて105機が迎撃に飛び立っている。

戦艦と誤認されて集中攻撃を浴びたが、名艦「足柄」は、爆撃をすべて回避し、猛烈な対空射撃を続けて殆ど被害を受けることなく、敵の上陸地点に向かって28ノットの戦闘速力で進撃した。米軍が折角確保した橋頭堡は、一転、累卵の危機に曝されたのである。

この時、双発双胴のP三八単座戦闘機が1機、「足柄」に向かって機首の4挺の13ミリ機銃を撃ち続けながら、そのまま左舷に突入した。曳光弾の輝

く束が低く「足柄」の艦腹に向けて伸びていた。

厚い鉄板を突き抜けて、後部兵員室の中に飛び込み、航空燃料と携行弾薬で大火災になった。あと僅か何十センチか上であつたら、そこは酸素魚雷16本を装填した発射管室だったのである。

世界随一の高性能を誇る九三式魚雷は、頭部の炸薬量が、三型では800キロもある。次発装填用も含めて32本の魚雷が並んでおり、高圧の純粋酸素自体の破壊力もまた大きい。英国王の戴冠式にロンドンまで回航して参列し、世界中にその名を知られた、歴戦の幸運艦「足柄」も一瞬にして轟沈は免れなるところであった。

「足柄」は消火作業を続けながら敵泊地に入り込み、照明弾を打ち上げて明るく照らし出された物資集積所に向けて20センチ主砲10門の一斉射撃で、立て続けに大量の砲弾を叩き込んだ。敵魚雷艇も高角砲の水平射撃で撃退した。

充分な成果を挙げて、引き揚げる途中、米軍操縦士の遺体を丁寧に水葬した。「足柄」も47名の戦死者を出していた。殆どは、突入した彼が一人で起こした大火災のために斃れたのであるが、その壮烈な最期に、同じ軍人として敬意を表したのである。仲間の戦死者と同じく、「足柄」乗員全員の敬礼

を受けて、毛布に包まれた彼の遺骸は、南の青い海に沈んでいった。

爆撃で「大淀」が損傷、駆逐艦「清霜」が沈んだが、この「禮号作戦」は戦争末期の数少ない成功を収めた海上戦闘である。

多くの戦史が、被弾した「B二四爆撃機」が墜落して、偶々「足柄」に当ったとしている。だが、その時の高角砲指揮官ほかの目撃者証言によれば、事実は戦闘機のP三八であり、烈しい対空砲火に被弾していた様子はあっても、超低空を、全速で飛びながらの、明らかなたたりであった。

たとえ被弾していても、負傷していても、すぐ近くに味方の飛行場があるので、帰れば自分は助かるのに、この米人パイロットは日本の神風特攻機と同じ行動をとったのである。

この二つの例は、味方の危機に遭遇して「これが今の自分の取るべき最善の手段である」と咄嗟に判断して、体当たりを敢行したものと思われる。

人間ならば誰でもこのように、自分の身を捨てても多くの人を救う行動に出るであろう。川に落ちて溺れかけた子供を見た人が、その子の命を救うために、危険を冒してでも飛び込んで助けるのと同じである。それが人の自然なのである。

この重巡洋艦「足柄」に、私は「回天」の搭乗員になるまで乗っていた。19年6月、敵がサイパンに来攻したとき、陸奥湾にいた「足柄」は横須賀に進出、待機したが、「あ号作戦」で出動した日本の機動艦隊が敗退したので、むなしく引き返した。

生命線と呼んでいたマリアナ諸島を奪われてしまった。その後は、どうなるか？

敵の根拠地が前進して来たと同時に、ここから我が本土まで、遮る防波堤が何もなくなった。このまま日本が為すところなく、艦艇、航空機の消耗を続けてゆけば、米軍は日本沿岸の何処にでも上陸できるのである。

本土が戦場になれば、日本民族の大量殺戮、国土の破滅となることは目に見えている。何とかして敵軍の侵攻を食い止める手段はないものか、桶狭間の大逆転を打つ新戦法、新兵器はないのか。私は日夜焦燥に駆られていた。

19年8月、「足柄」を退艦して、海軍の一角に「人間魚雷・回天」が出現し、我々がその搭乗員になることを知った日、「これだ！この新兵器で日本は救われる」と、仲間と共に喜び合っている。夜の更けるのも知らず語り合った。100本の眼のある魚雷が敵泊地に躍り込んで、大艦隊を一挙に覆滅す

る光景を一同は胸に描いていた。ようやく日本の将来に光芒を見出すことが出来て、浮かび上がって来た安堵感が快かった。

体当たり兵器なら、任務達成の瞬間に自分の肉体は粉々に飛散し、生命は消滅する。ただ、それで掛け替えの無い美しい日本民族をこの地上に残すことに繋がれば、一身の辛さに遥かに勝る価値がある。

仲裁役がない戦争は、どちらかが破滅するまで続く。そして、敗戦国の悲惨は古今の歴史が示す通りである。しかも、日本の紙と木で出来た家ばかりの、非戦闘員の市街を爆撃し、焼き尽くすことは、米国自身が戦前から高言し、日本国内でも書き立てられていた。絶対、近付けてはならない相手なのである。

本来ならば、日本の艦艇、航空機が敵艦隊を撃退する筈である。「生還するすべのない特攻」は考えることもない。しかし、我らになお、多くの大艦ありと言っても、底に穴が開いて、水が入って来れば沈む。制空権、制海権に支えられてこそ「浮かべる城」なのである。現実には、圧倒的となってきた戦力の量と質の格差から、歯が立たず、敵に近づくことすら出来ない状態になって来た。

本土侵攻を防ぎ止める手段は、最早、我が身を弾丸に代える特攻しかない。これが当時の日本の若人をめぐる客観情勢であった。

即ち、特攻は一人の日本男子として最大の効果を上げることが出来る配置であった。あの戦局のもと「日本男子として最大の効果を上げることが出来る配置であった。あの戦局のもと「日本」を護る見地からは、日本人の全体から考えて、特攻戦術が最も合理的であった。効率は最上である。「一死千

殺(侵攻軍を)」であり、「一死千生(日本国民を)」であった。尤も、意識としては、目標は敵艦を沈めることであり、敵の人間が対象ではない。一言で言えば、「自分が死ななければ、日本人が大量に殺される」ことであって、「殺させないために、自分が死のう」という状況になっていたのである。

「無謀で狂気」と、今ごろ言うのは当たらない。事の是非は、その時の状況に身を置いて論ずべきである。どうしてこんなことになったのか、などは別の次元の問題なのである。

命を捨てて他を救うという点では、前記の欧米人の「体当たり攻撃」の例は、日本が行った「特攻」と基本的に共通する。異なるところは「偶然的の危

難に遭遇し、その場の判断で身を捨てた」のではなく、「自分の国が置かれた現実の情勢を理解して、国と民族を護るためには自らの生命を捨てることが必要、かつ意義があると判断し、望んで還らぬ任務に就いた」点であり、その上で「予め命を受けて、死地に向け出発した」ことであろう。

自殺を禁ずる教義から奨励もできないので、欧米では、体当たり攻撃が時にあっても多くはない。むしろ、伏せたといい。だが、日本では七千人近くにも及ぶ若人が特攻戦没者として名を残している。これほどにも数多く「特攻」のために若人が集まり、組織的に実行した民族、国家は他に類を見ないであろう。

特攻を語る時、最も重要なのは、隊員たちが「如何なる状況のもとに、自分が如何ようにあるべきか判断し、どんな気持ちで死地に赴いたか」という点であろう、と自分は考える。(これに触れない、また、正當に伝えないレポートが多い。)

「回天」の場合だけ見ても、特攻隊員の経歴、年齢が色々なので、物の考え方に、人により相違があつて当然である。動機となったものは、天皇制、国体を護持する純忠、至純至高の愛国心、身を惜しまず戦う日本武士の敢

闘精神、戦勢の挽回策、潜水艦の戦力回復、危難に立ち向かうのが男の務め、親兄弟への情愛から等々。

どの要素に自分が共鳴するか、自身自身を納得させる力があるか、人によって強弱、色合いに差こそあれ、根底にあって共通するものは、肉親、友人など、自らの周囲にある親しき者、愛する者の生命と平和、幸福を護るため、貢献できる場にある自分が献身しよう、との思いであったようである。

「回天」の創始者は皇国の急務として熱誠を以て幾つもの障壁を乗り越え、非常の必死兵器の実現を遂に成し遂げたが、国体護持の一事だけで献身できた人は、「回天」の搭乗員合わせ1375名のうち、数で見れば少なかった、と私は思っている。

通常の戦闘で「死ぬかもしれない」と、確実に生命が絶たれる出撃特攻隊員とでは心理状態が全然違う。特攻隊員たちは、自分の人生がこれっきりになるのであるから、本人の全身全霊を挙げて、本音のところで考える。受けた教育だけで、すんなりと収まるものでもない。それぞれに考え抜いた上で「自分は何の為に死ぬ」という死生観を固めている。固まらないうちに出撃した隊員の心中は無惨である。

特攻隊員となってから出撃まで、飛

行機の場合は、纏めるのに、或いは日数が不足した例があったかも知れないが、訓練期間の長い「回天」の場合、考える時間は充分にあった。

自分自身で納得していなければ、一つしかない生命を心静かに捨てられるものではない。生あるものの本能である死への嫌悪感をも抑えて、「回天」の出撃搭乗員が透徹した気持ちで、潜水艦から発進する時までの日常を平然と過ごしたと伝えられている。

「それは諦観からではない。人と世に尽くす使命感、満足感からであった」と、同じ環境を共に過ごした私どもは理解するのである。

聖書の一節には「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし。」との記述がある。(ヨハネ傳福音書 第五章)

死にたくて死んだ特攻隊員は一人もいないであろう。特攻は、自分に原因があつて自ら命を絶つ自殺とは異質のものである。自分のために死ぬのではない。心身共に健全な若人が、ほかの多くの人々を救うための愛の行動であり、大いなるものへの文字通りの献身であった。人間の根幹に基づく徳性と

言えるであろう。「自分さえよければ」というエゴイストには、特攻は出

来ることではない。

戦前、日本人は美しい民族であった。命を捧げてでも護らねばならないと思うほどの良い国であった。値打ちがないものであれば、誰も身を捨ててまで護ろうとはしなかったであろう。

この国が将来「特攻隊が要るような事態」になることがあってほしくない。だが、気持ちの上では、「誰もが何とんでも護り抜こうとする」善い社会になってほしいと願うのである。

小灘 利春
 (元回天搭乗員・第二回天隊隊長)

「特攻」平成9年5月号より
 ☆ ☆ ☆

『元特攻隊長の回想 —今、何を学ぶべきか—』

一 神鷲特別攻撃隊長を拝命

私は、昭和20年6月、神鷲特別攻撃隊長を命じられ、伊丹で編成した。隊員は、大半が少年飛行兵15期で、ようやく三式戦の離着陸ができる程度の若年パイロットであった。伊丹、八日市で訓練、7月に芦屋に移動した(この時、振武隊となる)。

そして8月13日、奇しくも私の誕生日であったこの日、「第30戦闘飛行集団に配属、8月15日までに都城に移動完了せよ」との命令を受領した。終に来たるべき時が来た。しかし、それは

ど切迫した気持ちはなかった、と自ら言うのもおこがましいが、一同迷うところもなく淡々たる態度であった。

編成以来2カ月余、十分とは言い難いが、出来るだけの訓練はやった。あとは運を天に任せるのみである。全機沖繩に到達出来るか、そのうち何機が体当たり成功するか、全ては神のみぞ知るである。

さて、翌14日は身辺の整理と飛行機の整備に、15日には天皇陛下の重大放送があるというので、放送が終わってから出発することにした。しかし、陛下の莊重なお声も雑音にかき消されて聞き取ることが出来なかった。

いよいよ時局は容易ならざる事態を迎えたので、国民の一層の奮起を促されてのお言葉であろうと想像した。まさか終戦になったなどとは知る由もなかったから、その後都城に向かって出発したのだが、炎天下に発達した積乱雲のため飛行困難となり、芦屋に引き返すことになった。

そして、明るる16日、出発前の点検で通信機の不備を知り、通信隊に電話したところ、電話に出た通信将校から「戦争が終わったらしいですよ」との連絡を受け、一瞬、まさか!と我が耳を疑った。だが「この戦隊も、将校と現役の下士官以外は既に除隊を開始

しました」と聞くに及んで、ようやく戦いが終わったことを知った。「終に死なずに済んだのか」という思いが一瞬心の中をよぎった。今まで死を覚悟していたのが嘘のように思えた。

二 十死零生を覚悟するまで

もともと「特攻」は一応志願の形式を取ってはいいた。しかし、志願の書類に「志願しない。志願する。のいずれかに○を付けよ」とあれば、本心はともかくとして「志願する」に○を付けてざるを得なかったのが、当時の私であつた。私とて死を覚悟しないわけではなかつた。しかし、それは九死に一生の覚悟ではなかつた。そこまでの死生観は確立出来なかつた。

それにひきかえ、同期のトップクラスだった若杉是俊などは、真っ先に、特攻の先駆けとなり、昭和19年12月21日ミンドロ島沖の敵船団に突入した。「殉義隊」である。彼は水戸飛行場を出発前、親しい友にこう語つたという。「自分こそ真っ先に志願しなければならぬ」と。強烈な「責任感」である。戦後初めてこのことを知つた。頭の下がる思いである。

艦を沈め、死に花を咲かせてやろうという気持ちになつた。ようやく十死零一の決心がついた。その頃特攻志願の書類が回ってきたので、「志願する」に○を付け血判署名までした。数日後特攻隊長を命じられた。以上が私が特攻隊長となつた経緯である。

しかし、いわゆる「悠久の大義に生きる」というような心境では勿論なかつた。にもかかわらず敢えて十死零生の特攻を志願したのは何か、「楠正成の湊川の心境」といえば聞こえは良いが、単なる「諦観」から特攻を志願した。人間の違いである。

あれから既に半世紀が過ぎた。終戦があつたと数日遅かつたら、弱冠22歳でこの世にサヨナラしたはずの男が、今や喜寿を迎えようとしている。特攻隊長になつてからも、同期の何人かが迎撃に飛び立って戦死した。特攻を志願したばかりに、奇しくも私は生き延びることになつた。運命といへばそれまでだが。何か計り知れない何ものかがあるように思えてならない。

三 日本の精神文化に根差すもの

さて、戦後53年目を迎えた今日、元特攻隊長として、いささか私の気持ち述べたい。それは、特攻で亡くなつた英霊に心から鎮魂の誠を捧げるにや

ぶさかではないが、決して「特攻」を賛美するようなことがあつてはならない、ということである。ここで誤解があつてはならないのは、特攻隊員の死と「特攻」そのものを同一に論じてはならない、ということである。絶対に生還を期し得ない「特攻隊員」が一身を国家に捧げ、それこそ肉弾となつて敵艦に体当たりするという、その崇高なる魂は、将に神の権化として永遠に祀られなければならない。国家の存続する限り、これに異論を差し挟むものではない。ただ「特攻による死」が壮烈なる余り、「特攻」そのものまでが美化されてしまうことを危惧するだけである。それにしても大西滝次郎中將が、自ら「統帥の外道」とまで言いつつも敢えて行つたと言われる、その「特攻」である。ここまで駆り立てたものは一体何なのだったのか。平和の時代にあつて、狂気の沙汰というのはたやすい。しかし、そこには、日本民族の精神文化に根差す何かがあるような気がしてならない。

ともあれ、この壮絶な「特攻」を以てしても戦局を挽回するには到らず、終に日本は敗れ去つた。そして、牙を抜かれた狼は「迷える子羊」となつた。それでもまだ良い。しかし、敗れたりとはいへ、その故にこそ、日本が立派

に生まれ変わったのならまだしも、最近のこの世相は何たることだろうか。高級官僚を始めとする倫理の荒廃。上が上たらずんば下これに倣う。年端もいかぬ少年の殺傷事件、一体歯車はどこまで狂うのか。あの「わだつみの声」が聞こえてくるような気がしてならない。「こんな筈じゃなかつた筈だ・・・」と。特攻隊員の死を無駄にするかしないかは、一にかかつて戦後日本人自身にあると思うのだが。

四 日本民族精神の発露

戦争末期、まさに命運も尽きんとしていた時、20年8月中旬沖繩に対する特攻作戦は計画されていた。戦後このことを知つた。最後の抵抗であつた。「特攻」、もうこれしか戦術がなかつた。私が都城移動の命令を受けたのもその一環であつた。

この「特攻」についても少し考えてみたい。「統帥の外道」とまで言われつつも終に踏み切れてしまつた「特攻」、そして雄々しくも敢然として死地に赴いた「特攻隊員」、これらは厳然たる歴史の事実である。この歴史的事実から日本民族の国民性をどう見るかが重要であつて、そこから初めて歴史の教訓が生まれてくる筈だ、というのが私の

考えである。この際「志願か命令か」の形式論は意味を持たない。心から志願したか否かも問うところではない。これらは末梢の問題である。また、戦史に例を見ないと言われる「特攻」を誰が考え、誰が計画し、誰が命じたか、などという「責任論」も無意味である。もはや個人の問題ではなく、組織として、国家として、日本民族としてトータルに考えるべきではなからうか。なぜなら、軍隊という組織の中で自然発生的に生まれ、命じる者も、命じられる者も、戦争という異常な環境の中で、日本民族の精神文化(精神主義と置き換えてもよい)が作用した結果にはかならないからである、というのが私の考えである。

「玉砕」という言葉がある。戦争中しばしば聞かされた。アメリカ的な合理主義から見れば、なけなしの戦力をむざむざ消耗するだけの戦法ではないか、ということになる。撃墜されたB二九の搭乗員を救助すべく、日本近海にまで潜水艦を出動させていたアメリカなら、当然そうなる。

この際「玉砕戦法」が持つ戦略的価値については一先ず措くとして、これとても日本文化と深い関わりがあるように思えてならない。「滅びの美学」という人もいる。もともと日本は「言

霊」の国である。美辞麗句が多い。言葉に酔いしれるところがあるように思われる。「玉砕」にしてからがそうである。「全滅」というところを「玉と砕ける」と表現する。「神風」という言葉も何度か聞いた。自然現象の台風も神風となる。

五 特攻の歴史に学べ

ともあれ、最も合理性を求められる戦争においてなお、この精神主義が作用したというのが歴史の教訓ではなからうか。ここでもまた誤解されて困るのは、精神主義と精神力を混同されることである。精神力が戦力の重要な要素であることは論を俟たない。

いずれにせよ、あれだけの犠牲を払って戦った先の大戦である。これから学ばずして日本の将来がある筈はない。歴史に学び、これを教訓として同じ過ちを再び繰り返さず、それが英霊に対するせめてもの供養であろうと考え、敢えて「特攻」に対する愚見を述べた次第である。

因に、「陸軍特別攻撃隊」(生田惇著)によれば、特攻で亡くなった英霊は1404柱にのぼる。なお、本土決戦用として待機していた特攻隊は334隊2108名、その内「九五式練習機」の隊は、138隊960名であっ

た(人数には一部不明を除いてある)。実に半数近くを練習機が占めていた。練習機が駆り出されるとは、戦争を如何に終結させるかより「特攻」そのものが既に目的化してしまったような感じさえ受ける。

「一億総特攻」という言葉も聞いた。国家そのものが「玉砕」してしまっは元も子もなくなるのだが。

菊地 洋

(元特別攻撃隊第149振武隊隊長)

—『偕行』平成10年8月号より—
☆ ☆ ☆

第二章 若杉・日野を偲ぶ

《同期生の話》

○森田茂君

(常陸戦闘・特126神鷲隊)

二次転科で昭和19年11月まで能代飛行場で訓練を受けた。57期の補佐教官は、若杉・柴田・浜田・荘司の4名で、料理屋「都亭」は我々の溜り場だった。

特攻命令は11月初め、若杉君と日野二郎君である。出発前夜「都亭」で送別会をやったが、その時の若杉君には、

本当に惚れ惚れした。男が惚れる、正しくそうだった。「男一度立つからは」を歌って踊った姿を今でも思い出す。絶賛しても足りない男だ。

私(森田)は昭和19年9月狭山から水戸に入校した。次の日か翌々日か、特攻の希望調査があった。「熱望・希望・希望せず」だった。若杉は「熱望」としたろう。彼を利用したのではないか、そんな気もする。

(森田君は平成13年死去。この話は昭和57年3月18日である。)

○星野憲一君(航通・飛行58戦隊)

若杉君が特攻出発の前夜、奇しくも私は二人きりで語り合う機会を得たが、それは昭和19年12月、水戸偕行社の環翠亭の一室であった。

航通校の卒業も間近に迫った一夕、環翠亭を訪れた私は、玄関でバツタリ若杉君に出会い、どちらが言い出すともなく、一献傾けようということになった。

彼が最近、特攻を志願したということとは、周辺の同期生の間で話題になっていた。

六畳の日本間に通されて座に着くと、私は直ぐに切り出した。

「貴様は特攻を志願したそうではないか」

「……」
やや唇を引き締めて、彼は頷いて見せた。

「血書で志願したと聞いたが？」

「・・・まあな」

彼は懦夫を奮起させるような返事はしてくれなかつたが、或る同期生の人に、「貴様はトップだから、やがては陸大に行って参謀懸章を吊すことになるだろうからな」と言われたことに憤慨して、率先、血書を以て志願したという風評は人々の間でささやかれていた。無遠慮な私は更に質問してそのことに触れたが、「それだけの理由でもないんだ」と事もなげに答えた彼は、もうそのことには触れないでくれと言わんばかりの表情であつたので、さすがの私もそれ以上問ひ糺すことはできなかったが、最後に「明日出発する」と聞いた時、思わず「明日・・・」と、口籠りながら俄かに動悸の高まりを禁じ得なかつた。彼は志願したものの、未だ特攻隊員として決まっていな

と思つてた。その時点から、私の眼は「確実に死を覚悟した人間」を見ていた。しかし、彼はさりげなく杯を口に運ばせながら、新鋭戦闘機の性能や操縦性などについて語り、いつもの明快な表情は少しも変わっていないかつた。

環翠亭のホステスは、身分は軍属ということだったが、若い戦闘機乗りの若杉少尉殿は、私など通短(通信の短才)にとつて恨めしい程憧れられてい

た。時折嬌声を発してはしゃぐ彼女たちを前にして、彼は変なスター気取りもなく、また、心のわだかまりも見せず、いつの間にかこれほど酒席の処世術を身に着けたのかと思えるような大人びた態度だった。私はそのやり取りを感心しながら、最早、彼は同輩ではなく遙かに高い境地にいることを知るとともに、背伸びしても及ばないという卑屈さを見抜かれまいとして、懸命に振る舞つたことを今でもはっきり思い出す。

世俗の煩惱のすべてを断ち切つた大悟の境地は、長年の修業を経た高僧に見ることができると、私はそれを若杉君によって見る事ができた。そして玄関で別れる時、私は彼が踵をめぐらすまで挙手の敬礼をし続けた。

83名の特攻隊員を始め各戦域に散華した同期生は700余名に及ぶが、人それぞれの覚悟と死に方があつたと思ふ。しかし、若杉君のそれは卒業成績とともに、やはり第一級であり、正しく将に將たる器であつたと信じている。

『偕行』昭和57年12月号より
(星野君は平成12年12月死去)

○足立信行君(広幼一訓・戦闘)

※「若杉のことで、君の思つた若杉

又は君の思う特攻について、片信でも良いからお聞かせ下さい」との小生(深川)からの手紙に、足立君から次の葉書をもらつた。

「若杉君のことについては、村上君が果たせなかつた、継続中の最後の仕事でしたから、彼も喜ぶでしょう。又、若杉君も、戦局挽回の為の特攻に疑問を持っていたことでしょう。情報不足と上司の命令の為に精神力だけで戦うしかなかつたのですが、それはそれで立派なことですよ。しかし、之を特攻精神の発露と言うから後世の人も本人達も理解出来なかつたのではないでしょうか。若杉の真意を通じて特攻なるものを後世に伝えて下さい。御苦労様です。」(平成16年8月17日受翰)

☆ ☆ ☆

《先輩期の話》

○篠原修三氏(陸士56期・若杉が乙種学生時の操縦教官)

前略 御芳翰ありがたく拝誦いたしました。昔のことは私にとりまして心に深く刻まれた傷跡みたいなもので、忘れてしまいました。書き尽くせない、事柄でございます。書き尽くせない、書き尽くせないでございます。心中をお察し下さい。

御健勝をお祈りしつづペンを置きます。草々

※若杉日誌・昭和19年10月頃に、個人名を書かない若杉が二度にわたつて「篠原中尉殿」と記している。余程尊敬していたことだろう。その篠原氏からの御返信である。若杉に対する深い深い心の羨と哀惜の情を垣間見る思いであつた。

(平成17年11月頃の御返信)

☆ ☆ ☆

《後輩期の話》

○並木竹彦君(陸士58期・航空)
昭和19年2月頃、照屋(同期生)から、来る休日に若杉先輩から飯能方面に外出を誘われているので、良かったら一緒に行かないか、と言われ、是非一緒にしたいと応諾。

若杉先輩が我々を誘われたのは、熊幼(熊本陸軍幼年学校)出身の我々が復校1期で、先輩期がなかつたので、先輩期による親愛の導きがなくて淋しいだろうから、幼年校は違ふが少しでも替わりが出来たら、という思い遣り深い慈しみの心から出たお誘いであつた。

外出先は、飯能に行つて、近くの天覧山に登つた。話題は主に懐かしい幼年校時代の思い出であり、特に熊幼には先輩がおらず、復校1期として、一度途切れた熊幼の伝統精神を如何に復興するか主眼が置かれ、また、古い

時代にあった旧弊は一掃することに努め、伝統の上に新風を創ったことなど。

若杉先輩は少しも肩を張ったようなところがなく、落ち着いていて親しみと、そして重みがあった。尊敬し模範とする先輩でした。

(平成16年12月書翰)

☆ ☆ ☆

【日野を偲ぶ】

《同期生の話》

○宮本了吾君

(常陸戦闘・長野県在住)

鹿児島県の知覧特攻平和会館に入ると、すぐ入口に軍刀を携えた飛行服姿の勇士が悠然と並んでいる。「おい、元気か」と語り掛けてくれているような和やかな顔、顔、顔・・・

甲斐玉樹軍神、貴兄は煙草が好きで、あの頃常陸の宿舎で私の配給分を全部吸ってくれた。いつもムスタングの模倣型を手にして空中戦の戦技を練っていた。初夏の頃チフス等の四種混合接種があり、私が終わって宿舎に帰った途端、急に腹痛を覚え、ベッドに倒れ伏してしまった。後は何も知らなかつたが、皆の話を知ると、ひどい下痢で、臭気堂に満ち部屋中ブンブン。それを慣れない手付きで、甲斐が先頭に立ち皆で始末してくれたという。今改めて

多謝。

訓練も末期になり、直接の教官である1期先輩の平井俊光軍神、訓練も熱が入り、海上超低空編隊飛行で、飛行機の腹が海の波に着く位に飛んだが、今、鹿島の海原が懐かしい。また、私も卒業して赴任する前夜、大洗の料亭で、二人差し向かいで夕食を頂いたその時の赤い大きなお膳が未だに有り難く思い出される。その料亭がどこの家か分からないが、訪ねてみたい気がする。

日野二郎軍神、私が小隊の空中集合で事故を起こし、落下傘降下で助かったことがあった。その翌日だったと思うが「おい、俺と一緒に飛ばないか」と言ってきた。教官の許可も彼が取ってくれた。積雲が点々とする青空の中で、編隊を組んで思い切り飛び廻った。そして、気持ちも清々として自信を持ってたのである。何かあった時は、間を置かないで空へ上がれ。この意気込みを彼は私に教えてくれ、その後何度か役に立っている。真の友情が暗涙となって今湧き出る。だが、皆敵艦に突っ込んでしまった。

その他にも多くの戦友を偲ぶ時、例年の、つばさの塔のお祭りが、私自身唯一の慰めのような気さえする。

慰霊祭関係の役員の皆様、また地方

の方々の御配慮が本当に有り難く、感謝の極みであります。有り難うございます。

☆ ☆ ☆

兄日野二郎少尉を偲ぶ

弟 日野研三

時は、昭和19年11月末、当時60期生として陸軍予科士官学校在校中の私のもとに、兄より一通の書状が届いた。開封してハッとしました。そして、来たるべきものが来たと言う思いが頭を駆けめぐる。

「弟に與える最後の書」

昨日まで、他人の出撃を見て快々として楽しまざりし兄の身辺は、一夜明くれば光輝に満ちたり。一陣の秋風飛翼を掠めて去れば、爆音四海に渡り、旭光更に鮮やかなり。四望すれば、満山秋氣鬱勃として爽快極まりなく、仰げば富嶽に秋風煙って時局の急を示し、伏せば紺碧洋々として国土の森厳を物語る。

二郎乏しきを以て

大命を押し征途に上る。歓喜感激何ものか之に比せん。

見よ、見よ、来たるべき航空大決戦こそ、兄が粉骨碎身以て鴻恩に報い奉る好機なり。

さらば愛する弟よ、健なれ、壮な

れ、幸多かれ、春秋多き弟よ、さらば、さらば。

晴れの出陣に当たって、今昔の感にたえず。一文ものして以て訣別の詞とす。

研三殿 侍史

何度も何度も読み返してみる。空中戦士として、晴れの死に場所を得た光栄に感激しつつ、そして祖国日本の彌栄を祈念して、悠久の大儀に赴かんとする気概。

肉親の兄と言うより、一人の皇国軍人として、又一人の先輩として自分を叱咤激励してくれる。

日頃我々は、予士校入校以来、軍人として立派に死ねたらと教えられてもいたし、自分にも言い聞かせていた。正に、その通りの手本を示してくれる兄。

その晩、ひとり兄を憶う。幼い頃から三つ年上の兄は、何かにつけて私の目標であった。そっくりそのまま三年前を走り続ける兄、平和な頃の家族団欒。色々浮かんでくる。

そして、兄は勿論、自分も、もう故郷の山河に接することはないだろうと、取り留めのないことを思い出す。

ある程度、今日あるを覚悟していたが、いざ直面してみると心は乱れる。

ハッとして、女々しい自分に気付
き、兄に申し訳ないような気にもなる。
長い長い一夜である。不寝番の靴音
を何度聞いたことか。

「さらば愛する弟よ、健なれ、壮な
れ、幸多かれ、春秋多き弟よ、さらば、
さらば。」一文以て訣別の辞とする、
と結んでおりました。なぜ、俺は行く、
お前も後に続け、と書かなかったのだ
ろうか。この三十字はどういう意味
なんだ、何を伝えたかったのか、今と
なっては知る由もありません。

第三章 墓参のこと

「若杉是俊君墓参のこと」

九州への所要を幸いとして故若杉是
俊君のお墓に参ったのは、昭和58年2
月15日だった。前夜投宿のホテルから
個人タクシーで一先ず熊本駅に行き、
料金を精算しながらの会話で、運転手
さんの実家近くのご出身と分かり、爾
後半日間親身のお世話を戴いた。熊本
市鹿帰瀬町は菊池郡との境であるが、
運転手さんが「こころ辺りで聞いてみ
ましよう」と、案内を乞うた雑貨店が

丁度、若杉家の近くだった。ご一家は
留守だったが、ご親戚の榊田様、老人
会の福田様のご配慮でお墓参りが出来
た。若杉君は兵庫県洲本中から広幼に
入校したが、原籍地は熊本県で、当地

(旧供合村)は若杉君の父君義次様の
従兄弟若杉熊喜様が昭和8年頃村長を
なさっていた由を、福田様から伺っ
た。その昔、加藤清正が白川の氾濫を
避ける為に造ったという用水路を経
て、日溜りの台地に納骨堂、その周り
に今次大戦戦没者の石碑が並び、雄渾
に刻された「故陸軍大尉若杉是俊之
墓」があった。側面石に、殉義院誉釋

俊徹居士、左に碑文が刻されていた。
「是俊さんも嬉しかろう」、私の唐突の
訪れをも苦になさらず、深い聚落愛を
もって案内をして下さったお二人の言
葉は、帰路の車中で運転手さん共々
「本当に今日は良い日でした」と、語
り合った言葉でもあった。

帰京後両日を出でずして、若杉敏幸
様からお手紙を戴いた。文面に「母が
生存中であれば、昨日お会い出来、大
変喜んでいただろうと考えます」とあつ
たが、母上様は、昨年12月13日に御逝
去の由、もっと早く伺いすれば良かつ
たと悔やまれた。なお、お手紙の中か
ら一部掲載させて戴き、御遺族の消息
を伝える。

「初めてお便りを差し上げますので、
若杉の現状を御紹介申し上げます。私
は父義次(昭和48年6月死去)、母初
は(昭和57年12月死去)の養子となり、
昭和45年より生活をともにし、お墓を

守っているものでございます。妻信子
は、戦死致しました是俊兄の姪に当た
ります。子供は、小学校五年生の女の
子と一年生の男の子の二人です。兄と
は面識はありませんが、父母から、い
つも話を聞いておりましたので、立派
な軍人であったと尊敬を致しておりま
す。」

「日野二郎君墓参のこと」

平成16年9月7日から同月11日まで
江森敬次氏と殉義隊の航跡を尋ね、9
月8日、福山市の日野家を訪れた。颯
風18号一過後の好日だった。

当日、研三(弟)氏は新幹線福山駅
改札口で待っていて下さった。車で芦
田川に沿って廻り、お宅へ着いた。穏
やかな土地柄である。丁度屋敷内の柿
と栗がたわわに実っており、その昔、
日野家の兄弟のさんざめく声が聞こえ
るようだった。

仏間で日野君の遺墨を拝見した。そ
れは、手拭い大の白布に、母上から何
か書き残して欲しいと勧められて、出
陣前夜に認めたものである。

※素晴らしい書体としか言いようが
ない。大命を受けた陸軍軍人日野二
郎が知る大義、特別攻撃隊八紘第十
隊の任務を完遂せんとする敢斗精神
の日野少尉、そして、我が八紘隊の
責任ある第三小隊長として部下を率

いる日野少尉。私はこの三枚を拝見
して、八紘隊としての任務を受け、
その職分を真っ直ぐな勇気を以て貫
き、任務完遂という有限の死から大
義に生きんとする彼の確信を知った。
お墓は敷地内にある。広い敷地の
中に用水池がある。その向こうに小
高い台地があり、杉の木立を背にし
て御一族の墓石が並んでいる。

照空院殿殉義威光大居士、そして
側面に、故陸軍大尉日野二郎と刻し
てあった。暖かい日差しが池面に映
えて墓石を照らしていた。静かな聚
落である。釣りもしたろう、田んぼ
を眺め廻ったこともあつたらう、そ
の彼が長駆フィリピンに飛び、そし
て死した。

弟(研三)さんのお話によれば、
「戦後、父は遺族会結成以来40年間
ずっと遺族会に携わり、90歳を過ぎて
福山市の遺族会長も務めました。生来
健康でしたので出来たことですが、水
戸で兄と別れた時の親としての思いが
忘れられなかったのだと思います。」

また、母は78歳でこの世を去りまし
たが、生前般若心経千巻を書き上げま
した。これも兄への供養への思いがそ
うさせたのだと思われます。
父母は生涯、水戸での別れが忘れら
れなかったのでしょうか。」

第四章 若杉の言葉を読む

— 私考として —

一 昭和19年12月4日、宮崎県の新田原飛行場で、若杉は同期生二人と兵站宿舎で会った。旧知の三人は、宿舎一階の食堂の、隅の四人用食卓で談笑した。若杉は、二人によく来てくれた

と感謝の気持ちを述べた。それから三人は、水戸のことなど久しぶりの話となったが、その中で若杉は、さりげなく「貴様ら、特攻にはなるなよ。」と言った。別の死の方があるだろうというニュアンスだった。

※私(深川)は戦後(平成12年)、右の同期生で、生存同期生からじかに聞いた。それはショックだった。特攻について語るべき時が来たというのと、若杉については、もっと知らねばならないということだった。若杉と私を、ときには重ねながら、特攻についての考えを纏めたい、このことが本稿「陸軍大尉若杉是俊」の発端だった。

二 村上兵衛著『櫻と剣』から抜粋

「若杉が、航空兵科を志願したのは、むろん戦局が優秀なパイロットを要求したからだ、やがて彼は、真っ先に特攻隊を志願する。」

その志願のときに、申し出る若者の決意の表情の影には、ある暗さが揺曳する。しかし、若杉だけは、その暗さがまったく窺えず、じつに晴ればれとした顔つきだった。と、その志願の場に立ち会った先輩の話を、私は戦後になって人づてに聞いた。

私も、そのほかの誰であっても疑うが、若杉なら・・・と思ったものだ。しかし、それがどうやら誤りであったことは、のちに明らかになる。

戦後になってから、私はある同期生のおつまりで、そのことに触れると、「それは違う・・・」と言うものがあつた。

若杉は、フィリピンに飛び立つ前夜、台湾の高雄で、同期生の姿を探し求めた。

そうして歩兵聯隊にいたその男を、一晩中はなさず、語り続けたという。最後に、彼は、「今まで、俺は天皇陛下のため、お国のためと、言いつづけて来た。自分でも、それを信じ、いや信じていると思っていた。しかし、その言葉には、どうも本当でない部分

がまじっているような気がする・・・俺は、そのことを誰かに言い遣しておきたかったんだよ」

若杉はそう言い遣し、そうしてフィ

リピンに飛んで、敵艦に体当たりして死んだ。

その心根を想うと、私はあわれでならない」

☆ ☆ ☆

二つの言葉は理解出来る

昭和19年10月、11月頃の特攻編成には余裕があつた。「志願スル」、「志願セズ」が、名目的としても、前提とされ、志願者中から指名された。いきなりの下命ではなかつた。従って、親しい同期生に、ある状況下で、ふと言つた。しかし、苛烈な戦局となつた沖縄戦では、様相が一変する。攻撃精神の発露であつた特攻は、制度としての特攻となつてしまふ。本来は、行つてくれるか、頼む、であつた用兵が攻撃手段となつてしまつた。特攻隊となつた若杉は、実編成を通じて今後の特攻隊の姿を予見したのではないか、若杉は先に見える男だと、私は思う。い

一番に特攻になつた男が、ムリするな、と言つ、—実に闊達な言葉だと思つ—

☆

私の場合は沖縄戦用だった。「志願スル」よりも特攻になつて当たり前、何時命令されるか、秒読みの段階だった。

昭和20年5月3日夕、特攻隊の内示を受けて先ず思ったのは、若杉も特攻だったなあ、であり、異存はないが、何故選ばれたのか、いや、これは考えなくてはならないことだ、であつた。若杉に比べ全くの凡俗の私だった。

5月4日、明野本校本館前で20個隊120名の編成が行われた。私は振武197隊、隊員は少尉2名(幹候7期・8期)伍長3名(少飛14期)、私は隊長だった。「俺は隊長だ。」強い自覚となつた。

飛行訓練を終えて宿舎に帰る時、たまたま飛行場勤務の女子職員の方々の竹槍訓練を見た。聞けば、竹槍で敵兵と戦うとのこと、飛行機と竹槍、その落差に驚くと共に、真剣な女性方の姿を見て、そんなことをさせてはならない、俺達の命をかけても、と思つた。

そしてまた、同時に、特攻は俺達で終わりにしたい、後に続くを信ずと思ひながらも、俺達で終わりにしたい、そんなことを思つた。

これは、若杉が「貴様ら特攻になるなよ」と言つたという言葉にも重なることでもあろうと、戦後思つたことである。

一戦時中、広幼の授業で、ドイツ語の教官殿が、たまたま特攻攻撃のことに触れられ、「あれは人間で出来

ることではない。神でなければ出来ないことだ。正に神の所業だ」と言われましたが、大変な感銘を受けたと、その時の生徒(つまり、私の後輩になるが)は述懐した。――

本当の勇氣とは、大いなるものと一体となり、自ずから滲み出るものと思う。若杉にはそれがあった。真勇と言ふべきか、囚われない、自由無碍、そこには、さりげなく「貴様ら特攻になるなよ」と彼なればこそ言える。――

優しさ、任務に対する責任感、洞察力、それらをなймаぜにした無碍の言葉と思う。

『櫻と剣』の文中で「若杉は、フィリピンに飛び立つ前夜、台湾の高雄で同期生の姿を探し求めた。そして歩兵聯隊にいたその男を、一晩中はなさず語りつづけた」というそのくだりで、私は、その男を、著者自身ではないかと思う。そしてまた、語り続けた若杉も著者自身、つまり、村上だと思ふ。

村上は何とか若杉を分かったか。この二人形式の言葉は、村上が若杉をいとおしむ言葉であろう。

☆ 日野が弟研三氏に送った遺文の最後の章

「さらば愛する弟よ、健なれ、壮な

れ、幸多かれ、春秋多き弟よ、さらば、さらば」

原稿用紙にこの章を記しながら、一字一字を見、記しながら私も考える。後に続けとは書かれていない。

さらば愛する弟よ、さらば、さらば――後事を託することのできる弟がいることは、彼にとって限りのない幸せであらう。

・・・さらば、さらば、弟よ・・・不滅の絶誦と思う。

第五章 私の特攻観

――終章として――

「陸軍大尉若杉是俊」という表題を借りて、その中に、自分史をも共存させ、特攻・特攻隊への情緒的見解を述べた。

本稿を結ぶに当たり、私自身を素直に考えてみよう。当時はどうだったのか、そして戦後どう思っただろうか、今はどうか。

☆ ☆ ☆ 平成2年5月、同期で航空の私的な集いだった「八日会」がワープロで手作りの文集「飛天の曲」を作った。私も投稿した。この小文は、私の特攻回想であり、特攻観の原点でもあるので、重複するところもあるが、以下を掲記

する。

☆

特攻拝命のその時・それからその後

○ 拝命のその時

昭和20年5月3日、午後の編隊訓練を終えて、57期の居室に戻ると、同室の新井重治君から、飛行場長の金沢少佐殿が呼んでおられるとの由で、飛行服そのままの格好で早速伺った。

「深川少尉参りました」と申告した。

部屋は陰っていたのか薄暗かったことをなぜか覚えている。金沢少佐は、やおら間を置いて静かに「明日、明野本校に行くこと、特攻の編成がある、特攻だ」と。一語、一語、言葉を飲み込み、飲み込みしながらの、お言葉だったように記憶している。静かな一時が過ぎた。「ハイ、分かりました」。

部屋を辞して廊下に出た。ふと、若杉も特攻だったなあ、と思ひ出した。

部屋に帰ると、新井がすぐ顔を出した。「ガンさん、特攻だっつて」「そうだ、今だ」。新井は髭面で私を無言で見詰めていた。

翌4日、明野陸軍飛行学校に集結、20個隊、120名の陸軍特別攻撃隊が編成され、私は振武一九七隊長を下命された。隊員は阿部俊男少尉(幹候7

期)、牧野忠寿少尉(幹候8期)、藪田達夫伍長(少飛14期)、板東信二伍長(同)、牧内和雄伍長(同)の5名で、記念写真を本館前で撮影後、直ちに北伊勢飛行場に向かった。皆それぞれ初対面であった。

当日を以て同飛行場に展開したのは、次の6隊であった。

振武一九五隊・隊長 藤山 展法 (航士57期)

振武一九六隊・隊長 野上 五夫 (航士57期)

振武一九七隊・隊長 深川 巖 (航士57期)

振武一九八隊・隊長 藤井 收三 (航士57期)

振武一九九隊・隊長 村山 晴美 (航士57期)

振武二〇〇隊・隊長 江藤 敏夫 (航士57期)

北伊勢飛行場は明野陸軍飛行学校の分校で、私にとっては航士校卒業(昭和19年3月19日)後、乙種学生として訓練を受け、爾来、都城に一カ月、明野本校に四カ月の期間を除いては、当地が訓練基地であった。特攻隊の居室は一個隊ずつで、隊長・隊員が同居し、寝食・訓練を共にした。私が振武一九七隊は「征鬼隊」と名付け、正に桃太郎のように初々しい少飛14期の3

人は共に数え年で18歳であった。

今まで宮外居住で、下宿が一緒だった同期生も、当隊に来ることは殆どなくなり、私も出向くことはなかった。私にとっては、振武一九七隊だけになりつつあった。訓練後ベッドに寝そべって、天井板を見詰めるともなく見やりながら、純真な隊員に伝えなければならぬと思った。純真無垢とはこういうことだろう、爽やかな語らい、笑み、純粹さ、私は彼等に伝えねばならない、その責務がある、俺は隊長だ。

○ それから

訓練は厳しくしたが、よくついて来てくれた。しかし、気持ちの上では一寸した透き間も出来る。その時は2機で編隊訓練をした。離陸の時はピツタリ行かなくても、空に上がってしまえば、こちらから僚機に合わせて左旋回右旋回・急降下上昇、そして旋回、いつの間にかピタリとこちらについて来る。操縦眼鏡からの視線ががちり見合う。我が隊の練度は高かった。

6月上旬、牧内和雄伍長が飛行訓練中に殉職、惜しい若い人を死なしてしまった。当日皆で茶毘に付した。翌々日お母さんが見えられ、白木の箱を抱いて帰られた。戦後久しくして靖國神社社務所に伺ったところ、昭和34年4

月6日合祀、所属明野陸軍飛行部隊、氏名牧内和雄、殉職日時昭和20年6月

1日死亡、場所三重県鈴鹿郡鈴鹿川原、階級伍長、本籍地和歌山県和歌山市加太一五一六、母牧内種子とあった。所属といい、日時場所といい、お母さんの精一杯の記憶であったろう。6月頃、母と妹が面会に来た。私の隊は飛行場近くの井田川のお寺に分宿していた。隊で一緒に泊して朝早く井田川駅まで歩いて帰って行った。

日増しに隊員の技倆は上達し、何時でも来いの態勢になった。特攻機が足りないのとか一個隊編成が出来ずに、バラバラに出撃したとかの情報が入ってくる。板東伍長は「隊長殿、もしも自分の飛行機が故障の時は、隊長機の胴体に入れて下さい。一緒にいきます」と言って来た。純粹で少しのこだわりも見せないが、彼は彼で必然の死を前にして、悩み、そして、苦しみもあつたであろう。必死の諦観から共にゆく運命、隊長として身に染み入る部下の言葉であり、隊長冥利に尽きるものであった。

○ その後

昭和20年8月15日正午、北伊勢飛行場は、焼け付くような暑さだった。頭を垂れ地面にくっきりと浮かぶ己の影

と共に玉音放送を聞いた……。

十二、三年前にもなろうか、藤山展法君と亀山駅で降り、飛行場跡地を訪ねた。かつての滑走路は、古河電工の工場となっていたが、台地の感じ、離陸直後の鈴鹿川、上昇正面の伊吹の山並みは往時と少しも変わっていないかった。

『私の手帳から』

「僕よりも もっと若い君達が

何で逝くのか 少飛十四

昭和二十年五月四日編成の編成の振武一九七隊少飛十四期の藪田君、坂東君も昨年亡くなった。牧内君は昭和二十年六月北伊勢飛行場で殉職した。編成当時の紅顔十八歳、三名とも亡くなった。

昭和63年10月19日靖國神社

大鳥居前にて」

☆

「人は本当に大切なことは、進んで語ろうとしないものだ」と。特攻のことも、と私は思う。生き残った我々、特攻という必死の「死」によって、今我々の「生」がある。鎮魂の思いは常に新しく、そして永久に伝えなければならぬ。

(所属・特別攻撃隊振武一九七隊)

※この「飛天の曲」に投稿した23名中15名が亡くなった。出来上がった

平成2年というと、生き残った私共

が、特攻について物申すことに、まだ憚られる気持ちがあった。ご高齢になられたご両親様には、亡き戦友との交遊を語り、今後のご健康を願った。そんな私にとって、一つの節目となったのは、同期生有志で平成6年10月比島慰霊巡拝をしてからである。レイテの海浜に入って大声で、海底に届けとばかりに、「おーい」と叫んだ。セブ島からオルモック港に至る海上で、戦友の名前と隊名を書いた紙片を千々にちぎっては流した。比島の方々の庭先で戦ってご迷惑を掛けたことも知った。峠を越え、荒れ地を踏み分けての巡拝旅行は、私に不戦という思いを抱かせた。そして、フィリピンとの友好を願った。―特攻のことを話しやすくなったのは、この五、六年のことである。平成2年の同人は、半数以上が亡くなった。特攻のことを伝えることは、正しく彼等の願いであり、私共の責務でもある。

☆

右の手記(飛天の曲)から更に17年経った今日(平成19年)まで振武一九七隊は、戦後一回の集まりもなかった。特攻隊編成・隊長拝命をしてから終戦までの僅か三カ月余であったが、部

下と共に、振武一九七隊の団結、お互いの信頼、身命を国に捧げて、全くの無心、爽やかだった。戦後のある期間が過ぎて全隊員6名は、会合を持たなかった。

それは、私をして言わしむれば、この6名の持つ困い込みを、そのままずっと持ちこたえたかったのである。

その意味で、瀬戸内寂聴さんが、『天がもし私に、あなたの生涯で一番欲しい時をもう一度あげましょう』と言われたら、私は躊躇なく、剃髪し天台で修業したあの三カ月を下さいといふでしょう』との記事を拝見したが、私にも、天が下さるならば、6人の心が融け合ったあの三カ月を下さいと言おうだろう。

私にとって、振武一九七隊の三カ月余は、私の人生で掛け替えのない時であった。

☆ ☆ ☆
国のために一命(たった一つの命)を捧げる、こんな尊いことがあるのか。

死を命ぜられることは、酷なことと思う。しかし、時代の趨勢、流れは若者の献身に依らざるを得なかった。敢然として発進・突入した。受谷の死であり、割り切りの死である。

出来ることなら、もっと生きて欲しかった。

☆
当時の私は、特攻は俺達で終わりにしたい、俺達で国を、親兄弟を護るんだと思っていました。

このことを信じて欲しい。少なくとも、特攻という事実があったことを忘れないで欲しい。

私は特攻について、何時も思う。

真っ正直な

純真さ

そして、勇気

『千の風になって』この歌曲は心に染み入ります。

☆
突入は、特攻の任務なのです。突入することは、任務の完遂という有限の終息です。そして、散華は無限に生きることです。

散華、そこには何も残らない。

故郷に帰っても、お墓にも。

私は無限にいます、あの大きな空に、千の風になって吹き渡っています。

お墓や慰霊の場所は、この世の人との出会いの場所です、と。

この曲を聞くと、戦友達を思い出す。少なくとも、特攻という事実を忘れないで欲しい。

☆ ☆ ☆

結びとつづ

特攻のことを私が纏めるのも、この五、六年のことである。その意味で続編の第一章特攻考の二編『特攻の心』の小灘氏の文章と『元特攻隊長の回想』の菊地氏の文章は、続編の巻頭を飾るにふさわしいものだった。

平成12年10月、首都圏明野会で、語り部・陸軍航空特攻の小文集を出した際、次回の特攻集には是非、小灘さんのこの『特攻の心』を収録させて欲しい、と乞うた。今回この「陸軍大尉若杉是俊」の続編にとの小生の申し出に対し、

「御便り拝受しました。語り部の会の活動は意義あることであり、故若杉大尉の詳細な記録は、御本人の顕彰のためのみならず、日本人の歴史として、このような形で数多く残すべきものと考えます。『特攻の心』掲載の件は、以前にも承っておりますが、光栄に存じます。

寒くなりますが、元気で御健闘下さい。 匆々」

とあった。

このご返信は、平成17年11月末に戴いた。そして、小灘氏は『特攻―最後の証言―』の人間魚雷「回天」の証言者として、病苦を押してインタビュー

に応じられ、平成18年9月23日逝去された。

同期生菊地洋氏の『元特攻隊長の回想』は、平成11年8月の『偕行』誌だった。同期の元隊長で、所信をはっきり述べた記事に瞠目した。

特攻を論ずることに既に半世紀を過ぎていた。我々にとっては、なかなか書けないというより書きづらいことだった。

つまり、冒頭に述べたとおり、特攻のことが取り上げられることは、近々のことである。私自身も、元特攻隊長としての長年の考えを、この文集「陸軍大尉若杉是俊」に託した。文集には、若杉・私・日野、そして友人の交わりを濃くした。また、情緒的ながら親子の情、母と子の思いを載せた。

振り返ってみて、私にも色々あった。軍人としての自分、戦争末期の特攻隊の編成、高揚した祖国愛、そして終戦。敗戦によって一変した。特攻は無駄だったという風潮になった。私は、そんな筈がない、それでは戦死した者が余りにも可哀想だ、彼らの本当の心を知って欲しい、それは何だ、と私は考えた。そしてまた、戦争犯罪者の一味と見做す言論も出て来た。公職追放にもなった。私としては遣り切れなかった。我々は天皇陛下の御為に戦った。

少なくとも命令は天皇陛下のお言葉と信じて戦い、そして死んだ。当時、天皇の戦争責任という言葉も人々の口の上だった。私は天皇にこの戦争の責任があると思った。天皇陛下万歳と言って死んでいったのではないか、特攻は天皇のお言葉にはなかったという、それでは余りにも酷いではないか。

そんな考えの時に、同期の川口君の言葉で癒された。

「深川よ、天皇さんに戦争責任がある、ある、ある、と思えば何時まで経っても、あると思うだろう。しかしなあ、あの戦後の荒廃した時から、御自分の身の危険を全然顧みず、一心になって、日本中を歩き回っておられるお姿を見て、俺は、有り難いと思うようになった。お前はそうは思わないか、考え方は心一つだよ」と言ってくれた。

友人に恵まれた。特攻隊になって、おかげで特攻のことも書けるようになった。大西中将の言葉が身に沁み込むようになった。「特攻はやむにやまれぬ外道なのだ」と。

二度とあっては欲しくない。
そして特攻の心を私なりに抱んだ。

それは

真っ正直な

純粹さ

そして、勇気

☆ ☆ ☆
今、思うことは、

敗れたからこそ、慰霊を、顕彰を続けなければならない。

会津の白虎隊も、湊川の楠正成も

そうであるように、そしてまた、負けたからこそ、

国家の安全保障を確立しなければならぬ。

☆

特攻のことを忘れないで下さい。

(平成19年3月記)

☆ ☆ ☆

○若杉是俊君が御両親に送った最後の手紙(遺文)

謹啓

決戦の期方に迫る此の頃父上様母上様にも寔に御繁忙の事と拝察します是俊此の度願叶って特別攻撃隊に選まれ 八紘隊第十飛行隊第二小隊長としてフィリピンへ赴く事になりました。男子の本懐之に過ぐるもの

又ありませうや。是俊は本當に嬉しくてなりません。今日迄こんなに立派に愛しみ育て、下さった 御父様

御母様に何一つ孝養も盡くし得ませんで 甚だ 申訳なく慚愧の涙に咽

んで居ますが、然し今度は何とか御恩の萬一に報ひ奉り得る様です。

天の神様の所で常に御祈りして居

ます。何か遺書の様な事を書き始めてしまいました。本當に特攻隊として出陣する今、何とはなし斯う書きたくなったものですから・・・

天皇陛下萬歳 皇國萬歳

お父様 お母様 に幸あれかし家に居た頃の事色々考へれば懐しい事許り、然し今になって何もそんな事考へ度くありません。アツサリ御別れしてやるのみと思つて居ます。

来年正月のお年玉に私達八紘第十飛行隊の大戦果をお送り致します。

生れて以来今迄修養し教へられて得た總べてを、体当たりの一事に發揮して御覽に入れます。

思ふに敵大船團を見付けて「ソレ」と突込む時の心境 唯無一物、空と考へます。

ニコリ笑へると思ひます。神様の様な心になれるでせう。

そして轟進

うなる爆音 消えゆく後に

燃えて沈むよ 敵空母

是俊は必ずやります。お父様の御教を受け、お母様のお恵みを受けた此の是俊必ず御教通り立派にやります。寔に長い間有難うございました。御体大事に長生きして下さいませ

是俊

十二月十六日

屏東陸軍偕行社ニ於テ

若杉 是俊

兵庫県津名郡家町

若杉 義治様



日野二郎陸軍大尉



若杉是俊陸軍大尉

平成19年度豫科練雄飛会慰霊祭

評議員 小倉 利之

平成19年4月4日(水)靖國神社において、豫科練雄飛会(会長住友勝一氏)の慰霊祭が、ご遺族、来賓及び会員(乙種飛行豫科練習生1期〜24期)約300名が参集して厳肅に斎行された。

当日は、朝から薄曇りの空模様であったが、祭典開始の正午頃には、明るい光が差し込み、3月20日の開花宣言以来2週間、靖國の宮居は正に桜花爛漫。「春の梢に、咲いて会おう」と誓った『同期の桜』の歌のとおり、参会者一同往時を偲んで万感胸に迫るものがあった。

慰霊祭は、国歌斉唱、修抜、祝詞奏上、祭文奏上(住友会長)、献歌(全員で『同期の桜』を斉唱)の後、2班に分かれて本殿に昇殿参拝をし、玉串奉奠、黙祷(『国の鎮め』の奏楽)を捧げた。

祭文奏上の中で、住友会長は「国防とは、ある時代の、ある世代が、国家存続のため、尊い生命を犠牲にする崇高な行為であります。それ故、後世の者が、戦没者に感謝し、顕彰し、追悼し、慰霊しなければなりません。それがなければ、国難が来たときに、誰が

自分の生命を国のために犠牲にするでしょうか。・・・また、日本の素晴らしい歴史や伝統、特に武士道は、敗者への共感、劣者への同情、弱者への愛情、卑怯を憎む等最高の美德であります。神道はまた、日本の最も重要な文化財であります。私たちは、このよ

うな素晴らしい歴史や伝統、文化に誇りを持ち、古来の美德である家族愛、郷土愛、祖国愛、人類愛を更に高めるべきだと思えます。英霊もそのことを望んでおられると思います。若くして散華された同窓の英霊に深く頭を垂れ、万感の思いを込めて、御霊安かれと祈ります。」と述べられた。

慰霊祭の後、靖國會館前で記念撮影が行われ、同会館2階の広間で、直会と招魂観桜祭が催されたが、ご遺族、来賓の方々も、雄飛会の会員の皆様との積もる話が弾み、楽しいひと時を過ごされ、亡き戦友たちも、多分満足されたことと思われる。

このような慰霊祭を執り行うについて、いずれの会でも会員の減少に頭を悩ませておられることと思うが、まずは、現会員の子息又はご親戚の方々の入会を勧める等、まず身内を固めてから、手広く勧誘することが必要と思われる。

今や、日本中が「美しい国」を目指して頑張る時であると考え。戦没者に対して、慰霊を行わない国は、必ず滅びる。そのためにもまずは、身辺を固めることが先決ではないかと考えて提案する次第である。

万世特攻慰霊碑慰霊祭

事務局長 栗原 宏

4月22日(日)南さつま市の万世特攻慰霊碑第36回慰霊祭が、御遺族50名余を含む関係者約400名参列者のもと盛大に執り行われ、私も初めてこれに参加した。

毎年4月の第2日曜日に行なわれているが、本年は統一地方選挙の関係で、2週間後となったようである。当日、鹿児島中央駅西口に、主催者側が用意して下さった送迎バスに乗り、山野を走る約50分で会場に到着。

13時の開始までの時間を利用して、平和祈念館や周辺を見て廻ったが、62年を経た今日、陸軍特攻基地としての姿は、何処にも見られなかった。昭和18年の中頃から19年末にかけ、この会場から吹上浜にかけての松林等を伐採して沖繩特攻用の飛行場を急造し、この基地を発進した特攻振武隊や飛行第66戦隊、55戦隊のパイロット200名近くが戦死、これら英霊の御魂がこの慰霊

碑に刻まれている。定刻13時、海上自衛隊鹿児島基地から飛来した対潜哨戒機1機の慰霊飛行後、参列の御遺族の紹介があつて式典が開始され、全員起立して黙祷、式次第に従い順次進められた。この式典で特に感じられたことは、出席された御遺族50名余の半数以上は、故人の甥姪に当たる方々であったこと、また、式典の終りの頃甲南大学の学生が、「特攻隊員は無駄死にしていた」と多くの仲間達が間違った考えを持っているので、私達は特攻隊員の真の精神を若者達に伝えます、と力強い誓いの言葉を述べたことであり、これからも若い人たちが受け継いで永くこの慰霊祭が行われることを確信して会場を後にした。



万世特攻慰霊碑「よろずよに」前慰霊祭

平成19年度旧鹿屋航空基地 特攻隊戦没者追悼式に参列して

評議員 野口 清三

平成19年4月7日(土)鹿兒島県鹿屋市の小塚丘に建つ特攻隊戦没者慰霊塔前において、同市主催による特攻隊戦没者追悼式が、厳かに執行された。

この式典は、現在の海上自衛隊鹿屋航空基地を眼前に見渡せる小塚公園の小塚丘に、特攻隊戦没者慰霊塔が建立された昭和33年以来毎年市主催で執り行われており、今年は、丁度50周年の節目の年に当たる。

当日は、薄曇りながら桜花爛漫、時折桜吹雪の散り注ぐ中での絶好の慰霊日和であった。桜と緑の木々に囲まれ、遙か南の空を目指して羽ばたこうとする海鷲の勇姿を戴く慰霊塔が一際輝いて見えた。

式典は、定刻10時30分、先ず開式の辞に始まり、一同拝礼、国旗掲揚、国歌斉唱と続く中、上空には海上自衛隊第1航空群所属のP-3C哨戒機が飛来し、追悼飛行を行った。

主催者を代表して山下栄市長は「特攻隊戦没者の慰霊顕彰を通じて、悲惨な過去を振り返り、恒久平和の確立に全力を尽くすのが我々の責務である」との力強い式辞を述べられた。

静岡県から来られた遺族代表の服部政男氏(74歳)は「兄は特攻出撃命令が下されてから、内心の苦悩や動揺は如何ばかりであったろうか、しかし、一切を振り切り、敢然として勇躍出撃していった。兄や特攻勇士のひたむきな心、その純粋さはいつまでも忘れることはできない」と挨拶された。

次いで、海自第1航空群指令大谷祥治海将補ほか来賓の方々から追悼の辞が述べられた。

続いて、小塚公園の慰霊塔前広場に設けられた祭壇に、山下鹿屋市長を始め参列者全員が白菊を献花し、慰霊塔に向かって手を合わせ、若くして散華した特攻勇士の御霊に追悼の祈りを捧げた。

次いで、海自第1航空群派遣の儀仗隊による弔銃発射の儀礼があり、旧海軍出身者によって声高らかに「同期の桜」を斉唱し、国旗降納、一同拝礼、西園琢巳副市長の閉式の辞があつて、式典は正12時、滞りなく終了した。

思えば、大東亜戦争末期、昭和20年3月から6月にかけて、ここ鹿屋の海軍最大の特攻基地から沖繩戦線に向けて飛び立った忠勇無双の特攻隊烈士は908名に及び、450機の航空機に搭乗して出撃、勇戦敢闘して散華された。

今日の我が国の平和の繁栄は、これら多くの特攻隊勇士の犠牲の上に築かれ、保たれていることを決して忘れて

はならない。
在天の英霊の皆様安らかに眠りください。



桜の梢越しに仰ぎ見る慰霊塔



海自第1航空群儀仗隊による弔銃発射



鹿屋市小塚丘の慰霊塔全景

知覧を訪れて

理事 杉山 蕃

5月3日、知覧特別攻撃隊慰霊行事に、菅原理事長のお供をして参加した。折から連休の最中、絶好の天候にも恵まれ、伊藤鹿児島県知事、霜出知覧町長始め、鹿児島偕行会、少飛会、顕彰会、防衛省協力本部等多数の参列者を得て盛大な中にも厳粛に式典が挙行された。今回の訪問は、私にとっては2

度目の訪問であったが、種々の見聞を通じて、大変心に残る旅となったので、若干の所見を披露させていただきたい。

今回は、特別攻撃隊をテーマとした5月12日封切りの映画「俺は、君のためにこそ死ににいく」の製作者である東京都知事石原慎太郎御夫妻、主演女優岸恵子さん始め監督出演者等が参列し、大変華やかなムードを盛り上げていた。取材陣も多く、テレビ放映等もあって、広く注目を集めた事は、誠に結構な事であった。そんな中、私を含めて参列した人々を強烈に印象付けたのは、石原氏の慰霊の辞ではなかったかと思う。原稿を読み上げる他の奉辞者と異なり、原稿なしで氏独特の豊富な語彙を駆使し、留まることなく語るが如く奉ずる慰霊の辞は、圧巻と言え

るものであった。「貴方が、生命を

賭して守ろうとしたものは、何だったのか。今再びこの問いを真剣に考えねばならない環境情勢にある」として、我が国の現状を、反省する事の必要性を訴える姿には迫力があり、常日頃からの深い思惟活動と確固たる信念を伺わせるものがあった。石原氏の年齢を感じさせない力強い主張は、我々特攻隊戦没者慰霊の立場にあるものにとつて、大変心強い存在である事を痛感した次第である。

遺族代表には、45振武隊長藤井一少佐の弟君が出席された。少佐の特攻出撃の強い願望を叶えるため、2人の幼女と共に入水自殺された、「日本婦道記」を超える福子夫人の逸話を交えた弔辞は、聞かざる者の心を打つ情感溢れるもので、会場水を打った如く静まり返ったのが印象的であった。

今回は、久し振りの南薩摩訪問でもあり、空港よりレンタカーを利用したが、指宿から知覧、そしてスカイライナーでの車窓から見える「新緑の風情」は、本州と異なり、濃淡が一段と顕著な、目を打つ美しさであった。丁度62年前のこの季節、この美しさを最後の思い出しつつ、出撃された若い命を思うとき、我が国土が、せめてもの手向けとした「新緑の美」は、また一段と映えて感じられた。

知覧町は「美しい町」。薩摩藩時代から南薩摩の要として重視された事を物語る武家屋敷群、美しく整備された街路、それに見事に調和して映える献灯の列、そして特攻隊慰霊顕彰の諸施設。若くして散った1036柱の慰霊の意味からも、この町は美しくあり続けて欲しいとの思いは皆さん共通のものと考えている。知覧町関係者のご努力に深謝申し上げる次第である。



原稿なしで慰霊の辞を捧げる石原東京都知事



知覧特攻平和観音に献花拝礼する映画出演者等
中央は主演女優・島濱トメ役の岸恵子さん



知覧特攻勇士の像（とこしえに）

陸軍挺進部隊英霊の慰霊祭

てみる。

田中 賢一 毎年春に靖國神社で行っている。初めの頃は戦友と遺族で行ったが、その後首都圏在住の自衛隊空挺隊員だった者に加え、今ではそれが主力となった。従って我々戦友がなくなっても、この祭りは絶えることはない。

今年五月十九日に行われた。参列者は四十五名だったが、例年同様玉串料だけを送ってきた者が多数いる。我々の亡き戦友一万有余のみだがここに神鎮まる。

花負ひて空うちゆきしわが友よ

奥にいますかともしびの影

富む春秋国に捧げしともかきに

済まぬおもひのああ八十路かな

慰霊祭は例年の如く本殿に於いて神楽を奉納し、懇親会の冒頭に伊奈会長が追悼の辞を読み上げた。それは戦死者の遺勲を讃え、我々の心構えを述べたものであり、本殿に於いて御霊に向かい奏上すべきものであるが、ほかの団体の奉納する神楽を同時に済ませようとする神社当局の措置はよくない。

ここで挺進部隊の辿った跡を振り返っ

開戦と同時に挺進団を編成して南方に向かった。パレンバン作戦は眩いばかりの勝利で緒戦を飾ったが、浦生中尉以下三十六柱が靖國の神となった。ついでビルマに行き、ラジオ作戦では、天候に妨げられ目標直前で引き返したが、副島中尉以下二機の搭乗員を失ったのは残念至極だった。

内地帰還後十七年七月宇都宮飛行場で天覽演習の光栄に浴したが、松浦軍曹は陛下の御前で不開傘事故により殉職し、護國の神となられた。その頃より戦局は追々と攻守所を替え、我々の出番はなく只管訓練に励んだが、二年有余の間数件の殉職事故があった。中でも残念だったのは、演習中、小丸川を渡渉しようとして、伊藤中尉以下八名が殉職したことだった。

いつ征かいつ散るのかは知らねども
今日のつとめに我は励まん

それが当時の将兵の気持ちであり、小丸川の殉職碑にもこの歌が刻んである。十九年に入り戦局は愈々非となり、十月二十日敵がレイテに上陸するや第二挺進団に動員が下令され、二千の精銳が比島に向かった。高千穂の名で呼ばれたこの部隊はレイテに降下し、一部はネグロス島に向かい残余はルソン島

で戦ったが、如何に精銳であっても戦勢を覆すことは出来ず、第三聯隊長白井中佐以下大半が護國の神となられた。

花負ひて空うち征かぬ雲染めん
屍悔いなく我ら散るなり

南サンフェルナンドの宿舍の壁に、書き残して征かれたのはどなたでしょうか。

高千穂部隊と少し後れ、挺進集団の滑空部隊がルソン島の戦場に加わったが、大廈の覆らんとするや一臂の支うる能わずで、すべてが悲惨な結末に終わった。中でも無念だったのは、空母雲龍に搭乗した滑空歩兵第一聯隊等の部隊で、敵潜水艦に撃沈され輸送指揮官面高少佐以下千数百名が水漬く屍となられた。

日本空挺戦史の最後を飾ったのは、沖繩作戦の末期に行われた義烈空挺隊の特攻作戦である。航空特攻を成功させるため敵飛行場を一時押さえこもと、生還の見込みの全くない特攻だった。第一聯隊の奥山中隊長以下一三二名と、第三獨立飛行隊の諏訪部隊長以下三二名が、重爆一二機で五月二十四日熊本健軍飛行場を発ち沖繩に向った。内四機が故障等で不時着し、奥山大尉以下八名と諏訪部大尉以下二五名が悠久の大義に殉ぜられた。

御祭神と我らが歩んできた陸軍挺進部隊四年半の歴史は実に多彩だった。

栄光と悲惨、歡喜と失意、躍動と隱念、その間にあって一万有余の英霊と我々は幽明を訣ってしまった。英霊を追想する意をこめて陸軍挺進部隊の全部隊名を掲げて合掌する。

第一挺進集団

集団司令部

第一挺進団

挺進第一聯隊

挺進第二聯隊

第二挺進団

挺進第三聯隊

挺進第四聯隊

滑空歩兵第一聯隊

滑空歩兵第二聯隊

挺進戦車隊

挺進機関砲隊

挺進工兵隊

挺進通信隊

挺進飛行団

挺進飛行第一戦隊

挺進飛行第二戦隊

滑空飛行第一戦隊

挺進飛行団通信隊

第一飛行場中隊

第二飛行場中隊

第三飛行場中隊

挺進整備隊

陸軍挺進練習部

平成19年度

義烈空挺隊慰靈祭に参加して

評議員 衣笠 陽雄

平成19年6月30日(土)、沖繩本島南端摩文仁の丘において、全日本空挺同志会沖繩支部の主催による「義烈空挺隊慰靈祭」が催行され、筆者は当特攻協会の代表として参加した。

義烈空挺隊主碑・側碑・案内板等を配する慰靈碑の周辺は、空挺同志会沖繩支部員の手で清掃され、碑は、落下傘・国旗・会旗・供え物等で飾られ、折からの炎天下、さらびやかな雰囲気の中で慰靈祭は厳かに執り行われた。

参加者は、主催者である空挺同志会沖繩支部の桃原支部長以下15名の会員(元空挺団に所属していた現職自衛官及び退職者)、旧軍航空関係の翼友会長以下2名、本土から全日本空挺同志会木家会長以下4名、空挺団から岡部空挺団長以下4名、一混団からラッパ隊3名、更に今回沖繩での歯科学会に参加中の空挺予備員の歯科医官5名の特別参加を得て、30数名であった。特に若い自衛官が多く、他の慰靈祭とは一味違う雰囲気を感じられた。

慰靈祭は、ラッパ隊の吹奏に合わせて、参加者全員による国歌斉唱、黙祷、祭司による修抜、降神・献饌の儀、祭

司祝詞奏上と続き、主催者である桃原沖繩支部長の祭文奏上、木家同志会会長・岡部空挺団長の追悼の辞が述べられた。

次いで、ラッパ隊の伴奏により、全員で「空の神兵」の献楽と玉串奉奠、最後に撤饌・昇神の儀をもって慰靈祭は滞りなく終了した。

他に訪れる人もない静かな佇まいの中、ラッパの音が流れ、厳肅かつ神々しい雰囲気での慰靈祭に、義烈の御霊もさぞや満足されたことと思う。

今回も多忙の中、本慰靈祭を主催して頂いた桃原支部長以下の空挺同志会沖繩支部会員の皆様に深甚の敬意と感謝を表したい。



義烈空挺隊慰靈碑前祭壇

○時降りて苔むす義烈の碑に誓う
永久に伝えん烈士の志

《慰靈祭 雑感》

○義烈空挺隊慰靈祭の特色について

最近の旧軍関係の慰靈祭の特色として、旧軍関係者の参加が極端に減少していることが挙げられる。本慰靈祭も例外ではなく、旧軍関係者は、翼友会2名で、義烈の直接の関係者で存命する方は、沖繩には皆無と聞く。また、管理事務所の話では、都道府県等の慰靈碑は、管理事務所が定期的に清掃しているが、義烈の碑は、よく関係者が自ら清掃に来ているそうである。

また、都道府県の慰靈祭は、秋に集中して実施されているが、旧軍部隊関係の慰靈祭は、特に60周年を境に逐次終了していくという趨勢の中で、慰靈碑を自ら維持管理し、毎年慰靈祭を盛大に実施しているのは、義烈空挺隊のほか見当たらないし、また、若い人が慰靈に参加しているという点からも他の碑には見られぬ特色があるとのことであった。

義烈空挺隊の関係者の一人として誠に喜ばしく感じられた。これは、全日本空挺同志会の設立趣旨により、設立の当初から義烈の慰靈を使命の一つとして継続実施しているからであり、同

志会設立50周年以後は、同会沖繩支部が主催することになったので、同支部が存続する限り、継続されるものである。若い自衛官による慰靈祭の継続実施は、特攻精神の継承という面から他の組織とは大きく異なる特色・利点であろう。

旧軍関係者が消えつつある今日、旧軍関係の組織・活動は一大転機を迎えつつあるが、特攻協会としても、特攻精神の継承について、抽象論ではなく、永続的かつ具体的な継承方法を早期に確立する必要があるのではないだろうか。一旦消えた火を再び灯すことは極めて困難である。

○読谷飛行場跡地の碑について

摩文仁の丘の義烈空挺隊の主碑は、特攻協会評議員田中賢一氏の御尽力により、昭和51年、碑の管理・参拝の便等を考慮し、現在地に建立されたが、ここは管理も万全で、将来にわたり維持管理に問題はなく、先見の明ある決断であったと思う。

問題は、読谷(北)飛行場跡地の碑の管理である。この碑(現在はコンクリート製)は、義烈関係者が昭和30年代に突入現場に設置したと聞いている。近年この碑は老朽化し、建て替え等の問題が生じつつある。摩文仁の丘に碑

があるので、ここは木柱程度でよしとする意見もあるが、筆者は、この地をどのような形で残したら良いか、思うところがあるので、慰霊祭前日、この碑に参拝後、碑の管理について、旧軍関係施設等(平和行政)を担当する読谷村役場企画財政課に状況を聞いた。

説明によると、この碑は米軍施設下に建設されたもので、村は建設には関わっておらず、建設の経緯は不明、管理も建設者(義烈関係者)に委ね、特別のことは実施してこなかったとのことであった。だが、米軍から北飛行場跡地が返還された直後から、跡地の再開発計画(滑走路部分も含め、農地と道路に再分割する)が作成され、近いうちに実施されるが、その計画内に碑の敷地が入っているため、村としては碑の建設者(管理者)と調整を始めたということであった。

ここに参拝するのを常としていることからも、この碑は何としても堅持すべきと考えるものである。

滑走路も無くなり、この碑の位置も隅に押しやられては、ここに参拝に来る意義が薄れ、時間とともに忘れ去られるのは目に見えている。伝統の継承には、目に見える強烈なシンボルが必要である。早期に在地の碑を確保すべく村と調整すべきである。



読谷(北)飛行場跡の碑

○読谷にさやけき月の心にて
散りし烈士の意気思う

○慰霊祭の時期等について
義烈空挺隊慰霊祭は、毎年突入した5月24日に最も近い日曜日に実施することになっているが、今年、主催者の同志会沖繩支部の都合で、1箇月遅れの開催となった。慰霊祭の時期・場所については、同一時期・同一場所が最も「慰霊」に合致すると思われるが、今後は沖繩支部の慰霊の準備や参加者

の都合、梅雨を避けた天候等を考慮し、適切な時期を固定しても良いのではないかと考える。

また、特攻協会としては、沖繩が陸海空の特攻に深く関係していることに鑑み、他団体の主催する慰霊祭に便乗



義烈空挺隊顕彰碑 (義烈の文字は奥山隊長の遺筆より)

義烈空挺隊顕彰碑

所在地 沖繩県糸満市
建立年月日 昭和51年5月24日
建立・所有 全日本空挺同志会
摩文仁慰霊公園内

「碑誌銘」

義烈空挺部隊讃

秋ソレ昭和二十年五月二十四日夜敗色既ニ濃キ沖繩戦場読谷飛行場ニ突如強行着陸セシ数機ノ爆撃機アリ該機ヨリ躍リ出タル決死ノ将兵ハ飛行場ニ在リシ多数ノ敵機及ビ燃料爆薬ヲ爆碎シ混乱ノ巷ト化セシメタリ為ニ飛行場ノ機能喪失スルコト三日間ニ及ビソノ間我が航空特攻機ハ敵艦ニ対シ至大ノ戦果ヲ収ムルヲ得タリ

コレ我が挺身第一聯隊ヨリ選出セラレタル義烈空挺隊及ビ第三独立飛行隊ノ壮挙ニシテ両隊將兵百十三名全員ココニ悠久ノ大義ニ殉ゼリ後ニ続く者ヲ信ジ日本民族守護ノ礎石トナリシ將兵ノ霊ニ我等何ヲモツテ応エントスルヤ

昭和五十一年五月二十四日
全日本空挺同志会



殉國沖繩學徒顯彰六拾二年祭

平成19年6月23日(土) 15時20分から靖國神社において「殉國沖繩學徒顯彰六拾二年祭」が斎行された。元国土館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によるものである。

6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖繩県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が、安倍首相、仲井真弘多知事、遺族ら4500人が参列して盛大に執り行われた。

今年の式典は、高校教科書検定で住民の集団自決に「日本軍の強制があった」とする表現が削除・修正されたことへの反発が広がり、抗議デモ等の行われる中で開かれた。仲井真知事は、平和宣言の中で「沖繩戦の真実の姿を次の世代に伝え、その教訓を生かすことが求められている」と訴えた。

平和公園内の「平和の礎」に刻まれ

た戦没者の刻銘は、総数24万余柱に達するが、今日、沖繩戦は、多

くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあつて、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、生命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴収の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となつて軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学、同工業・農林・水産・市立商業、私立開南中学の9校から1660余名が「鉄血勤皇隊」に編入され、半数は第一線の戦闘に、

半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬、首里城の急を救おうとして「学徒斬り込み隊」が志願編成され、50余名が一体となつて敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであつた。女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範女子部と県立第一高女を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高女の「白梅学徒隊」、同第三高女の「名護蘭学徒隊」、同首里高女の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高女の「梯梧学徒隊」、私立積徳高女の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約550名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴り、戦死した女学生数は動員数の45%、250余名を数えた。男子部の44%と共に動員学徒の約半数がうら若き命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰霊顯彰祭を斎行して今年第51回目を迎えた。遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しているが、それでも約50名の参列者のうち、約三分の一程の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、齋主祝詞奏上と進み、祭文奏上となつたが、この度は、國學院大学文学部二年生坂本匡史君が奏上した。

沖繩戦で散つた若き学徒達の壮絶な戦いの真相を語り継ぎ、彼らの祖国愛と家族愛に深く感謝し、それらを守らんとために命を捧げた、その志を受け継ぎ、愛国の至情を培い、平和を守つていかなければならない、との決意を述べた。

次いで、献楽として、「海ゆかば」の独唱、奉納吟「嗚呼 沖繩戦の学徒隊」の今様・漢詩・和歌の吟詠、中には合唱団による「沖繩県立第一中学校校歌」「沖繩師範学校女子部・沖繩県立第一高等女学校校歌」「故郷」の歌の合唱が奉納され、最後は「海ゆかば」の吹奏裡に、参列者一同昇殿参拝して、祭典を無事終了することができた。

(飯田正能記)

○奉納吟・嗚呼沖繩戦の學徒隊

今様・漢詩作 金城 和彦
和歌 作 金城 和彦
吟詠 八雲 一

今様

矢弾の中でけなげにも

咲いて散りにし若櫻

尊き御霊よ安らかに

五色の雲に祈るらむ

漢詩

愛國の至誠烈火の如く

童顔の學徒防戦に當る

刀折れ矢盡き我が事畢る

相抱き相擁して遂に玉碎

和歌

悲しさのあまり井戸までかけたれど

水汲みし子の足あともなく

一ひめゆり部隊に二人の娘を

捧げた母の歌

漢詩

砲聲天を焦し弾雨降る

血河山野阿修羅の如し

學徒挺身死地に赴く

嗚呼忠魂萬古に薫る



戦の庭に赴きし在りし日の乙女達

建國二千六百年

榮ある歴史偲ぶれば

我等が務輕からず

いで中山の健男見

若き血潮のよどみなく

奮ひ勵めよ國の爲

沖繩縣立第二中學校校歌四節

波の上のほころおごそかに
なみ静かなる那覇の海
ながめゆたかに棟そびゆ
これぞ我等が學びの舎
友よいとしのわが友よ
玉とかがわう乙姫の
心のひかり磨きえて
世に鏡としかがやかん

沖繩師範學校女子部
沖繩縣立第一高等女學校
校歌二節

「沖繩慰靈の日」の
現地の新聞は語る

田中 賢一

6月23日、県主催の「沖繩全戦没者追悼式」が糸満市摩文仁の平和祈念公園で行われた。参列者は四千数百人、中央からは安倍首相らが参列し、二十

余万人の犠牲者に祈りを捧げた。この数字は、沖繩本島における陸海軍の戦死者及び沖繩作戦中の特攻戦死者、一般住民の戦没者も含めた数になるが、現地の新聞に沢山載っている悲惨な事例は住民の事だけである。

あれから六十余年、現地の人には強烈な思いが染み込んでいる。慰靈追悼行事は、摩文仁だけではない、各地における慰靈碑、就中従軍學徒の碑でも行われている。東京においても、別の記事で紹介してあるとおり、この日、靖國神社で沖繩戦没學徒慰靈祭が行われている。學徒だけではなく、沖繩戦全戦没者の追悼行事が中央でもできないものか、具体化しないならば、新聞テレビでもっと大きく「沖繩慰靈の日」を取り上げてもらいたいと思う。

が終焉した日であることを扼る。

参謀部付の西野弘二少佐は、軍司令官らが自決した後、かねて命じられていたとおり、国頭地区に脱出するのだが、三日後変装が見破られ、捕らえられて戦後帰還し、往時のことを一書に纏めた。当人は既に物故したが、ここに最後の場面を転記する。

「摩文仁山頂は白々と明け初めかけた。時は今だ。海岸側の出口から斬込み隊が躍り出た。神々の出発だ。嗚呼帰らぬ神。副官の持つロソクの灯を先頭に、淡々たる軍司令官、豪傑魁偉の参謀長と続かる。参謀長は上衣を脱いだままだ。白いワイシャツの背には「義勇奉公 忠則盡命」陸軍中将長勇と血書されている。両將軍は海岸側壕の出口付近の断崖の上に、介錯役の副官、剣道五段の坂口大尉が付添い、台の上に正座された。遙か東天を拝する將軍達の頭上には、かすかに紅を含んだ飛雲が流れる。朝霧が谷より萌え上がった。残月は未だ天空を支配するかのようにに暁天にかかっている。

自刃だ。手元を定めた副官の振り上げた手練の白刃は、神業のように宙を斬って將軍の頭をはねた。朝日が倒れた將軍達を静かに照らし始めた。武士の掟を守り、破れた戦の責めのあかしをたどられた。」

日本と中国の古代兵士の歌

―特攻精神の淵源もここに見る―

百限の道は来にしをまた更に
助丁刑部直三野すけのよはらちむかべのあたひのみ

終年鼙鼓を事とするとは一年
中戦ばかりやっていとは

合うが、何度も言うとおりの片や防人自身
の作、片や本職詩人の頭脳から出た
もので、そう思うと読者にせまる詩歌
の真実味に違いを感じる。

我が国の古代兵士の歌といえは万葉集に見る防人の歌である。それは東国から召されて筑紫の海浜の防備に赴く兵士が、自らの感情を吐露した歌である。これに対し中国は辺境の異民族に備え、徴集されて行った兵士の、心境を表した歌の殆どは、兵士自身の作ではなくプロの詩人の代詠作である。

今度は防人（兵士）の妻の詠ったものを挙げてみよう。これまた彼の国のは、兵士の妻の心情を一流の詩人が気負って詠ったものしか伝わっていない。

万葉集には防人の妻の作は沢山載っている。
妻めくはし棕椅はのよ部刀と自賣じま

前出塞 九首 其の一 杜甫
戚戚として故里を去り
悠悠 交河に赴く
公家 程期有り
亡命すれば禍羅に嬰る
君 已に土境に富めり
刃を開くこと一えに何ぞ多き
父母の恩を棄絶し
声を呑みて行くに戈を負う

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯
と出で立つ吾は
火長今奉部與曾布いままつらのよをふ
長安 一片の月
万戸 衣を擣つ声
秋風 吹いて尽きず
総べて是れ玉関の情
何れの日にか胡虜を平らげ
良人 遠征を罷めん

草枕旅行く夫が丸寝せば家なる吾は紐
解かず寐む
この歌など一流詩人の作よりも読者の胸に迫るものがある。
防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず

交河 程期有り
君 已に土境に富めり
刃を開くこと一えに何ぞ多き
父母の恩を棄絶し
声を呑みて行くに戈を負う

大君の命かしこみ青雲の棚引く山を越
よて来のかむ
大君の仰せを謹んで受けるという心情が現れている歌は沢山見うける。
これに対し彼の国のものには前掲の詩だけではなく、為政者に対する不平めいた感情をあらわにしたものが少なくない。

これは誰の作か書いてないが、第三者の詩人では作れるものではない。
わが妻も晝にかきとらむ暇もか旅行く吾は見つっしのはむ
出発に際し暇がなかったたので妻の姿を画いて来なかったというのだが、東国の庶民にそのような画才があるとは教養の高いことを物語っている。

交河 新疆省にあり、安西都護府がおかれていた。
程期 日程の期限
城上 画角哀し
即ち知る 兵心の苦しさを
試みに左右の人に問うも
言無く 涙雨の如し
何の意ぞ 休明の時

塞下の曲 六首 其の五 昱戎
関所
関山月 玉昌齡
烽火城西 百尺の楼
黄昏 独り坐す 海風の秋
更に羌笛を吹く 関山月
那んともする無し 金闈万里の愁い

中国の兵士の作は伝わっていないのは、文盲でつくれなかったのか。詩経国風には個人の作が十四点ばかり載っているが、この本は全部当時の各国で歌われている民謡である。従って庶民の作と言えるが、兵士かその父母兄弟の作は前の十四点だけであり、我が国との教養の差が認められる。

万葉集には筑紫に赴く防人の歌が沢山あるが、その二、三を挙げてみる。
上丁有度部牛麻呂かみあつらうとくべのしまら
水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来に
て今ぞ悔しき

金闈 婦人の部屋
両詩共遠い辺境にある良人を思う妻の情を詠っている。ところで我が国のこれに見合う歌を万葉集に求めれば、
他田部子磐前たべのこいひさき
ひなぐもり碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも

この歌などは王昌齡の詩にぴったり

註 水鳥のは枕言葉

註 休明の時 聖明の政治の行われ
ている時節

泰山北斗の名将山下奉文大将

評議員 皆本 義博

ここ(財)青葉園に、山下奉文大将の墓所と青葉神社・記念館とがある。

歩兵第3聯隊以来將軍の側近に仕え、その訓陶に敬仰された当園の創設者吉田亀治氏によって建立された。



山下奉文陸軍大将

山下大将は、明治18年高知県にて出生、大正8年陸軍大学校卒業後、ドイツ・スイスに駐在、昭和2年オーストリア大使館兼ハンガリー公使官付武官として勤務、欧州の政情・軍事情勢について蘊蓄を極められた。

その後、皇弟秩父宮殿下も中隊長として勤務された歩兵第3聯隊長、次いで北支方面軍参謀長、航空総監の要職に就任、昭和11年2月26日の二・二六事件に際しては、軍事調査委員長として反乱軍の帰順勧告を果たされた。

さらに、支那駐屯混成団長に就任、昭和16年大東亜戦争の勃発に伴い、第

25軍司令官としてマレー・シンガポール攻略に任じ、目覚ましい快進撃により全世界も瞠目する戦果を挙げ、国民的人気を博された。昭和17年には、満洲の第1方面軍司令官に就任、翌18年陸軍大将に任ぜられた。

越えて昭和19年9月22日、大本営は決戦兵団として上海の第1師団・南滿洲の第23師団を比島の第14方面軍の戦闘序列に加え、翌23日、大将は戦局悪化の比島方面防衛の最高指揮官として、大きな期待のもと全軍の輿望を担われて第14方面軍司令官に親任され、東京において捷1号作戦につき大本営と協議の後、参謀長武藤章中将を帯同して10月6日マニラに到着、11日隷下各兵団長を集め統帥を發動した。

隊が上陸、3月中旬圧倒的な敵の砲火の下、主陣地を収縮、バギオを放棄して最後の複郭陣地に抛り、終戦まで戦略持久を実施した。

將軍は圧倒的戦力をもって攻勢をとる連合軍の攻勢に泰然として統率し、部下将兵一同の満腔の信頼を得ていた。

8月21日、南方軍の命により戦闘を停止し、9月3日、武藤章参謀長・大川内伝七南西方面艦隊司令官を帯同、バギオに到り米軍に降服した。連合軍は、国際法に定めのない、かつ、人倫に悖る恣意的な法を駆使して戦勝国の覇権をもって臨んだ。

將軍は、比島方面におけるすべての戦争の責任を一身に担われ、部下将兵に對しその勲功を愛でられ、一方自ら自分の死によってその後かえって部下将兵に累の及ぶことを憂慮され、泰然として裁きの庭に立たれ、衆生済度を念ずる法藏菩薩の姿であったと言われている。また、全軍將兵に對し、あらゆる苦難を乗り越えて、敗れた祖国日本の再建のため身命を賭して頑張ることを托する旨の最後の言葉を遺され、

10月12日～15日の不首尾に終わった台湾沖航空戦の結果、多数の米軍艦がレイテ湾に侵攻、ために捷1号作戦が發動され、隷下の各兵団はレイテ島において上陸米軍と苦しい死闘を続け、方面軍主力は北部ルソンの要域を確保、戦略持久を策したが、敵の猛攻により12月28日、司令部をマニラからバギオに移転、20年1月リンガエンに敵大部

昭和21年2月23日未明、ロスパニオスにて従容として国難に殉ぜられた。閣下の人間味は米軍將兵の間でも絶大で、サインを求めに來訪する者が陸統として続き、將軍は快く応じたと記録され

ている。

永きに亘り、西欧異民族の支配下にあって桎梏に呻吟したフィリピンも、この意義ある大戦の結果解放され、今日の安定と繁栄とを勝ち得た。これぞ閣下統率の精強第14方面軍の尊い血潮にかえての貢献によるものであろう。

偉大なる將軍の遺徳は、今日拳々服膺すべきものであり、私共はこの遺訓を体し、閣下が社稷の護り神として、とこしなえに神鎮まりますことをお祈り申し上げたい。

野山別け聚むる兵士十余方

還りて成れよ国の柱と

今日も亦大地履みしめ帰り行く

吾がつはものの姿頼母し 奉文

注1 泰山北斗の如し

泰山(中国の名山)や北斗七星のように、中心となって人々に仰ぎ見られ、尊敬されるような人物。略して「泰斗」。

【出典】(韓愈)は六經の文を以て、諸儒の倡たり(略)、学者之を仰ぐこと泰山北斗の如し(唐書・韓愈伝)。

注2 財団法人青葉園

文中に掲出の同園は、さいたま市西区三橋5-1505(〒331-0052 048-623-2111)に所在、現理事長は吉田奉文氏、埼玉郷友会(皆本会長)も、その支援団体である。

私の接した将軍達②

小畑英良中将の思い出

(戦死後大將)

田中 賢一

小畑大佐は昭和10年3月より12年8月まで、当時ハイラルに在った騎兵第14聯隊長だった。私はまだ士官学校在学中のことで、お目にかかったことはない。我が聯隊会にも当時在隊していた人は殆んどいなくなったと思うが、聯隊歴史を繕いて当時のことに触れてみたい。

11年2月8日、外蒙古軍が越境し、ジャミンホドックを占領した。そこで騎兵集団では第十四聯隊付の杉本一雄中佐を長とする騎兵一中隊、機関銃一小隊騎砲一小隊、重装甲車一小隊を派遣した。杉本支隊はオラホドガに於いて敵と遭遇し、激戦の末これを撃退した。この時、聯隊出身で重装甲車小隊長の鏡山中尉以下八名が戦死している。しかし、外蒙軍はなおも越境の気配があるので、集団長笠井中将は、騎兵第十四聯隊長小畑大佐に部隊の主力と配属部隊を率い、国境のハルハ廟付近に進出を命じた。

聯隊は勇躍酷寒をついて聯隊長以下全員防寒帽に日の丸の鉢巻きを巻いて出動、甘珠爾廟を経てシウウテン廟に

到着、一挙国境を突破し、外蒙のタムスク迄突進する決意だったが、関東軍司令官の命により中止し、シウウテン廟付近に止まって敵情を監視し、国境の警備に任じた。時に東京ではかの二・二六事件が勃発したのである。以上が小畑将軍が聯隊長時代の主な出来事と言えよう。



聯隊長時代

ラジオ空挺作戦のこと

さて、小畑大佐は騎兵聯隊長を終わって航空に転科した。航空関係の要職を経て、大東亜戦争開戦時は第五飛行集団長だった。第五飛行集団長は初め第十四軍に属し、比島方面の航空作戦を担当したが、比島戦定が一段落すると南方軍直轄となり、ビルマ方面の航空作戦を担当した。

私は第一挺進団司令部員として南方作戦に参加したが、パレンバン作戦終了後挺進団はビルマに移動し、第五飛

行集団に配属された。南方軍からの指導もあり、第五飛行集団ではラジオに挺進団を投入し、第五十六師団の攻撃を受けて雲南方面に退却中の重慶軍の捕捉撃滅を企図した。

この作戦について、第五飛行集団の首脳部(参謀長は三好康之大佐)は第三飛行集団が挺進団をパレンバンで見事に使い、大成功を収めたのを見て、自分のところにも負けてはおれないと思ったのだろう。それにもまして恐れしたのは、米軍装備の重慶の大軍が退却中とはいえ、降下部隊がのみ込まれてしまつては大変だと考えた。そんなことで作戦発起が遅れ、天候不良と相俟って発進はしが引き返す羽目になった。

4月29日早朝小畑集団長の訓示があった。訓示というよりも激励の辞といった感じだった。後にも先にも小畑将軍にお目にかかったのは、この時一回だけである。私も騎兵第十四聯隊の一員でしたと一言申し上げればよかったが、たいそう忙しい時間だったので、我々は駆歩で駐機場に急いだ。天候不良で引き返すことはなく、計画通り降下していても、ラジオには既に五十六師団の平井搜索聯隊が突入していた。

作戦が中断した我々は、シェイボーに使用ってくれと五集団に掛け合ったが、シェイボーは高くつくくと集団長は言っ

たとか、集団参謀から聞いた。
不運のつきはじめ

ここから先のことは私とは直接関係ないが、戦史の勉強になるかと思いい記述する。

17年7月南方軍内に新たに第三航空軍司令部が新設されたが、小畑中将は第五飛行師団長として依然ラングーンに在った。翌年5月小畑中将は二代目の第三航空軍司令官に任ぜられ、シンガポールに移ったが、同年12月に不慮の事故が起きた。

12月5日実施予定のカルカッタ航空攻撃の作戦指導のため、シンガポールからラングーンに向かう途中ピクトリヤポイント付近の洋上で、軍司令官機は消息を絶つてしまった。約一週間にわたる捜索にもかかわらず発見できないので、新たに木下敏中将が航空軍司令官として発令され、小畑中将は参謀本部付となり、引き続き捜索が行われていた。

その結果、メルゲイ沖の孤島に不時着していたところを、付近航海中の船舶に救助され、12月14日ピクトリヤポイントに到着した。

第三十一軍司令官となる。

ミッドウェー海戦に敗れたのが一転機となり、18年初にはガダルカナルから撤退し、南太平洋方面では次々と守



軍司令官当時の写真

りを失っていった。そこで大本営では18年9月、絶対国防圏を設定し、不敗の態勢を確立しようとし、その前線をスマトラ、ジャワ、チモール、西部ニューギニア、内南洋、小笠原、千島を連ねる線とし、陸海軍の総力をあげて防備を固めることになった。

中部太平洋の島々には逐次に兵力が投入されたが、それらを統一指揮するため、19年2月25日第31軍が新設され、小畑中將が軍司令官に親補された。

第31軍は、トラック地区集団(ポナペ、トラック、モートロックの各守備隊)、マリアナ地区集団(グアム、サイパン、テナアン、ロタ、パガンの各守備隊)、小笠原地区集団(父島、母島、硫黄島の各守備隊)、パラオ地区集団(パラオ、ヤップ島各守備隊)およびマーシャル諸島、クサイ、ウェーク、南鳥島、メレヨンの各守備隊と所要の軍直部隊からなり、現在すでに派

遣ずみの兵力二万八千に新たに増加される兵力約五万三千を加えて総計は八万に及んだ。

小畑軍司令官は3月10日零時、サイパンにおいて統帥を発動した。統帥発動に当たって軍司令官は全軍に対して次のように訓示し、將兵一丸となって太平洋の防波堤となり、敵の進攻をこの一線で食い止めようという決意を述べた。

本職茲ニ大命ヲ奉シ中部太平洋方面陸軍諸部隊ヲ統率スルニ当リ所懐ヲ陳ヘ麾下將兵ニ示ス 今ヤ敵ハ中部太平洋ニ於ケル皇国防衛ノ絶対圏ヲ突破シ一挙神州本土ニ迫ラントシ此等要域ハ対米戦ノ決戦場タルニ到リ戦局ハ寔ニ重大トナレリ 諸隊ハ須ク先ツ遭遇戦ノ要領ニ則リ速急ニ其ノ部署ニ就キ必ズ急戦備ヲ整ヘ逐次之ヲ増強シ特ニ速カニ鉄石ノ団結ヲ固成シ 敵ノ来攻スルヤ相互緊密ナル協力ノ下積極果敢決死必殺ノ反撃ヲ加ヘ一挙ニ敵ヲ水際ニ撃滅盡スヘシ之カ為所在海軍部隊ト真ニ一体トナリ後方補給ニ頼ルコトナク百難ヲ克服シテ自給自足ヲ以テ長期自給ノ方策ヲ尽シテ余スナク苟モ拱手難を啣チ徒ニ言ヲ横ヘテ不能ヲ嘆スルカ如キハ断シテ許サス

若シ夫レ軍紀ノ振作、志氣ノ昂揚、

將又「最後ノ覚悟」ニ至リテハ予ハ麾下將兵ノ已ニ固ク期スル所アルヲ信シテ疑ハス、唯行住坐臥聖諭ヲ奉戴シ又常ニ深く戦陣訓ニ省ミルヘキヲ告クルノミ 今日恰モ光輝アル我カ陸軍記念日ニ際会シ予ハ四十年前奉天戦ノ勝鬨ヲ回想シテ感銘更ニ新ニ誓テ麾下將兵ト共ニ身ヲ以テ太平洋ノ防波堤タルノ重任ヲ必成完遂シ以テ 聖慮ヲ安ンシ奉ランコトヲ期ス 元来この地域に在る陸軍部隊は聯合艦隊司令長官の指揮下にあったが、陸軍の第31軍司令部の新設に伴い、海軍も中部太平洋方面艦隊司令部を新設したので、第31軍は同艦隊司令長官南雲忠一中將の指揮下に入った。

小畑軍司令官は司令部をサイパンに置き、その訓示にもある通り「己れ太平洋の防波堤たらん」の信念のもと、鋭意防備の強化に努めた。以下小畑軍司令官の行動の跡を辿るに先立ち、この方面の主な島に対する敵の上陸及び玉砕の月日だけを書き出せば次の通りになる。これによって軍司令官として準備日数がどれほどあったか知ることができる。

グアム	7月21日上陸	8月11日
玉砕		
テナアン	7月24日上陸	8月3日
玉砕		

第31軍の隸下には海上機動旅団もあつたが、制空権も制海権も敵の手中にある現状で、敵が上陸して来たならば、それぞれの島ごとに戦うだけで、軍として兵力運用の余地はない。従つて軍司令官としては各島々の作戦準備の指導に最大の努力を傾注した。それが裏目に出て不運な結果を生むことになつた。

小畑軍司令官は5月28日パラオ地区集団の作戦準備指導のため、所要の幕僚を従え空路ペリリューに到着した。30日までペリリュー守備隊(歩兵第2聯隊基幹)の陣地を視察、5月31日からコロール島、パラオ本島、6月7日から11日までペリリュー、アングウル島を視察の後ヤップに移動、独立混成第49旅団の作戦準備を指導中だった。

6月11日、敵は上陸前の猛烈な砲爆撃を開始し、15日サイパンに上陸して来た。サイパンを守備しているのは第43師団(師団長斎藤義次中將)基幹の部隊で、軍司令官不在の軍司令部には軍參謀長井桁少將が在って、通信によつて大本営と連絡を取っていた。

小畑軍司令官一行は、米軍のサイパ

サイパン 6月15日上陸 7月7日

玉砕

ン上陸時ヤップ島を視察していたが、6月16日急遽パラオ島に帰還し、第14師団長井上中將なども協議した結果、要すれば、パラオ方面で直接作戦指導に任じたい意向を次のように東條參謀総長あて電報した。

照依来电第70号(6・17)

軍司令官発 総長宛

參電第一一五号ヲ拝誦シ愈々責任ノ重大ナルヲ銘肝ス小官事志ト違ヒ直接「サイパン」方面ノ戦闘ヲ指揮シ得サルハ最モ遺憾トスルモ在「サイパン」隷下部隊ハ必スヤソノ任務ヲ完遂シ御期待ニ副フヘキヲ確信ス

小官又万難ヲ排シ状況之ヲ許ス限リ速カニ「サイパン」帰任ノ予定ナルモ19日以前ニ見込ナキヲ以テ「パラオ」方面ノ戦況ヲモ勘案シ要スレハ依然当地区ニ在リテ直接作戦指導ニ任シ以テ負託ノ重任完遂ニ万遺算無キヲ期ス

小畑軍司令官の意図は、戦況上サイパンへの帰還が、ほとんど不可能な状態であることも勿論であるが、パラオは従来大本営以下が、次期連合軍進攻作戦の最重点方向と目した所であり、必ずや米軍の次の大攻勢がパラオに向けられるという判断に基づくものであったと思考される。

これに対し東條総長は、サイパン方面の戦局が、守備部隊の反撃不成功により重大な局面に立ち至ったことと思ひ合わせ、「……貴官は手段を尽くして速かにサイパンに帰着し直接該方面の作戦を指導するを要す」という強い趣旨の電報を發した。

当時サイパン上空の制空権は、全く敵手にあり、サイパン突入は無理であったので、軍司令官はひとまずグアムまで進出することとし、各部長をパラオに残し田村少將、橋田、泉、金重、塚本の各參謀を同行し、海軍中攻によりペリリューを出發し、一九五〇グアムに到着した。

グアム到着後も軍司令官は、サイパンへの帰投に努力し、6月24日にはパラオから陸軍飛行第2戦隊の百式司偵一機をグアムに呼び、サイパン突入の機会をねらったが、ついに実行に至らず、軍司令官はその後グアム島で全般の指揮をとることとなった。

グアム島の戦闘と軍司令官の最期

当時グアム島には第29師団(師団長高品彪中將、歩兵第50聯隊主力を欠く)、独立混成第48旅団(旅団長重松潔少將)、独立混成第10聯隊主力、野戦高射砲第52大隊及び海軍第29警備隊等の部隊、計約一万八千五百が高品中將の統一指

揮の下に地上防衛に任じていた。防備の重点をアガナ西方アサン地区(明石湾)におき、独立混成第48旅団及び歩兵第18聯隊主力が守備に当たっていた。又アガット正面(昭和湾)には歩兵第38聯隊が配置されていた。

第31軍司令官小畑中將は、參謀副長田村義富少將と共に、前述の如く敵サイパン上陸当時作戦準備指導のためグアム島に在り、遂にサイパンに帰還し得ずしてグアム島に止まっていた。

米軍の上陸は7月21日朝、明石湾及び昭和湾の両正面同時に開始された。敵の上陸兵力は明石湾方面約一師団半、昭和湾方面半師団計約二師団と判断された。

注 實際の上陸兵力は海兵一師団半、陸軍一師団。

我が守備部隊はサイパン陥落の悲報にもめげず、断乎同島を確保して国軍将来の攻勢の橋頭堡たらんことを決意し、熾烈な砲爆撃にも屈せず上陸する敵を邀撃した。しかし、猛烈な艦砲射撃に支援された敵は21日夕までには両方面とも橋頭堡を確保した。同夜第29師団は両正面に対して逆襲を行ったが、多数の損害を生じ成果を収めるに至らなかった。

翌22日より24日に亘る三日間、我が軍は小部隊を以て敵の橋頭堡を攻撃し

たが、全般の戦況は変化なく両軍対峙の態勢を保った。

この間敵は逐次兵力を増加し、爾後の攻勢を準備中なるが如く時日の経過は我が軍に不利をもたらすものと認められた。ここにおいて第31軍司令官小畑中將は断乎全力を揮って敵に決戦を求め、勝敗を一挙に決せんと決意し、高品師団長を指導するところがあつた。この全力攻撃は25日夜明石湾方面の敵橋頭堡に対して行われた。しかし、敵の優勢な艦砲射撃及び地上火力によって損害続出し、攻撃は再び不成功に終わった。

翌26日、敵は橋頭堡を出て攻勢に転じ、両正面とも我が主陣地の保持は困難となった。各部隊は27日夜より海岸付近の主陣地を徹し、東北方のテイヤン(平塚)付近に新陣地を構成した。この間、独立混成第48旅団長重松少將は26日、第29師団長高品中將は28日戦死したので、爾後小畑軍司令官自ら残存兵力約五千を指揮して戦闘を続行した。

平塚付近陣地も敵の砲爆撃と戦車を伴う攻撃のため長くは保持出来なかった。8月初頭グアム島残存の日本軍は最期の複郭たるイゴ付近の陣地(又木山及び高原山)に拠つたが戦力の減耗は著しかった。

もはや陸、海軍の別も、第一線と後方の区別もなかった。衛生部隊や海軍設営隊も戦い得るものは皆又木山、高原山に集結した。しかし、武器、弾薬は既になく、すべてを銃剣突撃にかけろはなかつた。

8月8日我が残存戦車10両は、高原附近に進出した米戦車部隊に突入して、最後の決戦を行ったが、ことごとく米戦車砲のため破壊され、我が戦車隊は全滅した。

米軍は又木山、高原山を包囲したまま、北に向かって進撃し、この日グアム最北端の北岬に進出した。

9日早朝、米軍戦車50両は一斉に又木山前面の攻撃を開始した。これに対し肉薄攻撃だけの我が守備部隊は多数の戦死者を出した。夕刻における生存兵力は、又木山付近に約三〇〇名、高原山に二〇〇名、その他密林内で戦闘中のもの約三〇〇と見積もられた。

小畑軍司令官はマンガン山の戦闘以來、部下將兵とともに弾丸雨飛の間に身を置き、將兵の士気を鼓舞し続けてきたが、今や残存兵力は一日と減少し、そのうえ頼みの兵器弾薬も尽きてきた。軍司令官はこれ以上戦闘を続けるも、もはや数日の運命を残して消滅するだけであると考え、8月11日夜明けを期し、戦い得る者すべてをあけて

最後の決戦を敢行するに決した。

10日一四〇〇ごろから米軍戦車と歩兵部隊は、又木山の頂上に向かって攻撃し、司令部の壕に対して射撃を始めた。激戦は夕方まで続き、この戦闘で指揮官はことごとく戦死し、將校の生存者はわずかに三名となった。高原山の状況もまた同様であろうと判断された。

軍司令官は10日午後、自ら電文を書き、大本営に対して最後の電報を打った。

天皇陛下ニ対シ奉リ

臣英良幼少ニシテ軍人ヲ志シ 幼年学校ニ入校シテ以來今日ニ至ル迄 常ニ皇室ノ殊遇ヲ辱ウシ 不肖ノ光榮之ニ過キルモノナシ シカルニ奉公ノ衷誠ニ寡少ニシテ 慚愧ニ堪ヘス今次中部太平洋ノ重責ヲ荷ヒ任ニ赴キタルモ 既ニ「サイパン」「テナヤン」両島ヲ失ヒ 今マタ大宮島ノ防戦利非ス

数多陛下ノ赤子ヲ失ヒ 且今や武器ナク 弾丸尽キ糧食ナク 初志ノ完遂絶望ニ歸セントス 寔ニ申訳ナシ 茲ニ意ヲ決シテ生存將兵全員ト共ニ 明11日 最後ノ決戦ヲ行ハントス

終リニ臨ミ 両陛下ノ万歳ト皇國ノ降昌ヲ祈リ奉ル 大本営ニ対シテ

不肖 軍司令官ノ責ヲ受ケ 不眠不休努力セルモ 武運拙ク「サイパン」以來常ニ戦利非ス 今マタ大宮島ニ於テ苦戦ヲ続ケツツアルモ 指揮官少ク兵又斃レ武器壞レ弾丸尽キ唯空拳アルノミ 大宮島確保ノ希望ハ絶タレントス 茲ニ生存者全員ト共ニ又木山陣地ニ於テ 明11日最後ノ決戦ヲ決意ス唯

大宮島玉碎ノ報ニヨリ 本国民ノ士氣沮喪センコトヲ憂ウルノミ 我等一同ノ魂ハ永久ニ此ノ島ヲ守リ皇國ノ安泰ヲ祈ル

幾多戦没將兵ノ遺族ニ対シテハ誠ニ氣ノ毒ニ堪ヘス 国家ヨリ援助ノ道ヲ講セラレントヲ特ニ願ヒス 生存將校ハ一同士氣旺ナリ

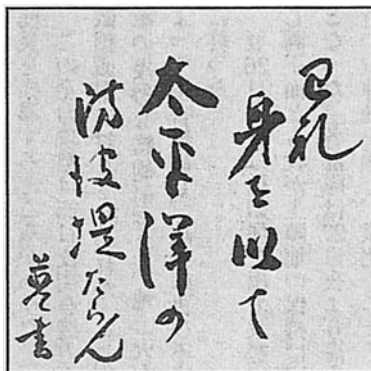
本10日一二〇〇以後 本国トノ通信ヲ絶ツ 終リニ皇國ノ發展ヲ祈ル 注 大宮島とはグアムのこと

8月11日〇七〇〇すぎ、平塚方面から轟々たる爆音がひびき、30分後には米軍戦車が又木山に突進して来た。しかし、我が部隊は連日の戦闘にようやく生き残った寄せ集めの部隊であり、機関銃と小銃がわずかに残された武器であった。

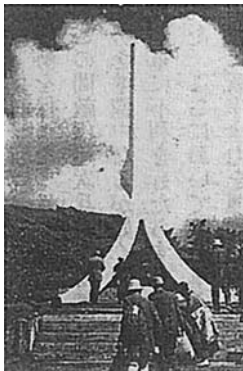
防禦陣地はたちまち突破され、米軍戦車は一挙に軍司令部に迫り、掩蔽壕は爆破され兵員はほとんど戦死した。

小畑軍司令官はもはやこれまでと覚悟して拳銃をもって自決した。田村少將、橋田参謀も前後して戦死した。時に8月11日一四三五であった。

かくて又木山の戦闘は、わが將兵の全滅をもって終わりをづけ、同時ごろ高原山も米軍の手に陥ち、ここにグアム島守備隊の組織的戦闘は終わった。



小畑軍司令官の書



グアムの慰靈碑

「陸軍挺進部隊外史」の

自衛隊空挺隊員の読後感②

第一普通科大隊長
二等陸佐 谷口喜一郎

一、はじめに

この本の表紙の「語りでもなほ語りても尽きざるは国に殉せしむらすのとも」からも伺えるように、著者が旧軍として陸上自衛官としての経験を踏まえ、後世の我々に一つでも多くのことを活かして欲しいという思いから書かれたものであることが、拝読させていただいて伝わってきた。「空挺作戦とは近代戦において本当にあるのか」という声が聞こえる昨今、我々が空挺作戦の必要性、空挺部隊の意義を見つめ直す意味で、旧軍が実施した空挺戦史に学ぶことは極めて意義が大きいと考える。空の神兵像の後方に広がる翔空園の中に「伝統なき創造は危殆にして、創造なき伝統は空虚なり」という言葉が残されている。今ここにある我々は、歴史を学ぶのではなく、歴史に学び、不易流行、時代の流れに柔軟に対応しないとならないものは、変わらぬ本質は何かをしっかりと見極め、一歩ずつ確実に前進することが大切であると実感する。

今回の所見にあたり「空挺作戦とは？（本質はどこにあるのか）」「指揮とは？」の二つの視点から考察し、大隊長として今後部隊で反映すべき事項について明かにしたい。

二、空挺作戦とは

「空中機動作戦の目的は、地上作戦では即応できない緊急かつ重要な時期に部隊を空中機動させ、重要目標の攻撃、要地の占領、危機正面に対する対処・増援等を行い、作戦全般の遂行を容易にするにある。（野外令）」と

あるように、空中機動作戦、特に空挺作戦は、戦術的な運用ではなく、戦略的な運用に使用して初めてその効果が最大限に発揮される。また、空中機動作戦を実施する場合の主要考慮事項として、①指揮・統制組織の確立②準備の周到③奇襲④航空優勢の獲得及び敵対空戦部隊の制圧⑤降着戦術の迅速な発揮（野外令）とあるが、最も重視されるべき事項は奇襲である。予期せぬ変化と対応のない連続する変化によって、対応のいとまを与えないことにより、敵にパニックと麻痺の現象を起こさせ、作戦全般に決定的な影響を与えるような成果につなげることを可能にすると考え。つまり、奇襲効果のない作戦は、「飛んで火にいる夏の虫」状態であり、むやみに戦力を消耗するだけの状態になる。また、空挺作戦は、「何をやるか」により作戦全般にどのように寄与するかを目的（戦略的運用）として立案されるべきであり、戦術的に運用したとたん、特攻的運用に陥ってしまうことも併せて今回の「外史」に学ぶことができる。

大東亜戦争当時の落下傘部隊の運用は、パレンバン作戦、ラシオ作戦にみられる主作戦に連携した空挺作戦（戦略的な運用）から、レイテ作戦、沖繩作戦にみられる主作戦との提携を前提としない一か八かの空挺作戦（戦術的な運用：特攻的な運用）に変化していくようになったパナペナ・ハーゲン空挺作戦である。パナペナ・ハーゲン空挺作戦は、挺進団側の具申はあったにもかかわらず、主作戦との連携が困難を理由に中止になっている。このことから、この時期までは空挺作戦の本質を理解し、勝つための作戦を計画していたことが伺える。しかしながら、何故それ以降の作戦は、特攻色が濃くなっていったのか。ミッドウェイ海戦が17年6月、ガダルカナルから

の撤退が18年2月、連合軍のソロモンとニューギニアに同時上陸が18年6月、インパール作戦が下令されたのが19年2月、神風特別攻撃隊（敷島隊）出撃が19年10月という開戦から形勢が逆転し終戦に至るまでの史実をとらえると、空挺作戦も同じような経緯（パレンバン・17年2月、ラシオ・17年4月、パナペナ・17年5月）をたどっていることが容易に理解できる。戦争を終わらせることの難しさは、戦闘の困難さにそのまま直結するものもある。時代の流れは、わかっているとしても止めることができない大きな力を持っていることを、「外史」からさまざまなと感じることが出来る。

しかしながら、特攻的な要素が強くなったレイテ以降を時代の雰囲気のみで片付けることはできない。特攻とわかっていても何故やろうという気持ちになったのか。任務をどのように理解したのだろうか。それは、「外史」（P33～P34）の杉山参謀総長からの激励を受けた河島大佐が、戦後田中氏に語った「今考えれば確かに特攻隊だが騎虎の勢いというか、それほど大きな目標ならば最後は皆そこで討死してもよい、やってみようという気持ちだった。」という言葉によく表れている。まさに、これこそが任務意識である。

空挺作戦の本質を私なりに整理すると、「計画段階：戦略的運用（慎重）」「実行段階：奇襲、任務意識（大胆）」が「外史」から得た感想である。

三、指揮とは

真っ先に心を打たれたのは、掲載されている指揮官たちの目である。鋭く、厳しくそれでいて何故か優しさを併せもつ戦士としての目である。

この指揮官たちの統率の姿勢において共通するところは「外史」（P48）の「俺がいく、俺がやる、俺について来い。」であると感じた。これに対し隊員たちは異口同音に、「中隊長が引き連れてゆくのだから、それについて行くのは当然だと思ひ、それほど深刻に考えなかった。中隊長がそのような任務をもらったのだから、当然のことだと思った。」と語っている。空挺部隊指揮の原則をあらためて享受された思いであり、死に裏付けされた強い絆を随所に感じることができた。

四、今後の訓練に

「計画は慎重に、実行は大胆に」とよく言われる。空挺作戦は主作戦に連携してこそ十分な効果が見込めるのであり、主作戦を軸に可能性を踏まえて慎重に計画する頭脳（本部）を育成すること、また、実行にあたっては、闘志の塊であった渡部大尉のごとく、部隊はもろろんのごと、一隊員になったとしてやり遂げる強靱な意志をもった大隊、戦士を育成することは、大隊長としての責務である。そのためには、訓練に取り組む厳しい姿勢（訓練は血を流さない実戦であり、実戦は血が流れる訓練である）が重要であり、厳しい訓練は、大隊としての組織力、戦士としての戦闘力、そして最も大切である「人」と「人」の「絆」を自ずと形成してくれるものと信ずる。

五、おわりに

特攻の生みの親である大西瀧治郎中将の話を知覧の特攻記念館で「大西中将は、最後まで神風特別攻撃隊には反対だったが、敗戦が濃厚になったころから大和魂を後世に伝えるのは特攻しかない」として攻撃隊を指揮している。特攻隊員と自分も同じ気持ちであるというのを裏付けるように特攻隊を送り出した後、介錯もなしに自ら割腹し十数時間も苦しみ抜いた末に息絶えた。」ということを知ったことがある。また、産経新聞のソウル支局長黒田勝弘氏も、空挺団で講話された際、今の日本があるのは「特攻」のおかげだと言うことを切に語られていた。「特攻」とは、日本国の最後の妻みを欧米諸国、後世に伝えたものである。戦後の日本の経済発展もこの妻みを背景にしたものであると私は感じる。阿南陸相

が「神州の不滅を信じ」と遺言を残したように、『外史』から先人が、我が国を想い、後世に残る我々に託したいと思う願いを痛切に感じ取ることができた。先人のこのような思いに対する我々の答えは、日本国の最後の防波堤として、日々は鍛錬することに尽きるのではないであらうか。

第一普通科大隊本部三係主任 三等陸佐 石川 泰宏

一、前言

約20年ほど前、高校生の頃に「現代の空挺作戦」を読んだことはありますが、旧軍の空挺戦史について自ら進んで勉強したことは無く、この機会に勉強させていただきました。

そのような私でも、田中賢一氏の講話を受けたことがあり、パレンバンや義烈空挺隊については概要を知っておりましたが、レイテ空挺作戦についての知識はほとんど無く、今回、勉強する機会を与えていただき感謝しております。

二、パレンバン空挺作戦に見る周到な準備

精油所の奪取という作戦目的の達成、降下翌日の38Dとの提携、損耗の少なさ等から実行の可能性に裏打ちされた綿密な作戦であり、空挺戦史としてのみならず、帝国陸軍史としても輝かしい作戦であったと思います。

また、海軍側の都合により作戦時期が二転三転しながらも、編成後間もない挺進第2聯隊をもって任務を完遂したことに驚きを感じました。

三、レイテ空挺作戦の失敗に見る教訓事項

第4航空軍による実行の可能性の検討、すなわち、降着後提携するはずの26D及び16Dの状況を全く把握していなかったことが最大の原因となり、作戦目的を達成し得なかったと思います。

その他、作戦目的がブラウエン地区の先取

(26Dの東方平地進出に寄与)からブラウエン飛行場群の制圧(68Bのオルモック上陸に寄与)に変更となったこと、ドラッグ、タクロバンへの戦闘力の分散も教訓事項であると思います。

四、義号作戦に見る特攻精神

甚大な損害を出しながらも、2日以上にわたり敵飛行場の使用を完全に封じて作戦目的を達成した、特攻精神を見事に具現した作戦であったと思います。

また、隊員の死生観についても後世に語り継ぐべきものであると思います。達観した様子が撃直前の笑顔に良く表れており、感銘を受けました。特に生き残った方の「中隊がそのような任務をもらったのだから、当然のことだと思った。」という言を受け、「中隊長と共に往くのだから。」ということに心の拠りどころを持たせられるような指揮官に為るべく、精進する所存です。

五、結言

私の数年間の空挺団勤務の間、OBの方からお話を聞く機会が幾度もあり、第1空挺団創設時、「技術は米軍から学び、精神は旧軍から学ぶ。」という考えの下、先達が団を創って来られたという認識を持っていました。田中賢一氏のような旧軍の将校としての経験を持つ方が現職自衛官であった時代は遠く過ぎ去り、今現在、旧軍の精神を学ぶためには、より一層空挺戦史を学ぶことが必要であると感じました。

第一普大 隊本部情報幹部 二等陸尉 古庄 明裕

一、全般

先輩たちが「神州の不滅」を信じて、航空機に乗り込み、太平洋に散っていったのは、わずか60数年前の話である。この小冊子に書かれていたのは、やむなく開戦に踏み切った

我が国が、敗戦に傾きつつある頃、敵に一矢報いようと編成された空挺部隊の将兵たちの足跡である。

当時とは、時代が異なり、人々の考え方も異なる。しかし、日夜訓練に励み、我が身を挺して国民の生活を守ろうという気概は変わらない。筆者の「有史以来まれに見る激動の数年間に得た体験の一端を取りまとめ、我々の後継者である自衛隊空挺隊員に遺そうと思

う」という言葉が我々は後輩として重く受け止める必要がある。

この小冊子を読んで、当時の空挺隊員たちの任務に対する強い思いを感じるとともに、幹部自衛官として部隊を運用することの責任の重さを感じた。

二、特に印象に残った事項
挺進第3聯隊長白井恒春中佐の手記
田中氏が言うに「彼我の戦力は隔絶しており、我が方が攻勢に出る力などある苦がない」といった状況の中、第3聯隊長はレイテに派遣された。その間、白井聯隊長は「ブラウエン地区の戦闘について詳細な手記を認め、これを後世に残そうとする一念だけで行動していたのだろう」という。与えられた任務を遂行する上での将兵たちの活躍と苦しみを後世に伝えようという責任感に感銘を受けた。

大本営参謀晴氣少佐の苦衷
参謀本部においてマリアナ諸島の防備計画を担当した晴氣少佐は、挺進第1聯隊本部付の園田大尉に「この戦争、勝っても負けても我々は生きておれないうだろうなア」と語ったという。そして、終戦直後、晴氣少佐はその思いを裏付けるかのように、市ヶ谷台上で自決した。

サイパン玉砕の報に接し、「責任万死に値すると思っていたのだろう」と田中氏は言う。勝つ望みの無い戦争においてもなお、担当する戦場において勝利を獲得するため、その計画作成に全力を傾注し、その結

果、多くの人命の犠牲を強いてしまったことへの苦悩は計り知れない。

我々も普段の訓練、任務において幕僚として作戦立案、又は、指揮官として決心するに当たり、そこには一人一人の隊員の命が懸かっているという重責をよく理解しなければいけない。

三、部隊を統率する上で参考となる事項 統率の姿勢

挺進部隊が何度か自らの部隊をその戦局で使用するように意見具申する場面がある。それに対し、上級司令部が当時の状況から判断して、何度かそれを不適当としたことについて、田中氏は「上級司令部の姿勢が正常であった」と述べていることに同感である。

ところが、その後、戦局が悪化し、玉砕戦法が常用戦法になるに至り、「潔く最後を飾らせた」という思いから、戦術的な妥協を鑑みず、挺進部隊からの意見具申に従って沖繩・レイテに空挺部隊を派遣したことは、田中氏の言うように「前時代的」な判断であったと感じる。

先立った者たちへの義理、部隊の面子といった理由から、「後に続くものを信じ」、死に急ごうとする隊員たちの意見具申を戦術的に不適当であると判断し、毅然として制するだけの、冷徹さが幹部自衛官には必要であると感じた。

義烈空挺隊長奥山大尉の隊員に対する感化
「義烈空挺隊の場合は、当時の日本人に共通した国家観、それに加えて、軍人として鍛え抜かれた責任感が根底にあり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうち死に対決する姿勢がとれたのではないだろうか」と田中氏は述べている。

義烈空挺隊は、編成から6カ月間、何度も任務が見送られた。しかし、奥山隊長が「目標が消滅し具体的な任務がない期間でも、即刻この種の任

務につけるような訓練は怠らなかつた」ことが隊員たちの「心の支え」になつたのではないかと田中氏は言う。

こうした、奥山隊長の感化があつたからこそ、隊員は透徹した死生観を確立し、特攻隊指定から終わりまで脱落者を1人も出さずに部隊を率いていくことができたのである。

我々も普段の隊務を通じて、部下隊員たちへの感化を与え、真に任務を達成できる部隊を育成していく必要性を感じた。

四、その他

大東亜戦争における空挺部隊の足跡を後世に伝えるために「陸軍挺進部隊外史」を個人で編纂された田中賢一氏の情熱とご尽力に心から敬意を表したい。

そして、先人たちの犠牲の上に現在の日本の平和な暮らしが成り立っていることに改めて感謝するとともに、先人たちの思いに恥じめよう、幹部自衛官として、国家防衛のため、努力を継続していかなければいけないと感じた。

第一普通科大隊本部中隊長

一等陸尉 桜井 圭一

昭和15年12月、陸軍落下傘部隊の母隊である挺進練習部が浜松飛行学校内に設けられてから、滑空部隊の増勢に重点を指向し、挺進集団を編成するまでの部隊の変遷、大東亜戦争の経過に伴い空挺作戦の実施が困難となる様子、各空挺作戦における実行の背景や目的及び作戦の概要が理解できた。

また、バレンバン、沖繩(義烈)以外に実行できなかった作戦、計画段階で取りやめになつた作戦等、陸海軍合わせて7個の空挺作戦があつたこと、田中賢一さんの経歴等についても新たに認識できた。そして、昭和17年6月以降、米軍反攻後の戦争末期の厳しい戦

況の中、昭和19年12月実施されたレイテ空挺作戦や昭和20年5月実施された沖繩空挺作戦など複雑な計画や特攻として実施された作戦で命を落とされた方々への追悼の意を深くするとともに、生還の見込みの全くない任務にも、進んで就こうとしたこれらの人々の特攻精神、死生観や忍耐力等、甚だ敬服する所であります。

特に、この陸軍挺進部隊外史中の「統率の姿勢 四年間の変わり方」、「陸軍の空挺戦史に見る特攻精神」、「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」から感じた空挺精神を簡単に述べれば、決して騎虎の勢いで死に急ぎ、無駄に命を散らすものではなく、実行の可能性と正しい状況判断の下に赴難の勇気を持って任務を遂行することであると感じました。また、終戦から60年余、使命感と情熱を持って、旧軍挺進部隊の志を後世に伝えるべく活動されている田中さんのもと、強い空挺精神を持つた方であると感ぜるとともに、今後とも、より一層理解を深め、唯一の空挺部隊である空挺団において、よき伝統として継承されるべきものと深く感じたいであります。

第一普通科大隊本部中隊長

二等陸尉 都丸 武

一、所感
陸軍挺進部隊外史を通読し、当時の歴史背景、陸軍挺進部隊の編成と変遷、司令部が作戦経過による挺進部隊の掌握不足のため戦闘力変化の認識に相違が存在、各作戦の指揮官像及び苦悩等を理解できた。

また、指揮官の理想像等を生存者の声から垣間見ることができ、自衛隊の特に空挺幹部としての教訓事項を再認識することが出来た。ひとつの歴史を多方面から見直す必要性を実感した。
二、指揮官像と苦悩

(1)

指揮官を支えたもの
各級指揮官が統御を良好にして、下士官兵を掌握し死を覚悟した作戦を指揮出来たのは、単に指揮官が優秀であつただけでは為し得ない。当時の日本がおかれた時代背景、諸外国との思想や国力の違いにより国家繁栄のための選択、日本国及び日本国(軍)の歴史、国民の納得、日本民族として平素の教育や思想、軍事教育、統制(法規)等がそれぞれ作用し合い、それが当然のことと理解される環境が整っていたからである。また、その中の一部分である日本民族としての愛情の深さが、指揮官としての責任感に火をつけ、研究、訓練、掌握、管理、調整を誠実熱心に実施して、下士官兵の日本人たる本能を動かしていたのである。

(2) 指揮官の苦悩

開戦以降南方の油田獲得は当然なことでありながら、大本営は明確に目標と発令できなかった。初の陸軍挺進部隊運用となり、結果如何では陸軍挺進部隊の将来を左右するという慎重になり、裁量の余地が与えられたであろう。言い方を変えれば、落下傘部隊の運用経験が無いのでその能力が不明で、とりあえず最低限度の目標を与え様子を見る、細部は部隊に委任する、とも採れる。研究、訓練の成果から自信のある挺進団各指揮官及び参謀はプライドを大部傷つけられ、それがまた、絶対的作戦を成功させるという決意に作用したであろう。第1聯隊の事故により第2聯隊を率いた久米団長は陸軍挺進部隊の地位・役割そして可能性を十分理解して居られたので陸軍挺進部隊の将来のためこの時機のバレンバン作戦に参加する必要を訴えたのであろう。作戦は降下者の1割近い戦死者を出したが良い評価を得た。この戦果は後に挺進部隊の能力を過大評価させたのではない

かと推測する。特攻が常態であり、苦しい戦闘を強いられていたのは確かであるが、レイテの作戦において複数の目標が与えられたのは、この戦果が過大評価され、同様に期待されたからであろう。

義烈空挺隊編成から沖繩特攻までの半年という長い期間を、全国から志願した兵(ツワモノ)の逸る気概、焦りや苦悩を五感で感じながら訓練のみと論しながら汗した奥山大尉の姿が想像できる。幸いなことに、写真から奥山大尉は大柄な体格と屈託の無い笑顔から人柄も見受けられる。奥山大尉とともに訓練に汗した者は、その魅力に取り付かれ、絶対の信頼を置いたに違いない。指揮官としての資質が奥山大尉の苦悩を軽減させたものと推測する。(北西へ角のように突き出した残波岬から北は断崖、南は砂浜が続く。東には座喜味岳があり西の残波岬、東の懐に読谷、南東の嘉手納を一望できる。石灰岩を積上げた城跡がありそこからの眺めは天気がよければ北谷の町が良く見えるほどである。読谷は座喜味の懐でやや高台に位置しており海からは少し坂を上る。やや鹿屋を想像する。その坂の途中に楚辺通信所(象の檻)がある。嘉手納にはその坂は無い。サトウキビ畑の中に突然アスファルトの直線が現れる。道路として利用している部分とそうでない部分がある。そうでない方は車止めや諸所穴があり、利用されていないようである。等間隔に駐車スペースのような部分があり付けられている。英語の立て看板があり、海兵隊の降下場のようなものである。北側の真新しい村役場の向かいにサトウキビに囲まれた慰霊碑があつた。一本柱に達筆な黒い文字が書かれてあつた。役場の移転に伴い建てられたのか最近のものであつた。大先輩達の冥福と将来の誓いを込めて手を合わせた。ここ数年訪れていない

ので、最近の様子は確認していない。ただ、あの高台にしかも夜間の突入に成功した操縦手には本当に頭が下がる。

三、挺進部隊指揮官の理想像

陸軍挺進部隊外史から推察する指揮官の理想像は、まず日本人であること。武士(侍)の存在した国の代表として、様々な愛情の持ち主であり、家族、同期、同僚、部隊、国家、国民、国土、後輩等、今あるもの、過去のものと、そして未来に対する愛情をもっているという。次に軍人として優秀であること。敵のことを常に考え、私の弱点を認識しそれに対する方策及び成果を常に思考し大局を把握して、それらに必要な部隊の練度を保持していることであり、意見を求められれば適時適切に返答できることが当時の状況において必要であった。更に、指揮官として部下である下士官兵、場合によっては上官、同僚までを魅了させるカリスマ性を備えていること。体が大きい、目立つ、二枚目であるという物理的なものや、物事をはつきり言う、頑固である、部下には優しいが自分には大変厳しい、一緒にいると楽しい、落ち着くなどという普段の行状、精神論者である等人をひきつける何かを具備していることが必要である。任務を必ず達成するという目標を達成するにはやはり一人ではできないものであり、どのような部下を率いて部隊として任務を全うするかが必要であり、課題でもあったはずである。時代は違いますが、求めることは今と何等変わりない。

四、教育事項(空挺幹部としての目標)

- (1) 指揮官としての業務を全うすること
指揮官業務は部下の命の安全を左右するものである。このため怠ってはならない。
- (2) 歴史認識をもつこと
時代背景や対極の行く末等、指揮官として戦闘の様相を把握する一手段であり尺度である。
- (3) 愛情に裏打ちされた指示・訓練の実施

(4) 目的とする成果を確立し、部下や部隊の為に必要なことは妥協しない。
カリスマ性の具備
部下をひき付ける何かを確立し信じて実行すること。

第一普通科大隊本部中隊 二等陸尉 柴田 哲良

一、序言

今日、軍事の世界においても技術の進歩は著しく、それに伴い戦争の形態も大きな変化を遂げた。しかしながら、どんなに古い戦史からでも現代戦に通ずる教訓事項はあり、そのほとんどは戦争の原理原則といえるほどに貴重である。また、戦闘に望む兵士たちの死生観については、その必要とされるものは現代も昔もなら変わらないことと無い。今回、空挺団の前身である陸軍挺進部隊の戦史を講読し、一空挺隊員として、勇敢なる諸先輩方の成し遂げた偉業から多くの大切なことを学んだ。じ後の部隊勤務に大きく役立てたいと感じた事項について、大きく教訓事項と死生観の二つに区分して述べたいと思う。

二、教訓事項について

- (1) 空挺作戦の特性
 - ア 発動した場合、成否に関わらず彼我に与える影響は物的、心理的に非常に大きく、リスクが高い。
 - イ 装備の貧弱な空挺部隊にとって地上部隊との提携は死活問題であり、独立的に空挺作戦を実施する場合は、生還できる確率は非常に低い。
 - (2) 作戦準備
空挺作戦の実施に当たっては作戦地域の正確な彼我の状況把握は特に重要であり、指揮官及び幕僚の現場進出は義務といっているほどに必要である。

(3) 降着戦闘

ア 降下場の状況により、降着直後各戦闘に入る可能性があるため、階級等に関係なく高い各個戦闘能力(特に近接戦闘能力)が必要である。
イ 投下した物料については回収できない可能性もあるため、与えられた任務を遂行できる最低限の物については個人で携行して降下をし、また、作戦についても物料の回収状況に柔軟に対応できるものでなければならない。

ウ 空挺降下による損耗はまず間違いなく発生するため、出撃前の一隊員に至るまでの任務の徹底及び指揮の継承についての徹底は非常に重要である。

三、死生観について

挺進団の各部隊は、生還の見込みがない任務でも、それが重要な目標であれば死をも厭わず、自ら進んで志願するといったまさに挺進赴難の精神を实践していた。特に義烈空挺隊に至っては決行されるかわからない、しかし確実に死を意味する特攻という任務を前に6カ月という長期にわたって団結・規律・士気を維持したのは驚異的な精神力である。各兵士たちの心のよりどころは、

(1) 将校

幹部としての意地、責任感および敬懐心中隊長に対する信頼感と中隊に対する帰属意識

であるという。現代も昔も変わることのない要素といえよう。

四、結言

以上、2項目について述べたが、教訓事項については、じ後の教育訓練においても反映させなければならない事項であり、また、隊員に対しても戦史という空挺作戦の具体例をもとに機会教育を実施すれば理解も容易であるだろう。

死生観については、その陶冶が非常に困難

ではあるが、平時から良く考え、研究するとともに、危険かつ困難な状況において常に率先垂範の姿勢で隊員を牽引することで学んでいく必要がある。

日本軍挺進部隊の各級指揮官は、その卓越した統率力により、まさに部隊団結の核心となり、その指揮下部隊は死をも辞せず、特攻という任務に士気旺盛で臨むことができた。現代の空挺団についてもその任務に伴うリスクは戦前の陸軍挺進隊と大きく変わることはないため、特に空挺団幹部は死生観の保持はもとより卓越した統率力を身につけるために練磨しなければならぬことを戦史から学ぶ必要がある。その卓越した統率力をもって隊員を統御し、所属する中隊、大隊、空挺団に対する帰属意識をより一層強化させることが必要であろう。

陸軍挺進部隊の戦史を学ぶことは空挺隊員の義務であり、また、それをあらゆる機会を通じ隊員に教育するのは幹部の責務である。それを自覚して今後の隊務運営に臨んでいきたい。

第一普通科大隊第一中隊長

三佐 神崎 忍

昨年8月に配布され読ませただき、今回で2回目であるが、田中賢一氏の体験に基づき、戦後生存し、復員した方々からの聴取及び関係資料をもとに記述されたものであり、空挺隊員にとっては貴重な資料である。今回拝読し感じたところを率直に述べたい。

まず第一に日本陸軍が実施した空挺作戦の概要が記されているが、ここで感じたことは世界の趨勢から見た日本軍の空挺作戦についてである。

1929年世界初の空挺作戦がソ連軍において実施され、1940年には独軍が大規模の“デンマーク、ノルウェー侵攻作戦”、

1941年に同じく独軍が「クレタ島攻略」において1万人以上の師団規模の空挺作戦を実施しており、いずれにおいても空挺部隊は大損害を被り、独軍に至っては、じ後空挺作戦に対し消極的になっている。そんな中、米国、英国において空挺部隊を設立し、日本のパレンバン作戦の2年後の1944年6月実施したオーパード作戦において、3個師団を使用したのが戦例を考慮して様々な対策を講じたにもかかわらず、米・英ともにその成功には半信半疑であった事実がある。つまりパレンバン・レイテ・沖繩の各空挺作戦において、記載されているように指揮官(空挺部隊を運用する)の苦悶は、世界各国で起こっていることになる。ただこの当時の世界と日本陸軍の空挺運用で異なるところは、世界は政治色が濃厚であった。つまり当初から戦略的に運用されていたことにある。その点日本陸軍は、作戦の実行の有無を含めて決定権が軍人であったことは、幸運なところである。しかしながら、空挺部隊を運用する上での作戦の着意事項については、当時も現在も大差はないが、一番変化したのは科学技術に基づく空中機動間の精度向上である。逆に考えればそれ以外のところは、今も昔も変わらない。この点において、この「陸軍挺進部隊外史」は参考になるところが多い。

さらに、資料の豊富なノルマンディー(オーパード)作戦を一例に取り、日本陸軍が行った空挺作戦との差異について、考察することにより更にこの本の真意が読み取れる。細かなところで異なるところは、敵頭上降下の賛否、準備時間の長短、確たる制空、制海権の有無、兵力ぐらいであろう。同様であると感ずることは、航空機の不備(有視界飛行、エンジンの信用性)による損害、誘導手段の不備(当時、ビーコン(電波発信器)は存在したが、視認誘導機材によるもの)、不良な通信機と最後に空挺隊員の精強性である。次に、死生観についてであるが、陸海軍の

特攻隊員の手記と比較をすると一種異様な気がする。この本を読むと疑いもなく純粋に憂国のため、後に続く者のために、喜んで死ぬことができる読み取れるが、これは真実であろうか。陸軍落下傘部隊の母隊、挺進練習部が開設し、挺進集団はその作戦が延期または中止されることが多く、また、作戦地域も変更される。最後の沖繩作戦の時期にいたっては、国民でさえ日本の勝利は、困難ではないかと疑念を抱きだしている。また、海軍の兵士は戦艦大和の沖繩作戦からほとんど確信していた。恐らく沖繩作戦に参加した挺進第1聯隊及び第3独立飛行隊の隊員も少なからず感じ又確信していたに違いない。ならば、他の特攻隊員と異なり、なぜ自らの境遇を惜み、軍首脳部に対する不満が浮上しないのか。もしこの本の記されたとおりであるならば、その考えうる理由として第1挺進集団 第1・第2挺進団として、本人は志願して編入し、訓練を通じた強い絆が築かれた集団(他の特攻は、少数人員によるもの。例:特攻のパイロット、人間魚雷(回天等)の操縦手)であったからではないのか。当初挺身第一聯隊でなく挺進第二聯隊がパレンバンで使用されたことによる挺進第一聯隊の隊員の憤慨、約6カ月の待機・訓練間の精神的重圧の強いはずの状態において脱落者がゼロであった奥山隊等のことから推測できる。

最後に、この先人の勇氣と努力がなければ、現在の我々は、存在しないかもしれない。先ほど記したように、空挺精神においては今も昔も変わりはない。その絆も変わりはない。これだけ強固なものが死をも超越することが証明されている。我々の今後の課題として先人が、最後の段階において特攻的に運用されなければならず、それを又望んだことを教訓に、二度とこのような精神論の運用がされぬようにせねばならない。

第一普通科大隊第一中隊 三等陸尉 海野 晋吾

一、全般

2年前の11月、宮崎県川南にて実施される空挺慰霊祭に参加し、多くの旧陸軍挺進部隊出身の方、また、そのご遺族の方と話をする機会を得、多くの教訓事項を学んだ。今回その思い出を振り返りながら「陸軍挺進部隊外史」を通読し、再度空挺戦史及び空挺隊員の死生観について理解を深めることができた。今回、特に印象に残った事項として3点、「統率の観点から見た空挺作戦の推移」、「空挺隊員の死生観」、「空挺部隊における指揮官の在り方」について所見を述べたいと思う。

二、統率の観点から見た空挺作戦の推移

「作戦に対して余裕のあった時期」特攻が常套手段となってきた時期↓特攻隊員の精神状態といたった超形而上の要素が作戦に影響を及ぼす時期」といった時期的な推移が、はつきりと空挺作戦実施上の統率にも影響している点に興味をもった。「奇襲の利と、撤収困難の不利」、この点を徹底して議論の対象として計画したパレンバン空挺作戦、部隊の撤収収容の見込みの無い状態で決行されたレイテ空挺作戦、全員玉砕を前提として実施された沖繩空挺作戦、この三つの大規模な作戦には時期の移り変わりと共に、部隊運用上の統率の態度に大きな推移がある。後世に生きる者の態度を知っている者として、統率の裏に潜むその要因事項を考察することは重要であると考えらる。

三、空挺隊員の死生観

半年間特攻隊員としての任務を背負い、精神的重圧が膨大であった義烈空挺隊員の手記等を見るに、死生観の確立には心の拠り所が大きな影響を及ぼすことが認識できた。それは軍人としての生い立ち、敵愾心、指揮官としての補職、集団の一員である自覚、継続的な訓練の実施等、人により様々である。つい

最近の自由降下での事故で、空挺隊員としての使命感、責任感、そして死生観について再度見つめ直す機会があったが、これらを確立するためには大きな心の拠り所を得ることが重要なのだと認識できた。

四、空挺部隊における指揮官の在り方

空挺作戦に携わる多くの指揮官が、作戦計画立案段階から、上層部に対し積極的な意見具申し、その発言からいかなる困難な作戦でも任務遂行するという強い意思が伺えた。また、戦開闢、率先陣頭に立ち部隊指揮した指揮官が数多くいる。これは自ら多いに学ぶべき点であった。

五、その他

「陸軍挺進部隊外史」に登場した手記や遺書の多くが空挺館に展示されているというところで、防大3学年時以来となるが、機会を見つけ研修したいと感じた。数年の空挺団勤務と、「陸軍挺進部隊外史」の通読により、新たな発見が得られると確信する。

第一普通科大隊第一中隊 三等陸尉 鷹野 雄

一、全般

群後期教育で空挺館を研修し始めて空挺の歴史を学び13年、空挺部隊の作戦、歴史について深く学ぶことがなく、今回の「陸軍挺進部隊外史」を通読し、大東亜戦争で行われた開戦から終戦に至る空挺作戦の推移、また、当時の指揮官の責任感、死生観について考えらる。

二、開戦当初の空挺作戦

空挺部隊が初めて国民の前に姿を現すこととなった「パレンバン空挺作戦」は、私も知っており、大戦果を収めたものであった。その実行部隊がまだ練成途上であるにもかかわらず、飛行場と精油所の2箇所を同時に奪取した点に興味をもった。当初予定していた計画

では準備日数不足で一見送りとなったが、海軍の都合により延期となり準備日数にも余裕が生まれた。作戦実行までの準備期間を効率的に使い部隊訓練を実施し、明確な目的のもと一兵卒に至るまで企図の徹底がなされたのではないかと思う。このような時期的要因が練成途上の部隊にとって大きく作戦の成功に至る結果になったのではないだろうか。また、この部隊の中から大本営からの指示もあつた、作戦以前から石油工場に対し将校、下士官を研修に出していたこともある。また、陸軍最初の空挺作戦にあたり上層部は極めて慎重に運用を考えていた。また、計画から作戦実施に至る寸前で中止となった、パレンバンへの規模となる「ラシオ空挺作戦」なども、とても慎重に計画されていた。この頃の空挺作戦は綿密な計画のもと、空挺部隊の任務に対する損耗、成果を見積もり、作戦を計画し、実行に移していた。

三、終戦前の空挺作戦

この頃になると連合国により制空権を握られ、海上輸送を行う船団は航空攻撃により毎回壊滅的な打撃をこうむる。海上輸送に頼る島々に展開している日本軍は十分な補給を得られず撤退、玉砕するようになってきた。この戦況を打破すべく私の補給線を確保するために日本軍が考えた作戦は敵の飛行場を制圧することを目的とし、空挺部隊による飛行場の制圧作戦を計画していった。だが、地上部隊との連携も無く降下後、物資の補給、収容の見込みの無い孤立無援となる空挺作戦が実施されていた。これは開戦当初の空挺部隊の運用とは大きく違い、任務に対する損耗、被害は考えず一時的な成果が得られればよく、そのようなことで戦局を変えることができる。と本当に思っていたのだろうか。その後、沖繩空挺作戦が実行され、この時には命の続く限り遊撃戦をやれとの命令であり、この時期になると空挺部隊も特攻部隊と同じような任務を与えられていることになる。

四、責任感・死生観

パレンバン、ラシオ空挺作戦における挺進団長の常に最前線において陣頭指揮を執るうとする姿勢、孤立無援となる状況が分かっていながら志願する中隊長、このような指揮官が空挺部隊には多く存在していたように思う。その中で空挺作戦ではなく、当初から特攻隊として編成された奥山隊、総員136名については約6カ月の間、一人の脱落者もなく任務達成するために沖繩に出撃していった。当初のサイパン攻撃、硫黄島攻撃、沖繩攻撃と目標が3回も変わりその都度、訓練内容が変化する中で特攻という帰る事の無い任務を背負い、見えない重圧に耐え続け日々訓練に励んでいたのだろうと思う。個々の心の強さと部隊の団結力が窺える、最後の出撃前の写真の隊員達の笑顔、何でもそんなに微笑むことができるのか、とてもこれから特攻に行く人達の顔ではないかと思った。けれどもそれができたのはやはり当時の日本人の国家観、軍人としての責任感、指揮官に対する信頼感がうましく重なり合っており、死に対する恐怖を取り除く以上の心の強さ、精神力が身につけていたのではないだろうか。

という観点から読んでみた。戦術的または戦術的な空挺作戦の厳しさや、挺進部隊が置かれていた環境などはまさしく絶句すべき内容であり、旧陸軍が戦った作戦の是非は別として、国の為に戦い抜いた精神力について考えてみたい。

現代において、同じく空挺作戦を主体として行動する第1空挺団は旧軍時代の落下傘部隊または挺進部隊をルーツとして日頃の訓練や精神教育にその戦歴を活かし、隊員の意識が欠ける現代においては、いくら有事を想定してもなかなかその意識レベルを上げる事は難しく、戦術的または戦技として、その部隊の能力を上げる事は可能としても隊員一人一人の資質、特に精神面を鍛え上げ如何なる難局にも対応できる精神力を保たせるのは、至極難しく時間がかかり、かつ、その有効性を証明する手段も方策も確立できないのが現状である。

いざ有事となれば、現状として精神面が整っていないでも未だでも隊員は関係なく戦地に赴くことになり、引き続き戦場においても機会を得て精神教育等により資質向上を図り続ける事は勿論であるが、あとは個人に委ねるまたは信頼するしかないと思われる。

第一普通科大隊第二中隊長

三等陸佐 石本 智恵

数年前にも配布された同様の戦史資料を読み、今回また読みなおしたが、団本部勤務の職にあり、司令部勤務幕僚の観点から読んで前回と違い、今回は部隊を指揮する中隊長として日頃から感じている部隊の実情と照らし合わせ、また、精神教育により各隊員に指導している部隊の伝統について、何らかの参考にと

では旧軍、とくに挺進部隊の隊員はどうやって精神力を鍛え上げ、戦場で戦ったのか。すべての軍人がまったく同じであり、例外が無かったとは思えないが、一般的に人として純粹さを内面を持っていたのではないかと思う。開戦前に日本がおかれていた立場や国際的な関係など、一部の人間しか正確な話には知らなかった苦しみ、情報社会の現代と違い、あらゆる情報も人伝えや知識階級からの言い伝え、または政府からの正否は別とした告示報道が全てで、戦地に駆り出された兵卒の殆どは手探り状態で、聞き耳を立てていたであろう。

政奉還で天皇制度に変わっても国民全体としては礼儀を重んじ、人格を尊重し、人としての威厳を大事にする時代であり、公益という言葉を知らなくても、家族を大事にする事と同様に、国家に尽くす事に何の躊躇もせず見返りを求めないが、後はしっかり面倒を見てくれるという安心感があったのではないかとと思われる。

任務や国防といった崇高な考えほど難しいものではなく、もっと気楽で普通の人の中に、弱いものを助けるのは当然であるといった人がして当たり前の思想を気軽に行動でき、それが当たり前の時代だったのではないかと、また、そういう行為に対して社会全体として助け合う気持ちも認識されていたのではないかと推察する。

公益へ拒否的な考えを持つ人が多い現代と違い、社会全体として奉仕に対する理解が得られるのであれば、当然兵卒の考えの根底にも奉獻に対する気持ちも期待でき、正義、国益や皇室といった言葉の重さ、目の前にある困難を克服して故郷に帰りたいという願望により、任務遂行への心意気と精神の裏づけになったのではないかと思う。

現在の空挺団において、精神力を鍛え上げるための方策として、部隊として中長期的目標を掲げ、その達成に向かい団結し任務完了への気持ちを含めた目標管理、各個人の人生設計も含めた目標管理、純粋に精神涵養のための各種教育などがある。

中隊長は、空挺幹部団が実施した空挺の伝統に関する勉強会を基にして、月に1度の精神教育において「中隊長の伝統とは」を基本に、階級毎または編成毎にテーマを与えて討論させ、日頃から胸に秘めている考えや精神をお互いに話し、また、いろんな意見を参考にしながら伝統について考えさせている。最初の頃は、武道が強い等の目に見える項目のみが列挙されていたが、議論が深まり、それぞれ、の階級地位に応じて考える力が深まってきて、

もっと内面的な要素や精神的な抛り所など、当初の目標であった精神力強化の基礎となる部分の議論もされており、少しずつつではあるが効果を挙げている。

隊員であるまえに、社会人としての通念を持たせ、何事にも純粋な気持ちで取り組めるよう、各個人の特性に応じて指導しつつ、社会が期待している自衛隊、とりわけ空挺団の姿については、最近の情勢変化に伴い増加している任務について説明し、一般常識の涵養にも務めている。

今後は、CRF任務など更に部隊として精進化を目標に、技術的な練度向上の裏づけとして、挺身部隊から引き継ぐべき精神涵養、中隊としては伝統について深く考えさせつつ、任務に全うできる環境を整え、今回の陸軍挺進部隊外史などの歴史戦史の資料などを活用して、隊員一人一人の精神力を鍛え上げ、予期される任務を完遂すべく教育訓練に励みたい。

第一普通科大隊第二中隊 二等陸尉 森田 裕哉

一、全般

私は防衛大学在学の際から空挺団に憧れていた。陸海空の要員選考のときにも空挺団を目標として迷うことなく陸上要員を選んだ。幸いにも幹部候補生の頃から空挺団に所属することができた。幹部候補生学校で「習志野空挺団へ」と呼ばれたときは本当に幸甚で希望に胸を膨らませた。実際に、今、ここの習志野空挺団で約3年勤務して本当にこの部隊に來ることができてよかったと感じている。

そんな私にとってこの「陸軍挺進部隊外史」は本当にありがたい資料である。主要な空挺部隊の歴史をまとめあげた「陸軍挺進部隊外史」は我々の部隊の前身となった挺進部隊の足跡を理解しやすく描かれている。今、実際

に空挺部隊で勤務する空挺隊員として知らなければならぬ歴史であると感じた。

二、印象に残った事項

(1) 挺進部隊の指揮官は立派な人物が多い。挺進部隊の運用を確立した木下中佐や任務に忠実な神原大尉、義烈空挺隊の奥山隊長等、任務が過酷であればあるほど達成するために真に強い部隊でないといけないと思っただけでなく、ときにはすばらしい指揮官に率いられた部隊が実力を遺憾なく發揮して勇敢に戦うことができると思っただけでなく、この資料で知り得た挺進部隊の指揮官に負けない実行力のある指揮官を目指したいと感じた。

(2) 空挺作戦は統合した運用が必要であり降下までの脅威が多い。空挺作戦が成功するためには、挺進部隊と航空隊、その他海上輸送部隊等との綿密な連携が必要だと強く感じた。また、挺進部隊が精進だけでなくどうにもならないことを感じた。ラシオで密雲により航空機の進入が不可能になり降下できなかった。また、レイテ湾への進入の際は対空砲火がすさまじいことにより降下場に届く前に墜落させられた。空母「雲竜」に搭乗した部隊は比島に向かう途中に台湾近海で撃沈され挺進部隊としての働きができなかった。我々にも当てはまることであり、十分な働きをするためには当たり前であるが、航空優勢や各輸送手段、降着してから行動の統制が十分に必要であると感じた。

(3) 自分たちの命を捨てても挽回できる状況でないときに「心の抛りどころ」として、後に続く者を信じて、後に続く者を奮起させることを見出した。この言葉に、日本を本当に誇りに思い、信じることに迷いがな

いと感じた。自分たちも忘れがちな重要な事を知ることができた。また、死ぬことが

決まっている中でも淡々と訓練を続けてその日が来るのを待てる精神的な強さを感じた。どんな状況におかれても動じない精神的な強さも軍人として必要な要素であると感じた。

三、教訓事項

(1) 戦史を深く勉強する。

この挺進部隊外史を読んで改めて戦史の重要性和戦史を読む上で想像力が重要であると実感した。常に戦史資料に触れて勉強し続けなければならぬと感じた。今回は特に空挺戦史に限定して触れることができた。そのように興味ある部分から勉強を始めたいと思った。

(2) 年代認識を持つ。

戦史において、いつ起こった事項なのか、同じ時期やその前後に何があったのかを整理して知っておく必要があると感じた。

四、終わりに

この「陸軍挺進部隊外史」を読んで、空挺団で幹部として勤務する上で必要な事項が少し理解できた。自分のなかで空挺隊員としての自覚をしっかりと持ち、どんな訓練にも積極的に臨みたい。また、空挺部隊の指揮官としていられるときに大事にして、この資料で名前があった指揮官のような、隊員が遺憾なくその実力を発揮できるように指揮官になれるように努力したいと感じた。

最後に、空挺部隊に勤務できることを誇りとし、英霊の方たちの信じた後に続く者として日本をしっかりと守りたいと思う。

第一普通科大隊第二中隊 二等陸尉 布施 英彰

一、はじめに

本冊子は、筆者が「有史以来稀にみる激動の数年に得た体験」を「後継者」である我々に「遺そう」としたものである。つまり、我々

は本冊子を通して、先達である筆者が得たこと、感じたことを共有し、そこから教訓事項を発見することで、じ後の資としなければならぬ。言い換えると、本冊子は筆者が「鬼籍に入ってしまった」「皇軍」の「一員」だった者から預かった「タスキ」であり、我々は「タスキ」を「後継者」として責任を持って受け取り、次世代につないでいかなければならないのである。以下では、筆者が遺した体験の一端から得られる教訓事項を抽出し、じ後の成長の資としたいと思う。

二、教訓事項

(1)「潔く最後を飾りたい」という「統率姿勢」
筆者は「統率の姿勢」日本陸軍四年間の変わり方」において、パレンバン空挺作戦、ラシオ空挺作戦、ベナベナ・ハーゲン空挺作戦、レイテ空挺作戦、沖繩空挺作戦を取り上げ、前三つの作戦については「正常な統率姿勢」であったが、レイテ作戦では「特攻という異常な戦法を採用している統率姿勢があった」とし、沖繩空挺作戦に至っては「特攻作戦」であり「危険度から見れば比較の対象外」であるとしている。

ここで、私が注目したいのは「正常な統率姿勢」とはどういうものをさしているのかである。この問いに対し、筆者は沖繩空挺作戦時の菅原軍司令官の「特攻隊に指定して、長く待機させるのは、情において忍び得ない」という直語を用いて、「超形而上のことが元来形而下であるべき部隊運用に介入していることは、正常ではない」としている。つまり、「正常な統率姿勢」とは「超形而上のこと」すなわち「潔く最後を飾りたい」という、何か今の世としては前時代的「なものが介在しない統率姿勢である」といえる。

筆者は、レイテ空挺作戦や沖繩空挺作戦時に「実行を決意する際」「予想される犠牲」よりも「超形而上のこと」が大きく作用したことを「異常」としている。

そこから、得られる教訓事項として、「空挺作戦は失敗した場合に撤収が難しい。その危険性を使う側即ち上級指揮官」がしっかりと受け止め部隊を運用していく必要があるだろう。我々、部隊を運用する側の立場に立つであろう者にとって、「戦うからには、勝利を得るために犠牲を払うのは当然」であるが、その「犠牲」こそが作戦実行の決意に大きく作用するのであり、そのことを決して忘れてはならないのである。

(2) 特攻精神

筆者は、上記で示した通り、部隊を運用する際は「超形而上のこと」よりも、その際に生じる「犠牲」に重きをおいて作戦の実行を決意するよう述べているが、反面、この「超形而上のこと」すなわち「特攻精神」についても一概に否定しているとは見受けられないように思われる。次に、私はこの「特攻精神」について考察したいと思う。

「特攻精神」とは、筆者の言葉を借りるならば「生還の見込みの全くない任務に、進んで就こう」とする精神である。具体的にいうと、パレンバン空挺作戦時の徳永中尉やレイテ空挺作戦時、「最後は討死」であることを理解しつつ「俺の中隊を使ってくれ、と名乗り出」たタクロバン特攻隊長榊原達哉大尉、同作戦において司令部のものではないにもかかわらず率先して敵に当たりにいった稲本少佐等々の精神がそれにあたるだろう。しかし、彼らは何故このような「特攻精神」を発揮し得たのだろうか。

これに対し、筆者は「義烈空挺隊にみる特攻隊員の死生観」で彼らの心の拠りどころ、即ち「死生観」について述べているが、「形而下のそれ」と「形而上のもの」とがあるとしている。前者は、具体的には隊長としての「責任感」や「サイパンの土になっても米鬼を咬み殺してくる」という敵愾心、奥山隊長の人間の魅力とそこに生まれる

た中隊長に対する信頼感等であり、後者については、筆者は「達観の境地」として、「美意識」と「価値観」とに分けて考察している。「美意識」とは「己の死を美しいとみる心情」であり、これは「いくつつかの遺書」がそれを「証明している」としている。他方、「価値観」とは「自分の死が如何なる価値を持つかという、理論的な、哲学的な死生観」であるとしているが、私はこの「価値観」について注目したい。なぜなら、「後に続く者」を信じ、後に続く者を奮起させることに、自分の死の価値を見出し「たこの死生観こそ筆者の本冊子への思いである」と考えるからである。

筆者は、現代の個人主義的思想の浸透した社会を憂えているのではないだろうか。「自分さえよければいい」という現代の風潮を危惧し、本冊子をもって、筆者の「後継者」である我々空挺隊員にだけはそうならないよう、本冊子を遺そうしたのである。私は、本冊子を一読し、どうしても理解できないことがあった。それは、筆者が当初「特攻精神」という「形而上」のことに對して「異常」であるとしながらも、その「特攻精神」に對して「概に否定しているわけではなく、むしろそれを現代の我々に伝えようとしているように思えたからである。

我々は決して一人で生きていくのではない。お互い支えあって生きていくのであるが、さらに現代社会は先達者の「特攻精神」の上に成り立っているのである。

「事に臨んで危険を顧みず」という部分に「特攻精神」の片鱗を感じることができ、将来、事に臨んだときこの「特攻精神」を発揮したいと思う。

三、結言

戦後60年、わが国は戦争を全く経験することがなかった。これは、真に幸せなことである。しかし、その反面、「後に続く者」を信じ、

後に続く者を奮起させることに、自分の死の価値を見出した」先達者たちの「特攻精神」をどこかに置き忘れてはいないだろうか。筆者から受け継いだこの「タスキ」を後世につなげる、これは本冊子を手にした者の任務であると私は思う。

第一普通科大隊第二中隊 一等陸尉 入江 一博

一、全般

空挺作戦は航空優勢の獲得及び航空・氣象条件等により、その実施には困難が伴い、その成功例は少ない。また、現在、大規模な空挺作戦を行う蓋然性も少なくなってきた。にもかかわらず、現在、各国の軍隊は空挺部隊を有している。その理由は将来の運用の可能性のみならず、常に実戦に即応できる部隊を保持するためではないだろうか。今回「陸軍挺進部隊外史」を読んで陸軍挺進部隊の軌跡を通じ、大東亜戦争における空挺作戦の様相を知り、空挺部隊・隊員として何を参考とし、何を練成すればよいか、また空挺幹部としてどのように自分を鍛え、部隊を鍛えていくべきかを考えさせられた。

二、大東亜戦争における日本陸軍の空挺作戦の特色

日本陸軍の空挺作戦は、大東亜戦争の縮図と言っても過言ではない。昭和17年から毎年のように計画・実施されたが、戦況が厳しくなるにつれ空挺作戦自体が次第に短期的視野で立案され、成功の見込みの少ない博打的な運用に変化していった。

空挺部隊は敵を奇襲することができる反面、火力及び兵站支援能力は限定され、空中機動間及び降着直後の脆弱性を有する。このためパレンバン空挺作戦においては、戦闘機隊、軽爆撃機隊による航空優勢下に奇襲し、油田地域を確保した。これ以降もラシオ空挺作

戦を始め、度々空挺作戦については提案されたが、作戦の必要性、同じ戦法の回避等慎重に検討され、真に必要な目標に對してのみ空挺作戦を行うという姿勢が見られた。しかし、攻勢終末点を迎え状況は一変する。各作戦地域において制空権を失いつつある日本にとつて、航空優勢下の空挺作戦を実施する余裕はなく、次第に運用が作戦目的を重視する姿勢から一か八かの特攻的戦法へと傾倒していった。これがレイテ空挺作戦であり、沖繩空挺作戦であった。

だが、ここで特筆すべきは隊員の任務に對する気概、死生観ではないかと思う。特攻的性質を帯びるようになったレイテ以降の空挺作戦は、生還の可能性が低いにもかかわらず、隊員は作戦に参加することを希望し、また、義烈空挺隊においては、編成から実施まで作戦の変更・延期により約6カ月間、常に死と隣り合わせの状況においてもなお高い士気を保持し得たのは、挺進隊員としての誇りと上下一体となった隊員相互の強い信頼感が存在したからであると思う。

三、空挺部隊・隊員として練成すべきこと、参考とする事項

パレンバン空挺作戦やレイテ空挺作戦のみならず、連合軍によるノルマンディ上陸作戦に連携した空挺作戦にわかるように、降下後の部隊の掌握は常に困難を極める。このため分隊・個人に至っても行動の準拠を明確にするとともに、次級者を明示することを訓練においても習慣付け、どんな状況においても部隊行動が停止することのないようにする必要があり。また、個人の高い能力の保持は柔軟性を要求される空挺作戦において必須である。

空挺作戦は常に計画通り発動されるとは限らない。氣象・航空優勢のみならず上級部隊の戦機の看破によって左右される。また、特攻的戦法に傾倒していったレイテ以降の作戦については、常にいつ死ぬかわからない状態を余儀なくされた。この間常に平常心を保ち

続けられたのは、彼らの死生観が確立されてきたからであり、個人としてのそれはもとより、部隊内の相互の信頼感・連帯感により、死の恐怖を克服していったのであろう。

現在の空挺隊員として自分の死生観を考えると、不十分であったことに気付かされる。空挺隊員は有事のみならず平時においても死と隣り合わせの訓練を実施している。また、死生観は死に直面した場において確立されるものでない。そのため常に死を意識し、どのように日々生きていくかを考えなければならぬ。平時において死を意識し、有事において死を意識しない(恐れぬ)ことが重要である。

四、空挺幹部としていかに自分を鍛え、部隊を鍛えるか。

陸軍挺進部隊の軌跡を通じてわかるように、空挺部隊は任務の困難性、戦機に応じた運用による発動時期の不明確性から常に物心両面にわたり精強性を求めらる。このため、空挺団の幹部として任務に耐えうる体力・気力を養うのは当然のこと、上級部隊指揮官の企図、任務の特性を理解し、局地的な戦機を看破しうる戦術能力、少ない物的戦闘力を効率的に運用し戦勝を獲得するための指揮能力・統率力を涵養することが必要である。また、部隊に対しては降着後の混乱を局限し、戦力発揮を迅速にするため、各級部隊に不測事態対処能力を向上させることが必要である。そのため訓練において各隊員に至るまで自ら考え行動させる癖をつけるように訓練を計画・実施しなければならぬ。

五、最後に

60年前の陸軍挺進部隊の軌跡が全て現代に通用するとは限らないが、その心は普遍であると思う。史実を読み理解することは誰でもできる。しかし、これらを我がことのように捉え今後の糧とできるのは我々空挺隊員を除いて他にはない。この貴重な教訓を活かし、いかなる時期・状況においても対応する部隊、

隊員を作ることが空挺の伝統の継承になるのではないだろうか。

第一普通科大隊第三中隊 一等陸尉 酒井 学

一、全般

思い返せば、「陸軍挺進部隊外史」第一版が発行された当初、陸軍戦史の勉強のためと思ひ、ただ漫然と眺めるように読んでいた。今回、機会を得て改めて読み返してみると、その文章の中に初級幹部時代には発見することができなかった幾つもの教訓が隠されていることを発見した。

本冊子は、空挺幹部として必要な部隊指揮・運用に必要なエッセンスが凝縮された読み物であるとともに、空挺精神を後世に伝えるための貴重なノンフィクション小説でもあると思う。以下、本冊子から引用させて頂きながら、戦史から学んだ陸軍挺進(空挺)部隊の運用に関し考察を加えると共に、我々、空挺団幹部に必要な空挺精神とは何かについて所見を述べる。

二、陸軍挺進部隊の歴史をひもといて

大東亜戦争において有名な挺進作戦といえ「パレンバン作戦(蘭印)」や「レイテ作戦(フィリピン)」「義勇突挺隊(沖縄)」であり、それらに関する書物は様々なものが出ているため、知識をおぼろげながらもは持っている。しかしながら、本冊子を通読することにより、それ以外にも「ラシオ空挺作戦(ビルマ)」や「ペナバナ・ハーゲン空挺作戦(ニューギニア)」といった、計画まではされたものの実行されなかった(できなかった)作戦が存在したことを初めて知った。

パレンバン作戦は開戦後間もない昭和17年(昭和)2月14日に実施され、空挺作戦としては数少ない成功例の一つである。蘭印の製油所を無傷で奪取することを目的としたこの

作戦は、昭和15年に創設されたばかりの第一挺進団により2つある製油所のうちの1つを無傷で、もう1つを軽易な損傷だけで奪取するという大きな戦果を挙げることができた。

この成功は、創設されたばかりの部隊としては異例の成果であり、部隊の将兵の高い士気が成功の一因であるのももちろんだが、その陰に第一挺進団司令部による南方軍司令部に対する降下目標や実施時期に対する適切な意見申があったことが知られている。

また、ラシオ空挺作戦は、ビルマ侵攻作戦の支隊の一つとして計画されたものであり、「挺進団の将兵は、早めに降下して敵を一手に引き受けようと、飛行隊の集結完了次第決行ということで、4月26日という案を主張した。ところが、(作戦を統括する)第5飛行集団では、ラシオ方向に退却中の敵は、優良装備の2個師団、あるいは4個師団という情報を得て慎重になり、挺進団の主張を押さえ、29日と決定した。結局、4月29日、トングー飛行場を発進し、第1次降下部隊は目標の手前10分くらいのところまで航進したが、密雲に閉ざされ進入できずに引き返し、作戦打ち切りとなった。もし、順調に降下できた場合、(地上部隊である)第56師団のラシオ突入と殆ど同じ時刻に降下という奇妙な結果になった筈である」とある。

もしこの作戦が実施されていれば、空挺部隊からの作戦目的を考慮した意見申が認められず、作戦の目的と目標の乖離が甚だしい戦例として後々語り継がれたであろう。

三、陸軍挺進部隊の運用に関する考察

第2項で引用した史実、特にラシオ空挺作戦から明らかなのは、空挺作戦は常に航空部隊との統合作戦により実施される作戦であるため、空挺作戦立案にあたり、空挺部隊司令部として航空運用の可否に関する情報収集及び行動方針の策定が不可欠であるということである。また、それに加え、空挺作戦は主攻である地上部隊との連携が重要な作戦であ

るにもかかわらず、その連携を疎かにした空挺作戦は意味がないということも、当然ではあるが挙げられる。

すなわち、空挺作戦の立案を飛行機の運用を主とする航空部隊が実施するというのは疑問視されて然るべきであろう。この場合、気象条件に応じた航空機の運用と共に空挺部隊の特性(降下可能気象条件)等をも熟知した指揮官または幕僚が、全般の作戦計画を見極めたうえで空挺作戦を計画することこそが、空挺部隊を有効に活用するための必要最低限の条件であるということが考察できるのである。

従来から言われていることではあるが、空挺作戦は失敗した場合に撤収が難しい作戦である。それだけに、運用については空挺作戦の目的とするところを明確に見極め、その実施の可否を含め細心の注意が払われるべきである。ただ、残念ながら旧陸軍の司令部では、それが現地の航空部隊司令部(司令部)等に一任されてしまう場合が多かったようである。平成18年度末には中央即応集団が立ち上がり、空挺団はその隷下に編合されることとなるが、これは大東亜戦争における第一挺進団の運用に鑑みると、空挺団にとっては望ましい形になったといえるだろう。なぜならば、ある一つの正面の戦況の変化のみに振り回されることなく、作戦目等全般を見通した上で、空挺部隊の運用が決定されることになるであろうし、その運用に関して、空挺部隊司令部としての意見がより良く反映される形になると思われるからである。

四、我々に必要な空挺精神とは

空挺「隊員」として必要な心得(空挺精神)は、よく言われているように「自律と掌握下に入る着意」である。これは、空挺隊員は有事の際独立して行動することが少なくない中で、平素から自律の良習を養うという観点からもっともな話である。それに加えて、我々空挺「幹部」に必要とされる精神は、「変革

意識」が最も重要なのではないかと考える。第二、第三項で戦例として取り上げたように、戦場の様相は常に変化し一定ではない。昨日、白(優勢)だったものが今日には黒(劣勢)になっていくことなど常態である。そのようなか中で、既存の編成や手法等に固執し、状況の変化に合わせて臨機応変に対応できないようでは、特に戦局の変化が早いといわれる空挺作戦を実行する原動力となる幹部は務まらない。

また、イラク派遣等の体験を通じ、不意に発生する不測事態に対応する能力も、我々幹部が実任務で必要とされる能力であると感じた。我々は平素から、不測事態に対応する訓練を積み重ねるとともに、「不測」事態を「予測」事態に変えるよう、あらゆる英知を搾って作戦計画の企画立案に臨む必要があるだろう。

五、最後に

本冊子を編纂し、我々に空挺戦史に関する貴重な教訓に鑑みる機会を与えて下さった田中賢一氏に感謝するとともに、所見を発表する貴重な機会を与えてくださった空挺団本部に、この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

第一普通科大隊第三中隊

二等陸尉 建部 壮

一、全般
前回『陸軍挺進部隊外史』を読んだ際には、統率の姿勢に関する点が印象に残ったが、改めて読み返してみても前回とはまた異なる点が印象に残った。

『陸軍挺進部隊外史』は、日本陸軍が立案したパレンバン、ラシオ、ベナベナ・ハーゲン、レイテ及び沖繩の各空挺作戦の経緯及びその性格の変遷について、それぞれを統率及び「特攻」性の視点から概説されており、大

東亜戦史を学ぶ上で大変参考になった。筆者は、創立当初は極めて慎重に運用された空挺(挺進)部隊が、レイテ戦を一つの大きな転換点として、生還を初めから期さない特攻的性格を強く持つようになったと指摘しており、また、その統率の姿勢を問題視している。その問題意識に沿って、特に「統率」及び「死生観」の両面を中心に印象に残った事項を挙げるとともに、帝国陸軍の体質的な問題と感じた点について所見を述べる。

二、特に印象に残った事項

(1) 統率の姿勢について
筆者は、レイテ作戦を転機として空挺作戦が帯びてきた「特攻」性を指摘し、またその統率の姿勢について問題としている。特に、サイパン戦に備えて指定された特攻部隊「義烈空挺隊」に関して、当初は本土決戦に備えて温存する計画であったところを、「特攻隊に指定して長く待機させるのは忍びない」という感情も作用している。沖繩で運用したという事例を紹介している。この点について筆者は「超形而上のことが、元来形而下であるべき部隊運用に介入していることは、正常ではない」(10頁)として問題視している。

「手柄を立てさせてやりたい」「汚名返上の機会を与えてやりたい」といった感情は、上級・下級の指揮官同士に人間関係が存在する以上、多少は部隊運用に介入するのが常であり、完全に排除しうるものでもないと思われる。しかし、義烈空挺隊の例のように感情が戦術的妥当性を超えて運用に作用するようなことがあってはならない。この点については前回読んだ際に感じたことと共通である。

(2) 敵愾心を克服した統率について
筆者は「義烈空挺隊にみる特攻隊員の死生観」の稿で、義烈空挺隊の副隊長格であった渡部大尉を挙げて、「この人は闘志の塊のような男だった。心を支えているのは、

敵愾心ではなかっただろうか」(47頁)と述べられている。この一方で、これほどの激しい敵愾心をもって戦闘を遂行した挺進部隊が、降伏の詔勅を受けるや一転、従容として武装解除に応じた点に驚かされた。

イラクでは、フセイン政権が打倒されて戦争が終結した後も新政府及び駐留多国籍軍への抵抗が続けられている。わが国の戊辰戦争においても、鳥羽・伏見の緒戦後、将軍慶喜が全面的に恭順の姿勢を示したにもかかわらず、その後約2年にわたり佐幕派を中心とする徹底抗戦が続けられた。これらの例を見るまでもなく、交戦相手に対して激しい敵愾心を抱くほど、それを收拾・克服するのは困難を極めるものであろう。

しかし、終戦に際して日本陸軍は、鬼畜と憎んだ米軍に対する態度を奇跡的と言えろほどに転換させた。それは、戦意の一つの根源たる敵愾心をも克服した究極の統率と言えるのではないか。そこに、日本陸軍の統率の根源たる天皇の権威を窺い知ることができる。

占領軍側も、全軍・全国民に対してそこまで態度を転換させうる天皇の権威に恐れを抱き、それが占領政策の目玉ともいえた天皇制解体に手をつなかなかった原因となつたのは疑いようもない。また、占領下に当然予想された大きな混乱や内紛を防ぎ、戦後の奇跡的な国力回復を可能にしたとも言える。その意に反して出撃しないうまま終戦を迎えた部隊の従容とした態度もまた、玉砕していった部隊と同様に日本の将来のためのかげがえのない尽力であったように思う。

(3) 挺進部隊の死生観について

陸軍幼年学校出身の奥山道郎大尉の死生観に関する記述が特に印象に残った。生還を期さない特攻隊要員に指定されてから半年の間、具体的な目標が明らかにならな

特攻隊員として出撃・戦死した。筆者は、奥山大尉の強靱な精神力の根源として、陸軍幼年学校という出自に対する強烈な矜持を挙げている。我が国の武士道や西欧の騎士道に見られるように、自らの矜持を命より重んずる態度は、洋の東西を問わず普遍的に見られるが、そこに共通するのは、自らは一般とは格別の誇り高い身分であるという差別化意識である。「栄華の巷低く見て」というようなかつてのエリート意識が排除される傾向にある現代において、自衛隊全体はもとより、防衛大学校、幹部候補生学校ですら組織としてそこまでの差別化意識はない。自衛隊では、どのような死生観を持つか、あるいは死生観を確立するかしないかの点からすでに、自衛官個人にゆだねられているのが現状であろう。

(4) 員数主義の体質について

昨年末に公開された映画「硫黄島からの手紙」で、硫黄島戦について考える機会があり、それと共通した感想を覚えた。

「どうせ死ぬのになぜ地獄のような環境下で洞窟陣地を掘らねばならないのか。死よりも苦しい生を生きるより、いっそ華々しく死なせてほしい」と願う将兵に対し、栗林中将は「我々がここで1日長く持ちこたえれば、敵の本土への上陸を1日遅らせることができる」と叱咤して、米軍の予想をはるかに上回る長期間を持続したとされる。陸上自衛官として、栗林中将の統率と小笠原兵団の敢闘に、敬服の念を覚えずにはいられない。

しかしながら、そこにやり場のない憤りも覚える。初めから生還を期したい作戦に将兵を投入する以上、軍全体の運用に当たる者には、戦局を大きく変えるだけの成算がなければならぬはずである。しかし、当時の陸軍首脳に、当初の米軍の目算では5日で陥落すると思われた硫黄島が36日持久したことによって、戦局を挽回でき、あ

るいは有利に終戦に持ち込めるだけの秘策でもあったのだろうか。あるいは最低でも、2万人の将兵の命に見合うだけの本土防衛の準備を36日の間に整えようとしたのだろうか。そんなやるかたない思いを抱きつつこの映画を観た。

『陸軍挺進部隊外史』を読んで、そのとき覚えた不条理感と共通するものが印象に残った。大東亜戦争末期の諸戦、特に硫黄島戦や沖繩戦を見るとき、陸軍として、「防ぎきれないことはわかっていて、硫黄島や沖繩を何もせずみすみ敵に渡すわけにはいかない」という体面優先の体質、換言すれば広義の「員数主義」が見て取れるように思われる。極論すれば、硫黄島や沖繩の失陥を前に、軍が一応努力を指向したことの計数的な証拠として、玉砕する部隊もまた員数的に必要とされた、と言える面があるのではないだろうか。

沖繩空挺作戦に至っては、爆撃機による特攻を容易にするため、敵の飛行場に対して挺進部隊をもって特攻するという「特攻のための特攻」の様相を呈している。そこに、戦局打開の見込みがあったとは到底思われない。「後世のわれわれは総ての結末を知っている。その特権を持って、当時空挺作戦の実施を決意した人を批判するのは苛酷なことである」(9頁)とは筆者も述べているところであるが、このような「特攻のための特攻」はいかに弁護しようとも決して批判を免れない運用であり、筆者の指摘するように常軌を逸していたように思われる。

員数や体裁が人命に優先するという異常な事態は、現在においても、必ずしも遠い過去の遺物とは断言できないように思う。比較するのめや不謹慎に感じられるが、例えば発見の見込みのない亡失物品を、「全力で探したけど残念ながら見つからなかった」という体裁を整えるために大量の

貴重な隊力と訓練時間を割いて搜索するよ
うな、我が自衛隊にありがちな姿勢も、人
命の員数主義と究極において共通してはい
ないだろうか。

三、結言

華々しい戦果を挙げたパレンバンに始まり、あまりにも大きな犠牲を払ったレイテ及び沖繩空挺作戦に至るまで、空挺作戦の性格の変遷は、帝国陸軍の統率の特色、抱えていた問題点の双方を浮き彫りにする上で非常に示唆に富んでいる。そしてそこで浮き彫りになる体質的な問題は、現代の自衛隊も、潜在的にそのまま旧軍から受け継いでいる可能性があることを決して忘れてはならないと感じた。初級幹部から中堅幹部への過渡期である今、改めて『陸軍挺進部隊外史』に触れたことは、じ後の幹部自衛官としての勤務の上で大きな資になると確信している。

第一普通科大隊第三中隊
三等陸尉 壹岐 忠久

一、全般

今回、初めて、この陸軍挺進部隊外史を読ませてもらい、挺進部隊の歴史、各種空挺作戦の概要を理解することができたとともに、戦史を学ぶ重要性を再認識することができた。又、各種戦いにおける指揮官の行動から、空挺幹部として、どうあるべきか、任務達成のため、部下に対してどのような訓練・教育を実施し、どういった隊員を育成していたかなければならないか、強く考えさせられた。

二、特に印象に残った事項

- (1) 空挺幹部の資質
空挺幹部として最も必要とされる資質は、死生観・責任感であると感じた。この資質を堅持していれば、如何なる任務も遂行できると考える。そして、そのような幹部・人間は、人望を集めることができ、自ずと

部下はついてくる。義烈空挺隊の奥山隊長がその中の一人である。奥山隊長は、特攻隊に指定されてから6カ月もの間、自分の隊を訓練し続け、一人の脱落者も出していない。この間の、ただならぬ精神的重圧をどのように撥ね退け、隊員に対し、どのような教育を実施していたのか、空挺幹部として、考え続けていかなければならない課題であると感じた。

(2) 命令企図の徹底

現在の訓練に欠けており、私が重要と考える事項は、指揮の継承・末端までの命令企図の徹底であると考ええる。我々空挺隊員は、一定の期間、敵地において独立して行動する任務を有する。戦史からも、各作戦において、降下後の部隊の掌握は、非常に困難であると考えられる。掌握できない隊員は戦死者だけではないと思う。自分の任務を理解していない、現在地を標定できていないのが原因で掌握し入れない隊員もいたと考える。これは、小隊長として経験したことを踏まえたうえでの意見になる。空挺作戦において、指揮官が降下中・集結中に戦死することもあり得る。我々は、任務達成のため、あらゆる状況を想定して、常に、訓練に取り組んでいかなければならない。そして、末端の隊員にまで命令企図を徹底する必要があると考える。

(3) 強靱な精神力の涵養

隊員に対し、戦争という究極の精神状態におくても任務を遂行できる精神力を養っておく必要があると考える。戦争を経験していない自衛隊にとって非常に難しい問題である。幹部として必要であると、先に述べたが、誰一人その状況を体験した者はいない。隊員全員に戦史を学べ、死生観を養え、といっても今の時代はとっしとないであろう。幹部自ら戦史を学び、精神教育・機会教育により、隊員に戦争の悲惨さ、起り得る状況を伝え、その中でも任務を遂行

するためには、常に、どうすべきであるかを、隊員自ら考えさせておく必要があると考える。

三、結言

我々自衛官は、将来の戦いに資するため、過去の戦いの形態・様相、戦場の実相を認識し、追体験し又、隊員に対しては、それを認識させ、日頃から精神要素を涵養させていかなければ、任務を達成することはできない。今回の外史を読み、戦史を学ぶ重要性を改めて認識することができた。そして、空挺幹部として、空挺戦史を学ぶことは当然ながら、多くの戦史から教訓等を学び、部隊訓練に反映し、精強な部隊を育成していかなければならないと感じた。

最後になるが、私の実家は川南町から車で2時間ほどの所にある。恥ずかしながら、川南護国神社にはまだ一度も訪れたことがない。空挺隊員として又、幹部として、帰省の際は参拝に行きたい。

第一普通科大隊迫撃砲中隊長
一等陸尉 雲井 昭充

「挺進部隊の体験(歴史)を、我々の後継者である自衛隊空挺隊員に遺す」という冒頭から始まる「陸軍挺進部隊外史」を通読して、まず私が感じたことは「戦死者は何を託したかったのか」ということであり、次に考えたのは「今、空挺部隊・空挺隊員としてあるべき姿とは何なのか」ということである。この2点について私なりの所見を述べてみたい。まず、1点目の「戦死者は何を託したかったのか」であるが「挺進部隊・挺進隊員の精神」であると考えられる。この精神とは「自ら自分の身を投げ出して任務を達成する気構え」である。外史から感じられたのは自分の命より任務を優先させる挺進隊員の死生観である。これは日本軍が開戦初期の優勢な状況下から

見受けられ、大戦末期の絶望的な状況下で陥った玉碎精神とは一線を画するものであり、自衛隊の服務の宣誓である「事に臨んでは…」の部分の強度を意識したものである。また、これに付言して、特攻精神に陥り易い挺進部隊を統率する上で、指揮官及び幕僚には合理的な思考と決心に至る緻密な見積もりが重要であり、感情論に傾倒した決心に対する戒めが随所に示唆されている。

次に、2点目の「今、空挺部隊・空挺隊員としてあるべき姿とは何なのか」というのが、前述のような伝統を遡って考えるという観点から精神要素に絞って述べてみたい。今も昔も軍隊の精神とはその本質である「任務の完遂」に必要な資質から醸成されるべきものである。そして空挺部隊の最重要任務とは国土防衛戦における空挺作戦（又は独立的に運用される作戦）＝犠牲が少なくない作戦の遂行であり、その為に空挺隊員にとっては死生観の確立とその作戦で生き残る術を身につける常在戦場の意識が必要である。このことが隊員に浸透し、部隊行動に現れている姿こそが空挺部隊・空挺隊員としてあるべき姿であり、第一空挺団の目指す姿であると考えられる。これは大戦時の挺進隊の姿と本質的には同様であり、義烈空挺隊においては、戦時という環境下で当時の日本人の国家観及び責任感を根柢として中隊長に対する信頼感から自然にこの土壌が形成された」と記述されている。現在の空挺団と比較すると戦場で生き残る術の重要性については、「戦士としての基本基礎動作の確行」という金科玉条によって隊員には刷り込まれているし、その基本基礎動作が何故必要なのかということも隊員はよく理解している。ただし、例えば、警戒等は厳しくない状況下ではしっかり実施できるが、過酷な連続状況下での訓練になるとフリだけになってしまふ者が散見されるという形骸的な部分が見受けられる。これはリアルに死を意識（生き残るといふこと）して実施しているか、個

人差によるものであることが原因であると考える。訓練でできないことは実戦でもできないことから、常在戦場の意識の徹底、そして最終的には死生観の確立が我々にとって真に重要な課題である。

しかし、現代に生きる我々が戦時と同じように自然に戦場意識と死生観を確立できるかということそれはできないと思う。何故なら大戦時と違う現代の特質として次の3点が挙げられる。①戦後50年以上日本が1度も戦争を経験していないこと②国家（又は天皇等）に対する忠誠心及び社会的な名誉心の低下、「自分らしい生き方」又は「個」を大事にする現代人の特徴③「日本軍は米軍に精神力で勝負を挑み、物量によって完敗し多大な犠牲を払った」という認識（トラウマ）による旧軍精神主義に対する嫌悪感である。

つまり、これらの状況の特質を踏まえて作戦的に戦場意識と死生観を醸成されるように仕向ける必要がある。そして、作戦的に仕向けるのは誰かということ、それは幹部の役割であり特に部隊団結の核心である指揮官の役割が大である。隊員の指揮官に対する信頼が厚ければ厚いほど「俺は戦士としてこうありたい」という姿勢が大きな効果を発揮するはずである。一方、昨今の空挺団はイラク復興支援任務等に代表される実任務が即時に付与される立場であり、隊員の職務意識は決して低くない。また、米軍等との交流や情報化社会の発達により実戦を経験した外国軍隊の教訓（精神的なものも含む）が誰にでも簡単に手に入る。例えば、状況に応じて精神状態を変化させる「マインドセット」のような言葉も多くの隊員が意識している。良いと思つたものを吸収することは悪いことではないが、我々の精神は我々自身の力で確立しなければ決して過酷な状況下での心の拠所つまり本物の精神には成りえない。現在の外国軍隊の情報から得られる生死の感覚及び戦場意識の流行と一線を画して、我々幹部は、自分自身の頭

で考えた戦士としての信念を保有しなければならぬ。そしてその戦士としての信念こそが、日々の訓練や実任務等を媒介として戦場意識及び死生観に通じていくのだと思う。

現在、私自身、幹部としていかに戦場意識と死生観を部隊に植えつけていくかについての有効な具体策は持ち合わせていないが、間違いなく言えることは、私自身が揺るぎ無い明確な戦場意識と死生観を確立すること、そしてそれを部下に感化教導するに足りうる実力と人格を磨くことである。このように考えると、幹部特に空挺幹部としてのの人生は、即応性を保持しつつ将来起こり得る有事に備えるの現状認識と修養の連続である。

**第一普通科大隊迫撃砲中隊
一等陸尉 上田 康生**

一、全般

「陸軍挺進部隊外史」を通読し、日本軍の空挺作戦がパレンバン空挺作戦や義烈空挺隊以外にもあったこと、空挺作戦の真相がどのようなものか、挺進部隊の兵士を通して当時の兵士の死生観はどのようなものであったかを知り空挺幹部としての識能を高めることができた。

二、特に印象に残った事項

(1) 多くの空挺作戦の存在
空挺作戦が計5回計画され内3回実施されたことを知ると共に、パレンバン空挺作戦のように戦略目標に対する使用が最も効果的であることを知ることができた。

(2) 地上部隊との提携を前提とした初期の空挺作戦

挺進部隊は対機甲戦闘能力が低く地上部隊との提携を前提としており、旧陸軍の挺進部隊＝特攻等の無謀な作戦という先入観が誤りである事を反省すると共に現在の空挺作戦もいざんとし火力戦闘能力が低い

という弱点を克服できていないと感じた。

三、修得出来た事項

(1) 降下後の集結の困難
敵対空射撃からの回避、未知の土地、敵の存在、敵機による射撃等で降下後集結で相当の時間がかかること、場合によっては飛行機が撃墜されることもあることから、独立して戦闘発揮できる事に着意して搭乗編成を考える必要性が理解できた。

(2) 不十分な幕僚活動

ア 並行性
ランコ空挺作戦（退路遮断）において、提携地上部隊と調整せず地上部隊のランコ突入とランコ降下時刻がほぼ同じであり、幕僚活動における並行性の重要性を理解できた。

イ 幕僚の多忙（怠慢）による無謀な作戦の立案

レイテ空挺作戦においては、地上戦闘の状況の不明、戦況の不明、地誌情報不十分において、幕僚を派遣することなく凶戦感で作戦を立案し無謀な戦闘を強要している。

旧軍と同じ轍を踏まないよう、先行性及び完全性をもつた適時性ある幕僚活動の必要性を理解できた。

四、その他

「外史」においては自分の死に苦悩する兵士がいる中、一種の美意識・己の死を美しいと見る心情がいつしか生じて・・の件は日本人の本質的な弱点とも感じられた。安易な突撃や玉砕を厳禁し出血持久を貫いた硫黄島守備隊の死生観こそ見習いたい。

**第一普通科大隊迫撃砲中隊
二等陸尉 森 鉄也**

一、全般

今まで持っていた旧空挺部隊に関する断片

的な知識が、一本の線としてつながり、旧軍挺進部隊の先輩たちの足跡を時系列にのっとって理解することができた。また、実戦の状況・雰囲気を見ることができ、幹部として学ぶところが有意義であった。

二、特に印象に残った事項

(1) 気象が空挺作戦に及ぼす影響、

普段の訓練でも実感していることではあるが、ラシオの作戦中止、沖繩での特攻部隊の進出不能といった状況を知り、その影響の大きさを改めて痛感した。

(2) 挺進隊員の士気

彼らの士気の高さには感銘を受けた。計画段階から勝利の見込みがないのに自ら部隊の投入を要求する勇猛心は尊敬する。

三、修得できた事項

(1) 航空優勢が絶対に必要

レイテ作戦における50パーセントを超える私の航空機の損害、沖繩義烈空挺隊の突入成功わずかに1機ののみ、という衝撃的な状況を見ると空挺作戦において航空優勢は絶対に必要な要件であることが理解できた。

(2) 装備品の進歩が戦い方を決定

降下装備の関係で、拳銃と手榴弾しか携行できなかったこと、そのため射程の関係で敵に有効な射撃を加えられなかったこと、また、シンガポールにおいて英軍のトンブソン短機関銃を獲して使用したことなどから、改めて、勇氣では火力の差を埋めることは出来ず、必要な火器・装備品の導入に積極的であらねばならないと感じた。

(3) 幕僚の在り方

ア レイテ作戦において、参謀が現地を偵察することなく机上のみで作戦を立案し、部隊が現地で地上部隊と提携できず壊滅してしまふ状況があった。これこそ正に「机上の空論」である。自分が幕僚活動を実施する際の反面教師としたい。

イ 挺進部隊投入の考え方が、当初は慎重で年を追うごとに冒険的、あるいは非論

理的、観念的になっていった。現状の把握と論理的思考を継続することの重要性を認識した。

四、その他

(1) 空挺戦車部隊の存在

壮大な計画であり、かつての普通科群戦車小隊、そして現在の軽装甲機動車にも考えが受け継がれていると思う。

(2) 後に続く我ら

「後に続く者を信ず」と、絶望的な戦場でも敢闘して散っていった先輩方の名を汚すことのないよう、我ら空挺隊員は鍛え、備えなければならないと考える。

第二普通科大隊長

二等陸佐 関根 静夫

巻頭言にあるように空挺精神をその継承者である我々に遺そうという思いがひしひしと伝わってくる。

大東亜戦史を学んでも挺進部隊に関するものは少ない。その意味で、それを集録した本書の価値は大きい。特に、落下傘部隊の創設から空挺部隊の運用の変遷、そして作戦発動に至る過程と指揮官の決心に関する内容は、我々空挺幹部員として必須の知識であり、職務や人生の参考になるものと考えられる。

その中で特に印象に残ったのは、第一挺進司令部高級部員の木下中佐の明快な理論と簡潔な部隊運用、そして、各将校の率先垂範・上下に情誼が通う統率により、部隊が一途の方針のもと全組織をあげて任務の完遂にひた走る姿である。将校の堅確な志操と高潔な品性。下士官の勇氣、信頼、明朗さ。そして、誰もが「義」というものを大切にしていた。義烈空挺隊の「死生観」もそれらがたどり着いて結晶となったのではないか。空挺も新しい時代に入ろうとしている。空挺同志会においても、旧挺の方々も少な

られ、元挺である初代空挺団長の衣笠駿雄氏も亡くなられた。これからは現職の空挺隊員である我々が諸先輩方の志と一騎当千・勇猛果敢な空挺魂を確実に継承し、特に幹部はその実行の原動力とならねばならないと改めて誓った次第である。

追記

10数年前、団バスで東名高速道路を移動中に、海老名SAで一人のご老人が訪ねて来られた。

「私は、奥山の弟です。(バスの前面に)『空挺』と書かれているのを見て懐かしくなって声をかけました。」とおっしゃられたので、一言二言お話をした記憶がある。休憩時間を伸ばしてでももっとお話をして、他の隊員達にも紹介し、更に連絡先も伺っておけばよかったと今でも後悔している。

第二普通科大隊本部

一等陸尉 中橋 雅男

まず初めに、先般の自由降下課程で殉職された故高橋二曹のご冥福をお祈り申し上げます。我々の諸先輩方の想いを心に刻むのと同じく、貴官の志を忘れることのないようにここに記録します。(平成19年2月5日殉職合掌)

一、全般

この度、田中賢一氏著書「陸軍挺進部隊外史」に触れる機会を頂きありがとうございます。思えば、日々においては隊務や業務に追われ、休日においては普段話す機会が少ない家族と過ごす機会を作ろうとしていた自分、時間に流されて過ごしていたように感じました。読書らしい読書とは疎遠になり、資質向上のための時間の過ごし方が不十分であった自分なども恥ずかしい限りであり、先輩の足元にも及ばないという感が拭いきれな

い気持ちです。著者のような当時の状況を知られる方が、後世に続くものと信じて亡くなった隊員の生き様を伝えて貰えることが、我々自衛官として、なにかんずく空挺隊員として知るべきものであり、知らなければならぬものであると感じました。

二、痛感した事項

(1) 指揮官について

指揮官は、部隊が貧窮困難な状況になった場合においても、気丈に振る舞い、部隊を陣頭指揮していかなければならないというところは、強靱な精神及び確固たる人格からなるものであり、これらが使命感、責任感に及ぼす影響が大きいことが読み取れました。また、死生観について再認識しました。死生観については、一朝一夕にたやすく確立できる訳でもなく個人の考え方に起因すると思います。先人の隊員はなぜ生還のない出撃と承知しているのに、明鏡止水のような笑顔になるのだろうか。今の自分より遙かに若いはずなのに心の支え、掘りどころはいないどこから来るものなのだろうかと感じました。

(2) 挺進隊員について

当時の隊員は、中隊長を信じていかなる状況になっても部隊一丸となり出撃していく訳ですが、我々もこの団結力、強い絆を築けるように個人及び部隊を育成して、出撃に際して連観の境地になれるように隊務に精励し、日々精進していかなければならないと感じました。これからの自分としては、人格・識能ともに日々修練して、いざ中隊長上番になった際には、部下とともに出撃できる中隊長でありたいと感じました。

三、結言

通常の戦史においては史実のみを確認しますが、このような史実の貴重な資料に触れ、精神的要素からも改めて身が引き締まる思いです。自分も入隊して早20年が経ち、陸士、陸曹、

幹部と各階級において精進して来たつもりでしたがまだまだです。これから心機一転、空挺隊員として自衛官として精一杯頑張ってみようという決意しました。

第二普通科大隊情報幹部

一等陸尉 向田 淳

一、全般

当時第一挺進団に所属する将校であった著者が綴った資料「陸軍挺進部隊外史」により、陸軍の空挺部隊が当時実施又は計画・検討した作戦等に関する事実や、作戦・運用に関する当時の考え方の一端を知識として学ぶことができた。また、空中挺進行動に関係した人物に対する観察等からも、著者の視点から見た当時の空中挺進部隊の状況を窺い知ることができた。

当時の第一挺進団の状況から、前提となる国際情勢や社会的背景は異なるものの、軍人及び人間として根底に潜む普遍的なものを感じられ、一軍人、第一空挺団の一士官として非常に参考にすべきものと感じた。

二、空中挺進行動、指揮官の決心及び木下中佐の分析・判断について

空中挺進行動の「挺進」だが、レンジャー訓練の目的に「主として挺進行動により」とあるとおり、現代にあっても特に空挺団にあってはその精神は受け継がれ、レンジャーに通ずる精神が根底にあることにより、然るべき気概を保持していると考ええる。

空中挺進部隊は各作戦における奇襲隊として運用され、重要な施設や空港を確保して主作戦と密接に連携した行動を実施する部隊であり、最終的には主力と地上提携するもの、数日間は各部隊ごと独立した戦闘をしなければならぬような過酷な状況におかれるものであった。現代に同じく、当時の空中挺進行動の実施の可否は天候に左右されたよう

であるが、作戦計画の策定及び実施の検討に当たっては攻撃目標及び降下地点(地域)の選定が重要であったのではないかと感じた。当時の降下後の火力発揮については特に制限され、小銃を携行することも出来ず、敵から押収した小型の機関銃を装備させるよう検討した経緯があったという一例からもそのことが窺える。また、敵地に降下するに当たり、自動小銃・機関銃等のみならずそれ以上の火器砲迫等をもって応戦する敵に対し、特に降下直後においては、物投による増強を待たずして射程距離の非常に短い拳銃のみですべての状況を打開しえたのは、周到な見積り、すなわち攻撃目標及び降下地点の精選のみならず、相当強靱な体力と精神力、そして一隊員に至る命令・指導の徹底がなされていたことが大きいのではないかと思う。空挺部隊の出撃、特に空挺攻撃にあつては、命令下達・戦闘指導を一隊員に至るまで実施するが、当時の空中挺進部隊の運用に鑑みると、当然のことであると思う。また、小部隊または各個の戦闘に至った場合の対処能力を要求されるという観点からレンジャーで養うべき技能も必要になるものと思う。現代の空挺団にあつてもそのような命令の徹底、精神力、技能等は当然必要と考える。

指揮官の決心について、初期の空中挺進行動(パレンバン作戦やラシオ作戦)と後期のそれ(レイテ作戦や沖繩作戦)の大きな違いについて述べている著者は大きな違いが生じた原因に特攻精神の台頭を挙げており、初期のパレンバン作戦とラシオ作戦は正常な統率、その2年後のレイテ作戦は現実離れしており特攻隊のような運用だとしている。後期における指揮官の決心と部隊の行動は、確かに特攻の気風を反映していたようであったが、指揮官の決心とそれに基づく部隊の行動は、当時の戦争指導の在り方の具現であり、即ち戦争指導そのものの方向性が途中から脱線しかけていっているのに、歯止めが利かなくなった

ではないかと、著者は主張したかったのではないかと考える。指揮官は、部隊の運用に当たり戦争指導の方向性の変化や部隊の士気等、様々な要因を考慮して決心したものと思うが、友軍のメンタル的な部分をも含み指揮官及び司令部の置かれている状況を勘案すると、結果として命知らずとも言えるような、強行的な、それ以前には考えられないような行動をも部隊に実行させてしまうということを目の当たりにした著者が、痛切に感じたところではないかと思う。

その他決心事項について細部は記載されていないが、第一挺進団司令部高級部員木下中佐の明晰な分析や判断について触れており、明晰な頭脳をもって木下中佐が第一挺進団の運用について検討した経緯が、当時だけでなく現代の空挺部隊の運用の在り方を考察するに当たり非常に参考になるものと感じた。木下中佐については指揮官同様、隸下の第一聯隊の士気が低下しているのをどうにか打開してやりたいという気持ちや、自らも率先陣頭し作戦の成功に尽力したいという気概を感じられ、また同時に、無形戦闘力を発揮させることの重要性を先人がどれほど認識していたか、感じることができた。木下中佐の分析や判断については、極々当然なことが述べられていると思う。逆に言えば、当たり前のことを当たり前にできるかどうかは何より重要なのだということに言い換えられると思う。また、それがコンスタントに発揮できないことがあ

るから問題なのであり、時代の流れや心の迷いに特攻心理によって判断が狂わされることは、過去の事例が十分に示すとおりであり、コンスタントに自己及び組織の力を発揮することが至当な決心に繋がるものと考ええる。

三、死生観について

当時の軍人の腹決め(腹を据えて覚悟を決めること)について、集団的なものであったかも知れないが、相当に気持ちのすわったものであったろうと感じる。現代において個人

が腹決めをするのにどれだけの覚悟と時間があるだろう。

特に指揮官は孤独であるといわれ、自分自身のみならず部下隊員の命を預かる上で死生観は重要な要素である。空中挺進部隊の指揮官は、特に確固とした腹決めをし、不動の死生観を継続的に確立していたものと思う。

四、空挺団に求められる役割

イラク復興支援活動において、空挺団が連続、しかも最後の第9次及び第10次群を努めた意義は、非常に大きいと思う。運用上からもあると思うが、戦争当時以来、陸上最高司令部の空中挺進部隊に対する期待が非常に大きいことの表れであり、これは空挺作戦そのものとは直接には関係のない分野特に内面的な素養について部隊として他の追隨を許さないものを備えているからではないか考える。当時から勢力に限りがある空挺部隊が重要な時期と場所に運用されていくことに似ている。精鋭無比という言葉は第一空挺団に所属する者の合言葉であり、現代は唯一無二の部隊であるという自負にかなう隊員各個の総合的な、特に内面の充実を我々に求めていると思う。「陸軍挺進部隊外史」に紹介されているとおり、特に部隊の骨幹をなす幹部にあつてはその資質・識能の充実が部隊行動の成否や隊員の育成に直結するものとし、自覚を新たにしなければならぬと感じた。

第二普通科大隊本部中隊長

三等陸佐 達下 裕教

一、はじめに

城跡めぐりが趣味である親父の影響で幼い頃から各地の城跡へ意味もわからず、ただ、ついてまわったことを想い出す。そのうち、知らぬ間に歴史について少なからず興味を抱くようになっていた。防大学生時代から現在

に至るまで、硫黄島、サイパン、鹿児島県の知覧・鹿屋、沖縄県の北飛行場跡（現在の読谷飛行場跡）や嘉数高地、熊本県の健軍等、かつて我々日本人の祖先が登場する戦史の舞台となった場所を訪れる機会にも恵まれて行く先々で様々なことを学んだ。そんな中、空挺団に所属した年、「歌と絵で綴る陸軍挺進部隊史」を初めて目にした。以来、何かある度に拝読させてもらっている。空挺団に所属して以来、挺進部隊史については、教育・自己啓発等様々な機会を通じて学んできた。その際にも、田中賢一氏の執筆された手記を度々活用させていただいた。

一般の歴史書籍や他の戦後間もなく書かれた書籍に比して、わかりやすい表現で非常に読みやすい感じがする。先日も中隊で沖縄戦史教育を行った際に参考にさせてもらったばかりだ。「歴史は人類の教科書」であるという言葉があるが、実戦経験のない自衛隊にとって貴重な参考資料であると思う。今回、終戦60周年の節目に編集された「陸軍挺進部隊外史」の所感作成の機会を得て、冊子を改めて読み返し、筆者である田中賢一氏が最も関わりが深かったと思われるパレンバン空挺作戦に焦点をあてて所感を作成することにした。

二、パレンバン空挺作戦の紆余曲折

昭和17年2月14日、軍歌「空の神兵」でも有名であるパレンバン空挺作戦は、空挺作戦の中でもとりわけ成功した作戦としては余りにも有名であるが、作戦実施までに数々の紆余曲折があったことは、非常に興味深い。

史実によりやや異なるが、パレンバンの油田地帯は、年間約40万キロリットルの産油量があり、当時の日本国内での年間石油消費量にほぼ匹敵していたといわれる。このパレンバンの製油所の確保は、資源の少ない日本にとって、じ後の作戦に及ぼす影響は極めて大きく、また、飛行場についても、じ後のジャワ島への航空支援拠点の適地であるという理由から、大本営が第一挺進団を使用して作

戦を行うよう命じたのも、うなづける気がした。また、第一挺進団を配属された陸軍最初の空挺作戦に慎重にならざるをえなかった南方軍司令部の立場は非常に大変なものだったのではないかとたどろろか。大本営と久米挺進団長をはじめとする挺進団司令部との狭間で、南方軍司令部要員の激しいやり取りがあったであろうことも容易に想像できる気がする。ただでさえ、挺進第一聯隊の海没により未だ練成途上であった第二聯隊を急遽南方に招致して、練度に疑問を持っていただけであろうから、失敗させることができない環境に慎重になっていたことはある意味でわかるような気がする。しかし、一方で実際に作戦に投入されようとしていた第二聯隊を基幹とする第一挺進団の司令部要員も、また、当初の南方軍司令部及び作戦実行部隊である第三飛行集団に決定権があることで機微に動けない、決められないもどかしさに苦悩したのではないかと感じた。各司令部や各部隊における赤裸々な心情の一面が垣間見られたような気がした。

三、不幸中の幸いと浮動状況

一方、海軍のスマトラ島上陸が遅れて、当初の作戦実施予定が同年2月6日頃であったところを2月10日に延期となったのは、多少の準備日数であれ成功に非常に大きなプラス要因となったことは否めない。浮動状況下であらゆる要素をプラスにする、考える力が任務達成につながるのではないかと、思う。任務時間を大きく有る力な戦力へと変化させたものではなかったらうか。

四、周到な作戦準備

作戦に先立ち大本営からの指示で将校・下士官の約30名を鶴見の日本石油工場で製油装置の構造について研修を実施しているが、我々が重要防護施設等への研修を行っていることを考えると、戦いの準備というものは今も昔も基本は非常に似ているということに気づき少々驚いた。航空写真を使用していたあたり

も、現代では衛星画像やデータ化されたものに変わってはいるが、非常に類似していると改めて感じた。あらゆる情報を継続的に収集して任務を分析して作戦計画に反映することは、現代でも重要な戦闘準備の骨組みであることは間違いないと思う。

五、大編隊による空挺作戦

また、何より驚かされたのは、支援航空機も編成である。カハンからの人員輸送機部隊とクルクアンからの物料投下の戦隊等、併せて100機近い航空機が大編隊を組んでこの任務のために使用されたという事である。編成についても人員・物料輸送をはじめ、空対空戦闘、対地制圧（近接航空支援）等の機能を持ち、現在の陸自空挺作戦のルーツともいえる形は、この時代に既に確立されていたのかと、驚かすにはいられなかった。第三飛行集団が非常に大きな勢力を投入していたところからもこのパレンバン空挺作戦をはじめとする挺進部隊の作戦と、大本営・南方軍が、いかに重視していたかということが容易に理解できた。

六、降下場選定の難しさ

降下場の選定には今も昔も苦労は同じなのだ。何かが非常に自然に感情移入してしまふのは私だけではないと思う。当時の降下時に携行できた主要装備が拳銃と手榴弾だけであることを考慮すると、物料が現在の我々にも増して重要であり、回収を含む戦力化の難しさというのが非常に伝わってくる。

同じ第二中隊の任に就いた第一聯隊第四中隊、及び飛行場南東約2キロ地点の2箇所の降下場に降下した後、敵の戦闘機から機銃掃射を受けた際のように、降下・物料回収という観点からは難を呈したものの隠蔽されていたため被害がなかったという良否併せ持った特性について考えると、ますます、降下場の選定というのは難しいものだと感じた。

単純に考えて、非戦闘損耗の極限である草原やゴルフ場のような場所でありながら、じ

後の制空権が伯仲する可能性がある場合は、近傍に森林・凹地等、隠蔽できる地形が必要になる。また、物料追送のための降下場を兼ねて回収場所とする場合がほとんど大半であることが予想され、地上の敵に対しても地形上の掩護が得られることも非常に重要である。

しかしながら、日常で車や電車に乗る度に、外の景色を見ては、なかなかそんな恵まれた場所の少ないという現実にも思わず愕然とするときがある。頭ではわかっているが、実に難しい。おそらく、実動する場合には何か特定の要素に妥協点を見出し、問題点に対する処置を講じるという事で、実際に行動することになるであろうと考える。当然ながら、完璧な環境を追求すべきであるが、我にとつてのみ完璧な環境の戦場など無いと改めて感じた。彼我常時混交、これが戦場の常であると肝に銘じなければならぬと思う。

七、飛行場と製油所の占領

以前、非常に規模は小さいが、ある演習において陸自航空科部隊のAHを含む比較的大きな集成部隊のFARP（燃料弾薬再補給点）を襲撃したことがある。その際に、対空用の重機関銃で水平射撃をしている光景を隠れて監視していたが、空砲ではあったものの猛烈な威圧感であった事を度々思い出すが、対空機関銃でさえその威圧感、第二聯隊第四中隊が受けた高射砲の水平射撃がどれだけ恐ろしい威力があったか、火砲が大きすぎてここでは想像すら容易にはできない。しかし、ここで飛行場を占領した部隊の行動の結果から、我々の戦術原則のひとつである「迂回」を追及することが非常に重要であることを感じた。

河川で分離した大小2箇所の製油所を一個中隊に満たない約100名により果敢に攻撃する場面でも「緊要地形」を獲得しながら機関銃を最大限利用して敵のトーチカ陣地を制圧している。いかに攻防のそれぞれにっとして地

形的な要素が、我々の任務達成と生死の決りつながらるのかを改めて認識した感じがする。

「波及効果」
他の史実にも明白なように、パレンパンの飛行場と製油所は、様々な波及効果を生み出した事は明白な事実である。南方展開の海軍艦船や飛行部隊の燃料を供給するとともに、

同飛行場に推進し航空作戦を容易にし、当初の日本の戦略目的のひとつであった、蘭印（現在のインドネシア）における、鉄鉱・ニッケル・錫・ボーキサイト・マンガン・ゴム・カボック綿・砂糖などの数々の資源を連合軍反撃までの間、確保することができたのである。

そして、この作戦から数カ月後、日本国内において、当時の歌謡曲として「藍より蒼き大空に・・・」で我々にも非常になじみの深い「空の神兵」が発表され、愛唱された。余談ではあるが、インドネシアがオランダ領になった17世紀以降、インドネシアの各地に「天から白い衣をまとった神が舞い降りてきて、圧政から救ってくれる」という伝説が伝えられていたという有名な話がある。白い衣をまとったのが当時の日本の落下傘部隊だったという落ちである。

九、陸軍挺進部隊の後継者として期待されている空挺隊員

陸上自衛隊の空挺部隊は、空挺作戦をする能力を堅持しつつ、尚かつ、新たな脅威及び多様な事態等に即応することが期待されている。まだまだ、学ぶべきことは多い。そう思う。

我々、空挺隊員は、挺身赴難という気概を基盤とした我が国の落下傘部隊の良質な伝統を伝えようとご助力いただいている諸先輩より、当誌を通じて学べる環境を提供していただいている。このことに深く感謝したい。

田中賢一氏の執筆された、諸先輩方の流された血と汗の結晶ともいえる、この「陸軍挺

進部隊外史」から、引き続き、事あるごとに様々な事象を吸収して自分の血として肉として、陸軍挺進部隊の後継者の一人として今後にも精進して行きたい。

第二普通科大隊本部中隊
二等陸尉 早田 知弘

一、全般

わたしはこれまで、大東亜戦争における空挺作戦についてほとんど知識がなかったが、今回「陸軍挺進部隊外史」を読み、空挺作戦が実施あるいは計画されていた数の多さに驚いた。降下する直前まで行って引き返したのもあり、計画段階で姿を消したのもあった。また、各空挺作戦における戦況の背景、作戦の目的・概要・編成及びそれぞれの指揮官の統率及び空挺隊員の心境、特に任務に対する強い思い等を知ることができた。特に、沖繩空挺作戦については特攻作戦であり、死ぬとわかっていながらも自ら志願して任務に就き、その空挺隊員としての強い精神というものを感じた。

二、特に印象に残った事項

(1) ベナベナ・ハーゲン作戦

この挺進作戦は、ニューギニアにおいて敵の飛行場の建設を妨害するという目的であり、作戦準備までは実施したものの、具体化はされなかった作戦である。この時第一挺進団の動員となったが、挺進団長である河島大佐の人間性に強い印象を受けた。

作戦地域は挺進部隊が降下しても地上部隊が進出するために道路を啓開する必要がある、補給は担送によらなければならず、そのためには、1個師団規模の人員が必要であることがわかっていった。すべて空輸によれば解決することであるが、敵に制空権を握られていた。このような状況を知りつつも、「地上部隊が来てくれなくてもよい、

降下したならば敵を蹴散らし現地物資を奪い作戦する」という意見を具申した。まさに空挺精神であると感じた。作戦がどれだけ危険であるか承知しながらも、全般の戦況を大きく左右するような重要な任務であることを自覚し、そして更に、自分の部隊特に隊員の練度の高さ、旺盛な士気等に自信があったためにこのような具申ができたであろうと思う。

降下したならば敵を蹴散らし現地物資を奪い作戦する」という意見を具申した。まさに空挺精神であると感じた。作戦がどれだけ危険であるか承知しながらも、全般の戦況を大きく左右するような重要な任務であることを自覚し、そして更に、自分の部隊特に隊員の練度の高さ、旺盛な士気等に自信があったためにこのような具申ができたであろうと思う。

(2) 上官に対する信頼感

沖繩作戦に参加した隊員のうち生き残った者の言葉である。「当時の心の拠りどころは特には意識していなかったが、中隊長が引き連れていくのだから、それについていくのは当然であった。あるいは、中隊長がそのような任務をもらったのだから、当然のことだと思っただけであった。」必ず死ぬと決まっていたとしても、単独で操縦桿を握り体当たりする特攻隊員と、激烈空挺隊のよ

うに、集団で敵中に強行着陸する場合とでは、感覚的に多少の違いはあるかもしれないが、感覚的に中隊長とともに行くのだからと、その心の拠りどころがあったという事は、上官の偉大さもあるが、人の死生観にはそのような一面があるのだなと感じた。また、当時の日本人に共通した国家観及び軍人として鍛えぬかれた責任感が根底にあり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうちに死に対する姿勢がとれたのであると思う。

三、今後の部隊勤務について

当時の軍人の任務に対する責任感、上司に対する信頼感について特に感銘を受けたが、我々空挺隊員はもう一度、それぞれの立場において、空挺精神というのを見つめなおす必要があると感じた。当時と現在とでは時代の背景が異なるが、空挺作戦が危険を伴い、重大な任務があることには変わりはない。幹部

大なる任務があることには変わりはない。幹部として、このような戦例を活用して部下隊員に対し、空挺精神とはいかなるものかを考え

させ、今後の隊務に邁進させなければならぬと感じた。

第二普通科大隊第四中隊長
三等陸佐 井村 浩之

一、全般

空挺部隊の前身ともいえる挺進部隊の趨勢について、新たな認識を持つ事ができました。また、大東亜戦争間、作戦及び各兵が現在とは隔絶した狂気の行動をしたわけではないという事実も認識することができた。

以下、特に深く感じた事について、各別に述べます。

二、空挺部隊の運用は多くの作戦基盤が成立しなければ成功は困難

文中、「統率姿勢が正常」という言葉で勝算の乏しい作戦について述べられているが、我々が実施している平素の訓練に照らし合わせて、真に実戦に耐え得る行動になっているか、再度考察し、修正すべき部分があると思料しました。

三、出征前の心構えが「正常」であることの重要性

兵各個は、これから赴く戦場における勝算が乏しいことを認識している者も少なからず居たようですが、少しでも国民の損耗を少なくすることや、家族等にもその心を継承させたなどの真撃かつ崇高な精神の心と、各人ごとの達観に至り、淡々と任務についていたようです。

四、日々の鍛錬が肝要

空挺作戦が難しいことは、常に天候・気象、多種の協同支援部隊との調整及び変化する敵情等の流動する状況の中で、発動されることが多いことだと認識しています。

だからこそ、平素の訓練において、より実戦的かつ効率的に戦闘できるよう練成していることが重要であると史料します。

更に、その焦点は各種応用動作・柔軟な部隊行動の基礎となる隊員各個の基礎的戦闘能力及び小部隊の基本的行動に尽きると再認識しました。

古くから練武無限の中、諸先輩が苦心苦汁を嘗めつつ培ってきた基礎を無にすることなく、状況の変化に柔軟に対応できる素養を積み上げていくことが肝要であると史料します。

五、結言

空挺は、挺進部隊以来「精強」「精銳」の看板を背負ってきました。

しかしながら、それは、気負うことのない自信、困苦に耐えうる厳しい訓練の賜物であるはずで

私自身、ありもしない空虚な「看板」に夢想することなく、何時来るか知れない「いざ」という時のために、謙虚にかつ真摯に自身の弱点と向き合い、日々精進すべきと、改めて認識させられた次第であります。

第二普通科大隊第四中隊

一等陸尉 山野 圭介

一、全般

輸送手段の確保及び部隊の投入時期・撤収時期から見るに、挺進部隊の犠牲は危険度が大きく、準備日数が足りず計画段階で取り止めとなった作戦もあったが、作戦の実行を決定する際に予想される犠牲は戦勝を獲得するために、どのように作用していたのか考えさせられた。

二、統率の姿勢

千名足らずの軽装備部隊が、戦闘の渦中に投入され戦機を掴むことは、運用上非常に困難であり、落下傘部隊の将来の発展に悪影響を及ぼしたことが、パレンバン作戦、ラシオ

作戦及びレイテ作戦を見るとうかがえ、特に急速な兵力の増強に伴う各地の統括指揮の困難性も見る事ができた。

三、死生観

己の死を美しいと見る心情や、己の死がいかなる価値があるのか、又は己に続くであろう兵隊や兄弟に思いを託す美を、死に直面していく過程で確固たるものにした戦闘から、

平時の練成からその心構えができる教育を精神教育を通じて自ら学び、部隊とともに成長する必要性を感じた。

四、最後に

多様な事態に迅速・実効性ある対応を求められる時代に、実行力と決断力を更に涵養する必要性を感じた。

第二普通科大隊第四中隊

二等陸尉 鈴木 誠一

一、全般

今回この所見にあたり「陸軍挺進部隊外史」を読み、諸先輩方の活動の一端を認識でき、時代の背景等の特性はあるものの、意思を受け継ぐ落下傘部隊の小隊長として二つの事項について考察したいと思えます。

二、心の拠りどころ

文中、「指揮官とともに往くのだからと、心の拠りどころがあった」という死生観の一面を紹介していましたが、改めて傘の絆の大切さを認識したとともに、小隊長として自分さらに鍛えねばと痛感しました。傘の絆の裏を返せば厳しい訓練を共に実施し、汗と泥と一緒に生きてまみれることが強い絆を生むためには大切だと思っています。陸曹から幹部になり、急がしい事を理由に現場進出の機会が減ってしまった自分を反省するべきだと思いました。

また小隊長(兼運用訓練幹部)として最近感ずる事ですが、困った時に隊員は指揮官を

注目するという事です。時々その視線にドキッとすることがありますが、その隊員の熱い視線の奥にある期待に応えるためにも、継続した努力を実施していきたいと思えます。特に下士官に負けないような体力と普通科隊員としての識能の向上を目指して。

三、士気を保つ

「いざ戦地へ」と意気込みを高め、それが中止には難しかった時にその士気をいかに保つかというのは難しかったと思えます。文中にもか候で作戦が中止になったり、船の沈没等による任務部隊の交代がありました。具体的にどのような士気を保ったかは記載してませんが、推測で考察したいと思えます。

自分は第10次イラク人道復興支援活動に参加しました。派遣が決まるかどうかの出発前の訓練時には、新聞報道等の影響もあり隊員の士気の動揺は少しありました。しかしながら大きな動揺なく訓練を淡々と実施し、その練度を向上できたのは、目録管理でも言えると思えます。これは日々の訓練にも言えると思えますが、目標が明確である(数値等)と部隊として邁進しやすく、幹部自衛官として部下に対し目標をしっかりと付与する義務があると認識しております。偉大なる先輩方も具体的に目標を与えたのではないのでしょうか。

四、結言

以上二つの点について考察しましたが、今回の外史を読み終え、どのような訓練をしたかのような強い精神力を持ち得た部隊になったのか非常に興味を湧きました。今後機会を捉えその訓練内容を調べてみたいと思えます。

また、現代は血生臭い話が嫌われがちな世の中ですが、諸先輩が命を賭してでも守りたかった日本のために、空挺普通科幹部としてもう一度自分を見つめ直し、今後の任務を全うしたいと思えます。

第二普通科大隊第五中隊
三等陸尉 小田 雅宏

一、全般

私は、「陸軍挺進部隊外史」を読み、自分のさらなる努力の必要性を再認識するとともに、空挺作戦を疑似体験することができ、今後部隊を指揮する上で参考になる事項が多々あり、じ後の資となった。

二、修得した事項

空挺作戦・陸軍挺進部隊の概要
パレンバン空挺作戦、ラシオ空挺作戦、ペナバナ・ハーゲン空挺作戦、レイテ空挺作戦(和号作戦)及び沖繩空挺作戦(義号作戦)の概要並びに陸軍挺進部隊の編成・発展経緯を理解することができた。

三、じ後の資となる事項

(1) 空挺作戦の特性を考慮した見積もり・計画
ア 戦力発揮のための対策及び不測事態対処の必要性

降着後における部隊の分散及び指揮・通信の統一困難等の空挺作戦の特性が、パレンバン空挺作戦及びレイテ空挺作戦において見られた。降下地域の植生は、航空写真による見積もりを裏切り、物量の収集及び部隊の集結を非常に困難にし、夜間の暗闇によりそれは更に助長された。降下後、速やかに戦力発揮するためにも、その対策及び不測事態対処の見積もり・計画が必要だと感じた。

イ 地上部隊との提携を考慮

落下傘部隊は、特有の空中機動能力を發揮し、長距離を迅速に移動できるが、その地上作戦能力(火力及び兵站支援能力)は、制限される。陸軍挺進部隊の空挺作戦は、地上部隊を支援する作戦という位置づけが多いのは、地上作戦能力が制限されているからではないか。地上部隊と提携することで、その戦力を補完することが可能になる。地上部隊との提

携を常に考慮しなければならないと感じた。

(2) 部隊の団結・規律・士気が低下した場合の処置

部隊の低下した団結、規律、士気を回復することは、指揮官の責務であり、どのように回復するかは指揮官としての能力が問われる。パレンバン空挺作戦に参加できなかった挺進第1聯隊は、よく士気が低下した。天覧演習よりその士気は高まったが、その間、部隊長は、相当苦勞したようだ。団結・規律・士気の低下の兆候を早期に発見し、その原因を排除しなければならぬが、低下した団結・規律・士気をどのように回復するかは、今後の私の課題の一つだ。

第二普通科大隊第六中隊

二等陸尉 松村 裕治

一、全般
(1) 平成17年度の田中賢一さんの講演や川南護国神社の例祭に参加したときのこと、あるいはこの外史を講読して、常に同じ想いを感じることは、日本人としての不朽の精神を忘れることなく大事にし、いつの時代でも変わらぬ本質を見極めなければいけないと感じることで、自分が何をすべきなのかを考えさせられる。

(2) パレンバン空挺作戦や、レイテ空挺作戦、沖繩空挺作戦、それから計画段階でのランオ空挺作戦、ベナバナ・ハーゲン空挺作戦等の身近な戦史を体系的に認識することができ、大東亜戦争の時代背景や空挺の歴史を感じる事ができた。

(3) 陸軍挺進部隊外史を通して、戦争のすさまじさというものを感じた。実戦は、時代背景や戦略・戦術的なものから人・補給・装備を含めいろいろ条件の中で任務を遂

行していかなければならず、自分としてはさらに意識を含めまだまだ訓練していかねければならないことが多いと思った。

二、最も印象に残ったこと

(1) 義烈空挺隊による諏訪部飛行隊長や奥山隊長の死生観、それから棟方少尉の「後に続く日本人への心意気」という死生観を読んで、自分には空挺隊員としてあるいは自衛官として与えられた任務に対する死生観がどのように確立できるのか、改めて問いただした。

(2) 数々の先人の方々の特攻精神や創意工夫等をも、空挺精神や空挺隊員の心構えは現在にも受け継がれていると思うし、これから更に時代に即応し、精進していかなければならないと思った。

三、その他

日本という国が、負けることのないよう、幹部としてしっかり勉強し、教養を身につけ、訓練に励まなければならないと思った。

第二普通科大隊第六中隊

二等陸尉 敷浪 将人

一、全般

「陸軍挺進部隊外史」を読んで、今の私達にできることは、危機意識を持って、基本・基礎を重視して、日々の訓練に励み、強い部隊を築くことであると感じた。また、実戦と私達の訓練では比較にならないと思うが、同じ空挺隊員として航空機から飛び出す際の緊張感を味わうことができる喜びを噛みしめ、誇りを持ち、訓練に励み、任務達成に邁進しなければならぬと感じた。

二、特に印象に残った事項

(1) 特攻隊員の死生観
特攻隊員という究極の任務達成の場を与えられた隊員の心情は想像を絶するものである。それでも笑顔で意気揚々と搭乗す

る隊員の姿には強く感動させられた。その隊員の心の拠りどころの一つとして「中隊長と共に往くのだから」という思いがあったということは、幹部として責任、存在の重要性を再認識させられた。

(2) 歴史を学ぶことの重要性

歴史を学ぶことの重要性はこれまで何度も言われてきたことである。個人が実際に経験できることは限られている。今の日本や世界の状況を知り、理解するため、さらには、自衛官として様々な事態に対処するために歴史について学び、知識を蓄え、知恵を養う必要がある。また、歴史を学ぶことにより、日本人としての自覚や誇りを感じ、自ずと、愛国心につながると考える。

第二普通科大隊迫撃砲中隊長

一等陸尉 中道 正徳

一、要旨

「陸軍挺進部隊外史」を読み、空挺戦史に関し、その概要を知る機会となった。また、挺進部隊が運用された各作戦の戦闘経過及び参加兵の心情について一部ではあるが把握することができた。

その中で我々が学ばなければならない空挺作戦の要訣、特に降下直後の行動と兵としての死生観について感じたいと思う。

二、パレンバン作戦を通じての教訓事項

空挺作戦においては降着直後が分散し、指揮の統一が困難で最も脆弱な時期であり、迅速な集結と早期の戦力化が弱点を克服し奇襲効果を最大限発揮する鍵となる。このことから我々は降着戦闘を重視して練成しているが、パレンバン作戦の降着直後の状況と戦闘から教訓となった事項、訓練する上で着意すべき事項を列挙したいと思う。

パレンバン作戦は挺進団の初陣であり、その実施を参加部隊の積極姿勢に押されたとは

いえ十分慎重を期して行われたとある。当時は装備も初期のもので携行降下できるのは拳銃と手榴弾のみ、投下できる重火器も機関銃のみであったから着地してから火器をとるまでが最大の弱点であり、その後も貧弱な物的戦力で目的を達成するためには奇襲効果の最大発揮を考慮して計画されたものと思う。実行はどうか、

まず航空写真から研究し決定された降下場であったが、降下してみると予想に反して樹木の高さや草丈に集結と物料回収に苦勞し、計画通りに運ばなかった様子がわかる。しかし、降着後、所在の陣地から攻撃を受け直ちに戦闘に入った中隊はさておき、その他の部隊も集結、物料回収途上の態勢未完の状態でも攻撃を決意し、開始した。中には拳銃と手榴弾のみで行動した部隊もあり、その敢闘精神には驚嘆する。

降着後、時間の経過とともに奇襲効果は薄れ敵の警戒が増す。比例して任務の達成も難しくなる。これを熟知していたからこそその判断であり、また、物的戦力の不足は攻撃開始の時期を逡巡する時間を与えなかったのかも知れない。数少ない戦闘描写であったが、空挺作戦の要訣を具現した行動であったのが読み取れる。

振り返って現在の我々であるが、まず降下については事前潜入した部隊の誘導を受け、降下地域の情報もある程度入手することができ。しかし、地図や航空写真を基に事前研究し出撃するところは当時とほぼ同じである。降下・集結から当初の戦闘までの行動を綿密に予行し、一隊員に至るまで企図の徹底を図ることが重要であり、これを意識して訓練しているが、「降下場は関谷台、集結場所は風穴、界松四又路」が常態であり、戦闘予行も知らないうちにワンパターンになっていると反省させられる。他方面演習場で降下を行うがそれも整備された地域であることを忘れてはならない。

降下する地域は常に未知であり、どのような事態が発生するかわからない、当たり前のことであるがあらゆる状況を考慮して訓練を行わなければならない。熟知している地形であればその都度設定を変え、不測の状況を作られ、また、降下できなくともいろいろな地域・地形を活用して行うことが必要であると思う。

次に攻撃の開始時期の判断であるが、集結の状況、敵情などからその時期を適切にできるようにするために各指揮官は戦力化の度合いに応ずる多くの腹案を準備すること、各隊員が自分たちの行動の細部を理解している必要がある。

我々は戦力化までの目標時間を定め、これを基準に練成している。早期の戦力化達成のためには、何と言っても隊員各個の能力向上と指揮官の判断力向上が必要であり、積み上げによる地味な努力が必要である。当時の挺進団も、編成直後で部隊での訓練が不十分な状況で出陣したが、各兵の中にはそれまで実戦経験を積んだ者も多く、個人能力の高さと指揮官の適時の判断があったからこそ成った作戦であったのだと感じた。

三、死生観について

義烈空挺隊の兵達の死生観はいかにして醸成されたのか、また、特攻隊指定から半年、作戦目標の変更、決行日の延期を経てもなお1名の脱落者も出さなかったのはなぜか、その分析が書かれていたが、これを踏まえて自衛官はいかにして死生観を確立するかを考えてみたいと思う。

外史においては義烈空挺隊の死生観、心のよりどころと表現しているが、これを将校については将校としての意気、責任感そして敵愾心をあげ、兵については「中隊がそのような任務をもらったのだから当然」、「中隊長とともに行くのだから」と部隊への帰属意識と指揮官の魅力に惹かれ、生死を度外視して戦いに赴く心境が語られていた。

現在我々が日々訓練に精進し、営内を共にするのまさにこの気概を醸成するためにやっている。自衛官としての責任感、安全を脅かすものに対する敵愾心、部隊内の相互信頼、一体感である。しかし、これだけをもって死生観が確立できるものではないと思う。義烈空挺隊の兵達は自らの死を価値あるものと受け止めていた。死地に赴く彼らは自分たちの特攻で戦況が好転するとは考えていなかった。

しかし、自分たちが先達になることによつて後継者に奮起させることができる。敵飛行場を2、3日使用不能にする作戦目的だけに身を投じるのではない、自分たちの行動を見てその意思を弟が、子供が、後に続く誰かが継いでくれる、だからこそ死んでも悔いなしと感じることができたのだろう。

後に残す国民との一体感が根底にあり、軍人として鍛え抜かれた責任感と相互信頼、そして任務に向けた訓練を継続することで醸成されたものであった。

この点、国民との一体感という点では現在は背景が異なると思う。我々の存在価値を災害派遣の為といい、外国軍隊が侵攻してきたら無抵抗を標榜し、無防備都市宣言することを公言して憚らない者が多数いる現在、それらの人達も含めてすべてを守るために命を投げ出すことが我々に求められている。

話がそれるかもしれないが、自分はイラク派遣の際、我々の派遣に異を唱え、直接的に阻止しようとする勢力が多数ある中で出発したが、それ故に絶対的な失敗はない、絶対に任務を完遂するという気概を持たない、自分の任務に意義と誇りを持ち、反対する人達も含めた日本の代表として参加するという矜持があった。

現在の自衛官の死生観の確立のために純粋に使命に身を投ずる誇り、プロとしての矜持を育んでいくことが必要だと思う。

四、結言

空挺作戦の特性については、時代が変わつ

ても基本的なところは共通している。先人が行った作戦の経過及びその思考から学び取れることは多い、これからも研究し、訓練に役立たせていきたい。

また、死生観を確立することは自衛官である以上必要な要件である。今確認したものをもってなくともいざ出動となった際自然にそれを得ようとするためには、日頃からの使命感の涵養が重要であり、隊員指導において考慮していきたい。

第二普通科大隊迫撃砲中隊

三等陸尉 小友 広勝

〇志を受け継ぐということ

空挺隊員になると、精神教育で先人達の偉業に接する事が出来る。「空挺館」は習志野にまつわる旧軍関係の資料から、落下傘とリわけ旧挺進部隊で活躍された「空中挺進部隊」ゆかりの大変貴重な遺品や資料が並ぶ。大きな感銘を受ける。現代の生活に比べれば満足なモノや便利なモノが無い時代に、先人達が成し遂げた偉業や作戦に望む心や魂の在り方、生活態度・姿勢、圧倒的な真実の数々に空挺を志願した意味の重さを改めて痛感する。

いつからか、幹部必修課程(?)のひとつとして、基本降下課程に大挙として幹部が入校してくるようになって年間何十人と、今まで何百人の空挺幹部を輩出してきたであろうか、ある宴席で一人の先任助教から聞いた事がある。「空挺隊員が増えるのはいい事、でも彼らは所詮必ずどれか二つを選ばなければならぬ四択から付加価値の多い空挺を選んだだけ、ウイングを貰ったら空挺勤務は先ず希望しない」、「教育で日程が押している時は、空挺館さえ見学しない期もある」：：：そうだ。さらに、「小友!中隊では若手幹部にどういう教育してんだ?今期のレンジャー〇〇は全然だめだ!」

：：：と言われてしまった。上級陸曹になってから、似たような事を度々に言われるようになっていた。

中隊に配置になる若手幹部に対し、空挺の「いろは」を教えるのは、空挺生え抜き陸曹の役目だと言葉で具体的に示された訳では無いが、空挺に永年勤務する上級陸曹なら自然とその役割を担っているという自覚しているだろう。そういう先輩を見て育っているし、やがて皆で手に掛けた若手幹部は一段と逞しくなつて指揮官・幕僚で戻ってこられる：：：そんな部隊に、また新しい若手幹部が配置になる、また生え抜き陸曹達が「空挺はなあ：：」と始める：：

空挺に限らずどんな職域の部隊でもやっているはずだ。「伝統の継承」善しにつけ悪しきにつけ、そんな繰り返しが脈々と行われて来た空挺も、最近では少し様子が変わってきたように感じる、我々がサボってきたのが原因なのか、その前の先輩達が手を抜いたのか、はたまた後輩達が手を出来なくなかったのか? 答えは、昔に比べて訓練環境も服務環境も変化し、総じて「希薄」になった、強烈な「らしさ」が均(なら)され平均化・普通化して来たのかな?と感ずる。

同じような危機感を、田中氏をはじめ大戦を戦われた旧挺の先輩方は感じているのだろうかと思う。田中先生は、明確に「我々の後継者である空挺隊員に遺そうと思う」と仰っている。終戦60周年の節目に、様々な機関紙に掲載された記事を特別に集録され、いわば空挺の為に、空挺隊員の為だけに、まとめあげた冊子と明言されている。

今まで、戦争・軍事に限らず、色んな分野で活躍された偉人の、その伝記を読むと、必ずと言っていいほど最後には「あとに続く者がいる限り、悔いは無い」「：：さびしくは無い」「：：の為に頑張れた」「：：継ぐ者がいる限り：：」「：：継ぐ者を信じて：：」等々の言葉を遺している。かつて：：大戦末期の時、もはや絶望的な戦

局の中で、殉国の英霊達は、我が身を挺して、命を捧げて守ろうとしたもの、死を賭けて守ろうとしたものは、祖国のためであり、郷土のため、家族や愛する人の為、まさしく「日本の未来のため」であり、後世の「我々のため」なのであった。そうした尊い命を捧げて玉碎された同胞同僚の思いを、田中氏は、どうしても伝え語り繋げていく事こそ、かつての戦友達への追悼であると、今もなお氏の、命を削らなければかりの活動をされている姿が、痛いほど伝わってきます。弔っても弔っても辛いと思いません。そして現代の空中挺進部隊Ⅱ空挺に、先人達の「志」を遺し、是非とも受け継いで貰いたいと、心の底から願っておられるのだと思います。

さて、受け継ぐ事が使命である我々空挺現職隊員は、では何をすればいいか？今出来ることは、隊員一人一人がそれぞれの立場で先人達の偉業を正確に学ぶことであり、その精神を全員が空挺隊員の絶対不可欠な「資質」として確実に身につけて行くこと云々。：空挺隊員として時代が違えども、先人に近い「死生観」を確立すること、そして、それら大切な空挺の魂を脈々と継承していくことが、志を受け継いでいくことだと私は思います。

以前、徒手格闘訓練隊の監督を拝命していた頃、夏の全国社会人大会で初めて優勝できて、ご褒美(?)に沖繩での転地訓練を許可して頂いた。那覇駐屯地に到着し荷物を置いて直ぐに、沖繩地連のご好意でマイクローに乗込み、読谷村役場のほとりサトウキビ畑との境目に建つ「義烈空挺玉碎の地」を初めて訪れることができた。皆で手を合わせながら、ここがかつて、強行突入した北飛行場跡地であり英霊たちが激しく戦って玉碎した地なのか？と思うほど、そこは：海からの心地良い風がさわさわと草木をなびかせ、本当に穏やかに、あまりにも静かで平和的な夕暮れだっ

たことを思い出す。今回の冊子を読みながら「嗚呼、先人達はあの穏やかな風景を我々に残すために、尊い命を捧げて戦ったのだ。」と、改めて痛感している。さらに記録では「昭和20年5月24日22時11分頃、奥山大尉率いる義烈空挺隊が「只今突入」の無線を打電し。」とあり、あの夕暮れ時からほんの3時間あまりで、おそらく漆黒の闇の中で、勇ましく強行着陸して突入されたんだなあ、より具体的なイメージを思い浮かべることができ、大変貴重な資料であると改めて感じることもできました。

○「熱き想い」

習志野に居る私達以上に先輩OBの方は具現し行動されています。元群3中隊で、銃剣道の猛者だった土井2曹(異動当時)は、沖繩に異動で帰ったから、年間を通じて休日などを利用し、読谷村役場の傍らに建つ「玉碎」の標柱の周りを何時誰が訪れてもいいようにと、丁寧に草むしりから小さいけどしっかりとした祭壇の用意から、何時訪れても綺麗に整備をされていたそうです。病にたおれられ、あまりにも早過ぎる最期に地元の沖繩空挺同志会の皆さんは深い哀しみにくれたそうです。我々はそういった先輩方の「志を受け継ぐ姿」も見本としながら、後輩達に、後を継いでくれるものたちへ熱い想いをつなげていかなければなりません。

この連載記事、前号でも申した通り現在私のもとに寄せられた読後感、今回掲載したものと同じ程あり、寄稿者に敬意と感謝の意をこめて全文を早く掲載したく、このような組版になりました。

昭和の日に思う

田中 賢一

一昨年祝日法が改正され、戦後緑の日と称されていた四月二十九日が、今年から昭和の日となった。申すまでもなく、この日は戦前の天長節即ち昭和天皇のお生まれになった日である。それが敗戦後GHQの差し金で天長節は廃止させられた。国民に休日を与えるためか、緑の日という意味不明の休日となった。

戦前は皇室関係に由来する祝祭日は

明治節(十一月三日) 明治天皇のお生

まれになった日、大正天皇祭(十二月

二十五日) 大正天皇の崩御された日

それと天長節があった。三代の天皇に

まつわる記念日があり、それぞれその

時代を偲ぶよすがとなった。それが明

治節を文化の日とは何だ。文化などと

いう極めて抽象的な言葉では、明治時

代を顧みることにほならない。ここで

は十一月三日のことはさておき、昭和

の日について考察してみよう。

昭和の日は昭和天皇の御盛徳を偲ぶ

とともに、波瀾万丈だった昭和という

時代を顧みる日にしなければ意味がな

い。先ず後者から述べれば、何といっ

ても大東亜戦争である。申したいこと

は数限りないが、私としては特攻とい

う古今東西に類を見ない戦法と烈士が

あったということである。お国の為、同胞の為、親兄弟の為、進んで我が身を投げ出した烈士が陸続とあったという史実は、我が民族史上の宝である。

東京裁判史観の後遺症がまだ完全に癒されていない現在では、このことについての認識は希薄であるが、いつかは特攻精神が日本民族に浸透する時が来ると信じている。そうならなければ民族の将来はない。

次は昭和天皇の御盛徳についてであるが、御製をもってそれを偲びたいと思う。

(終戦時)

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさともけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさともけり

ただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道

すすみゆくともいくさともけり

外国と離れ小島にのこる民の

うへやすかれとただいのるなり

(戦災地御視察)

戦のわざはひうけし国民をおもふ

心にいでたちて来ぬ

CD「あゝ特攻」とミニチュア 特攻勇士之像について

理事長 菅原 道照

会報「特攻」70号(62頁)に、藤田幸生理事の執筆記事で、特攻勇士之像第1号は、福井県護国神社へ奉納されることが決まった旨お知らせしましたが、その後、鹿児島県護国神社への奉納の件が急速に進展し、早くも本号で福井・鹿児島両県護国神社への奉納・建立除幕の儀が滞りなく終了した旨、報告することができました。

第3号は、世田谷山観音寺へ奉納されることとなり、来る9月23日(日)の第56回特攻平和観音年次法要(14時開式)に先立って、午前10時から除幕式を執り行う運びとなっております。像は、同寺の代官屋敷門に向かって右側に坐します地藏菩薩(代受苦・身代わり地藏)像(会報66号29頁参照)の向かって左側、道行く人の目に最も留まりやすい場所に建立されることとなります。

さらに、目下愛媛県では、偕行会と日本会議が中心となって、特攻勇士之像の建立運動が進められていますので、早晩、第4号像の愛媛県護国神社への奉納が実現するものと思われます。像の製造の効率上、5体同時に作製いたし

ましたが、予想外に早く像の建立・奉納が進んだことは、誠に喜ばしいことであります。

次に、去る3月30日の靖國神社における当協会主催の合同慰霊祭後の総会の席上、藤田理事から特攻勇士之像作製の原資を生み出した、CD「あゝ特攻」の頒布を援助するため、実物の5分の1大のミニチュア像を作製して、1体15000円で希望者に頒布する旨発表いたしました。その後、会報「特攻」71号送付の際に、着払いの購入申込み葉書を同封いたしましたところ、既に多くの方々からお申込みをいただき、早速、逐次お手元にお届けいたしております。

各ご家庭におかれましては、できるだけ人目に付きやすい場所に奉安して頂き、CDと共に、より広く「日本人の心」を伝えて行くことができます。う、お力添えを賜りたいと存じます。この際、CD及びミニチュア像を未購入の皆様にも、改めて、「日本人の心を伝える会」の運動に、ご協力を賜るようお願い申し上げます。

なお、お申込みは、葉書、FAX、電話にて当協会事務局あてにお願いいたします。代金は、像と共に振込用紙をお届けいたしますから、折り返しご送金願います。

「あゝ特攻」勇士之像(ミニチュア像)の頒布について

会員の皆様におかれましては、日頃から協会の活動にご理解、ご協力を賜り有り難うございます。

さて、会報70号(62頁)でお知らせ致しましたが、協会ではCD「あゝ特攻」を頒布して、その利潤で、全国各地にある五十二箇所の護国神社に、順次「あゝ特攻」勇士之像を奉納していく事業を推進中であります。

本年四月十三日には、最初の奉納が、福井県と鹿児島県で執り行われました。引き続き世田谷観音にも奉納される予定であります。

この像は、塚本哲デザイン事務所(代表塚本哲氏)が陸、海軍特攻隊員の多くの写真を元に、全特攻隊員の象徴としてデザインし、それに基つき小高勇氏の支援を得て、造形作家三原帯水氏、坂充央氏が原型を制作されたものであります。その結果、若々しく決意に満ちた、凛々しく力強い姿に完成しております。何かを私達に語りかけてくれるような気がします。

そこで協会は、この運動の促進化を願って、五分の1のミニチュア像を作成し、皆様のご家庭にお届けして、神棚、仏壇、床の間、書斎などに安置され、日々目に触れることにより、特攻勇士のことに思いを致す縁にして頂ければと考えて、去る三月三十日の総会出席者に諮り、基本的賛意をいただきました。

今の日本の国や自分達を大切に、少しでも良くしていこうという努力が、少しずつ積み重なっていくことが出来れば、それは素晴らしいことではないでしょうか。皆様のご賛同、ご支援を得て、本体の像の護国神社奉納事業が、促進されることを念ずる次第であります。どうか検討の程、宜しく願います。(以下略)

平成十九年五月吉日

会長 山本卓眞

